覚書：津阪東陽とその交友(一)

――安永・天明期の京都――

二宮俊博

要旨　本稿は、江戸期を代表する詩話の一つ『夜航詩話』等の著で知られる伊勢津藩の儒者、津阪東陽（宝暦六年［一七五六］～文政八年［一八二五］）が若き日々を過ごした京都での詩人や文人それに儒者との交友について述べたものである。東陽が在京した安永から天明八年までの間、当地の漢詩界は活況を呈していた。遊学の目的は古学を学ぶためであったが、それもさることながら、むしろ江村北海の門下を中心として、東陽の交遊範囲が大きく広がったことに成果があったと見られる。また同時期の大坂でも学藝の華が開いており、京大坂に学問修業のため来遊していた地方の儒者文人たちとも知り合う機会に恵まれた。都市での生活が見聞を広め人情の機微を知るのに得難い経験であったばかりでなく、まさにこうした人々との交流が詩的技量を高め学問を形成する上で東陽にとって大きな力になったことは、想像に難くないだろう。具体的に詩を読み解きながら、その交友のありさまを垣間見ていく。

キーワード　津阪東陽、安永・天明期、京都の漢詩界

はじめに

前稿において津阪東陽がその死を迎える前年に書いた「寿壙誌銘」に訳注を施したが、これは彼の自叙伝とでもいうべき内容を有する文章であった。ただこの種の文章の性格もあってか、若き日の東陽が遊学した安永・天明期の京都漢詩壇との関わりや文化十一年（一八一四）八月から翌年五月にかけての江戸帯在期における当地の漢詩人たちとの交流については、全く触れられていない。国会図書館蔵の写本『東陽先生詩文集』のうち『東陽先生詩鈔』（以下『詩鈔』）を繙くと、そこに登場する詩人文人や儒者はまことに多士済々ではなはだ興味深い。

そこで、今回はとりあえず京都での交友の一端を見てゆきたい。ただし、『詩鈔』は詩体別に編まれているが、そのうち巻二の五言律詩を缺いている。本来ならここに収められるべき京都遊学以前の詩から伊賀上野在任中までの作が抜けているのである。さらに、それぞれの詩体はおおむね年代順に配列されているとみてよいが、必

ずしもそうなってない場合もあるようで、その点些か注意を要する。

ところで、京都および江戸での交友については、すでに津坂治男氏の『津坂東陽伝』（桜楓社、昭和六十三年）に人名を挙げており、同じく『生誕250年　津坂東陽の生涯』（竹林館、平成十九年）にもやや簡略にこれを述べる。さらに揖斐高氏の『夜航余話』解説（新日本古典文学大系『日本詩史　五山堂詩話』所収。岩波書店、平成三年）にも簡にして要を得た記述があり、江戸漢詩研究の第一人者ならではの目配りの利いた指摘がなされている。その点からすれば、本稿は格別これといって新たな知見を呈示しているわけではないが、具体的に詩文を挙げてこれを読み解き、東陽ならびにその周辺の人物に対する理解を深めることにしたい。とはいえ、江戸漢詩の専家でもなく東陽周辺の詩人の集についての調べが及ばず充分ではない上に、肝心の漢詩文の読みにも心もとないところが多いという、ない尽くしの現状では、とりあえず覚書の二字を冠して内容の粗漏貧弱を糊塗するほかにない。専家の御示教を仰ぐとともに、不備な点は今後おいおい補ってゆきたいと思っている。

なお、本文中に取り上げた人物の略伝や生卒年については、近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、昭和六十年）、市古貞次ほか編『国書人名辞典』（岩波書店、平成三年～十一年刊）や長澤規矩也監修・長澤孝三編『改訂増補漢文学者総覧』（汲古書院、平成二十三年）を参照した。また各項目ごとに参考にした文献を挙げたが、汲古書院刊の『詩集日本漢詩』『詞華集日本漢詩』に収録されている関連する詩文集は、これを逐一明記しなかったものの、それらに附された佐野正巳氏の解題も参考になった。さらに詩に語釈を施す上で、岩波書店刊の『江戸詩人選集』全十巻（平成二年～五年）から教えられる点が多かったことも、ここに附記しておく。

安永・天明期京都の漢詩界

さて、東陽が京都での遊学生活をいつ始めたのか、その時期は実のところ明確ではない。津坂治男氏は「本格的に京都に住み着いて勉学に専念した」のを安永八年（一七七九）東陽23歳の頃かと推定されている。ただ、私見ではもう少し前に遡って安永三、四年18、19歳の時にはすでに京都での活動を始めており、当初は郷里との間を行き来していたのではないかと考えている。そのことは、具体的に詩を読むなかで改めて取り上げたい。そして天明元年（一七八一）十月に書かれた「夢を記す」と題する一文には、20歳頃のこととして「謬（あやま）って諸老先生の推奨する所と為り、猥（みだ）りに才子の称を窃（ぬす）み、筴（さく）を挟み觚を操り、群彦の間に周旋し、未だ嘗（かつ）て其の後に瞠若たらず」（『東陽先生文集』巻八）と述べており、詩人たちと交際し、人後に落ちずにいると自負している。

それでは、東陽が過した安永・天明期の漢詩界はいかなる状況にあったのだろうか。当時その長老格として中心にいたのが、東陽より四十一歳上の江村北海（名は綬、字は君錫（あざな）。正徳三年［一七一三］～天明八年［一七八八］）ならびに北海とは一歳違いの龍草廬（名は彦二郎、字は公美。正徳四年［一七一四］～寛政四年［一七九二］）であった。このうち、北海は明和八年（一七七一）に『日本詩史』を、安永三年（一七七四）には『日本詩選』、続いて同六年（一七七七）には続編を上梓していた。これらの評論集や詞華集には東陽の名はまだ見えぬものの、天明三年（一七八三）北海七十の時に総勢二三五名にも上る人々から寄せられた寿詩をまとめて刊行された『東山寿宴集』上下二冊には東陽の七律作も一首収められ、「津阪君裕　名は孝綽。常之進と称す。伊勢菰野の人」と記されている。なお、この前年に

は在京の文化人名鑑で住所録を兼ねた『平安人物志』の天明二年版が刊行されているが、そこには東陽に関する記載はない。

ついで天明六年（一七八六）、龍草廬の弟子にあたる岡崎廬門（名は信好、字は師古。享保十九年［一七三四］～天明七年［一七八七］）が五言律詩部・七言律詩部・五七絶句部の三部からなる『平安風雅』一巻を編んだ。それに載せられた詩人の数は一五五名。そのなかに東陽の作が二首採られている。なお、廬門は安永八年（一七七八）に草廬を盟主とする詩社、幽蘭社の同人や所縁ある詩人の作四百餘首を輯めて『麗澤集』五巻を編み、これを刊行している。

龍草廬の名は、東陽の詩に見あたらないが、北海については、これを先生と称している（『詩鈔』巻四、七律「江北海先生の河内に遊ぶを送る」）。ちなみに、東陽が先生と呼んでいるのは、先儒の藤原惺窩、中江藤樹、新井白石、伊藤仁斎・東厓父子で、その経書の解釈や文章に批判的であった荻生徂徠に対しても称した例が見えるが、いずれも同時代の者ではない。ただ皆川淇園（名は愿、字は伯恭。享保十九年［一七三四］～文化四年［一八〇七］）については、後述するごとく、その没後に先生と称したことがある。東陽は「寿壙誌銘」において「常の師無し」としているものの、少なくとも詩においては北海に師事していたとみなしてよさそうである。

ところで今、淇園の名を挙げたが、彼は当時、在京の学者として令名があり数多くの門下を擁していた。その他、学界では那波魯堂（名は師曾、字は孝卿。享保十二年［一七二七］～寛政元年［一七八九］）が阿波藩の召聘に応じて安永九年（一七七九）には京を離れ徳島に赴いたものの、後に幕府の儒官となり寛政の三博士の一人に数えられる柴野栗山（享保十九年［一八三四］～文化四年［一八〇七］）の姿もあった。一方、堀川の古義堂は伊藤東所（名は善韶。享保十五年［一七三〇］～文化元年［一八〇四］）が三代目となっていた。彼らのうちとりわけ詩学に造詣の深かったのは淇園で、明和八年に同い年の栗山の序を冠して唐詩を論じた『淇園詩話』を刊行しているし、天明四年には栗山や赤松滄洲と詩のサークル三白社を作っている。

それでは次に、東陽と交流の深かった詩人を幾人か取り上げてみよう。そのほとんどが北海門下かそれにつらなる人士である。

※江村北海については、新日本古典文学大系『日本詩史　五山堂詩話』（岩波書店、平成三年）の大谷雅夫「日本詩史解説」参照。また高橋昌彦「江村北海の前半生」（都留文科大学「国文学論考」第26号、平成二年）「江村北海年譜攷㈠」（同上「国文学論考」第49号、平成二十五年）がある。

このほか、京都の漢詩界については、『京都の歴史6伝統の定着』（学藝書林、昭和四十八年）第二第四節の「漢詩文壇と『平安人物志』」（宗政五十緒執筆）参照。さらに高橋博巳『京都藝苑のネットワーク』（ぺりかん社、昭和六十三年）からも御教示を得た。

東陽の詩友――小栗明卿・太田玩鷗・巖垣龍渓・清田龍川・伊藤君嶺・大江玄圃・大江伯祺・永田観鵞・端文仲

小栗明卿（宝暦十三年［一七六三］～天明四年［一七八四］）

明卿について『東山寿宴集』には「名は煥。宗吉と称す。小濱の人。今、平安に在り」と記す。東陽より七歳下。それぞれ伊勢や若狭から笈を負って上京し、同じく古学を志していた。そもそも東陽が京に遊学した理由の一つが、伊藤仁斎の遺風に憧れを抱いていたことによるが、東陽より数年後れて上京したと思われる明卿の場合も、おそらく同様であったろう。両人には京の地に足を踏み入れて間もないと思われるころ、嵯峨の二尊院に詣で仁斎の墓を展した作があるのも、奇縁と言えば奇縁である【資料編①】。二人は出会ってすぐに意気投合し、東陽にとって明卿は「畏友」とも「知己」と

も称すべき存在となった【資料編②】。かくして餘暇には連れだって山水に遊んだり、ともに堂上公家の詩筵に列したりしたが、天明四年（一七八三）正月、22歳で病歿した。東陽は明卿の弟、十洲を慫慂して遺稿集を世に出すのに奔走尽力し、知友の義捐金を募り、後述の巌垣龍溪に巻頭の序文を依頼し、自らも序を認めた。『常山遺稿』と名づけられたその集（内閣文庫蔵）には、江村北海の跋文も附されている【資料編③】。

明卿の訃報を聞いて詠じた詩がある。七律「明卿を哭す二首」（『詩鈔』巻四）がそれで、次のように詠じられている。

平生懐抱向君開　平生の懐抱　君に向って開き
名士殊將德行推　名士は殊に徳行を将て推す
嘆命還偏吟楚些　命を嘆きて還た偏へに楚些を吟じ
説詩空自憶匡來　詩を説きて空しく自ら匡来を憶ふ
脩文地下千秋技　文を地下に脩む千秋の技
授簡王門上客才　簡を王門に授く上客の才
音容髣髴猶疑梦　音容髣髴として猶ほ夢かと疑ひ
腸斷夜烏啼月哀　腸断す夜烏　月に啼いて哀し

○平生懐抱　日頃の胸中に抱いている思い。盛唐・杜甫の七律「厳大夫に奉侍す」詩に「一生の懐抱誰に向って開かん」と。○徳行　孔門の四科（徳行・言語・政事・文学）の第一。○楚些招魂歌。『楚辞』の宋玉「招魂」で句末に〈些〉字を用いることからいう。北宋・黄庭堅の五古「懐を元翁に寄す」（『山谷外集』巻十）に「明窓玉を懐く友、清絶楚些を吟ず」と。○説詩云々　『漢書』匡衡伝に「諸儒之が為に語りて曰く、詩を説くこと無かれ、匡鼎に来たる。鼎に来たらば人の頤を解く」と。『蒙求』巻上の標題に「匡衡鑿壁」がある。もとは『詩経』の詩をいうか、ここではいわゆる漢詩のこと。○修文　杜甫の五律「李常侍嶧を哭す二首」其一に「一代の風流尽き、文を修めて地下深し」と。『書言故事』巻五、祭奠類に「文人の死を挽して文を地下に修むと言ふ。三十国春秋に蘇韶卒す。後、従弟の節、韶を見る。節因って幽冥の事を問ふ。韶曰く、顔回・卜商は見［現］に地下の修文郎為り」と。『太平御覧』巻八八三、神鬼部三に引く王隠の『晋書』にも見える。〈修文郎〉は、冥土で文書作成を掌る官。○授簡　詩文を作るよう命じられる。南朝宋の謝恵連「雪の賦」（『文選』巻十三）に梁王と司馬相如との問答を仮構して「簡を司馬大夫に授けて曰く、子の秘思を抽き、子の妍辞を騁せ、色を侔くし称を揣り、寡人の為に之を賦せよ」と。○音容髣髴　生前の声や姿がほのかに浮かぶ。〈髣髴〉は、双声語。

其二

追懐往事轉傷情　往事を追懐すれば転た情を傷ましむ
何幸與君聯璧名　何の幸ひぞ君と聯璧の名あり
周易楚騷同講習　周易楚騷　同に講習し
春花秋月伴吟行　春花秋月　伴に吟行す
病來猶贈新詩藁　病来　猶ほ贈る新詩稿
宦暇能尋舊社盟　宦暇能く尋ぬ旧社盟
寒雨蕭條孤舘夜　寒雨蕭条たり孤館の夜
淚沾衾枕梦難成　涙衾枕を沾して夢成り難し

○聯璧　優れた人物を併称する言い方。西晋の潘岳と夏侯湛とが容姿麗しく、いつも一緒にいると都人は聯璧と称したという。『蒙求』巻上の標題に「岳湛連璧」。『書言故事』巻三、訪臨類に、この語を挙げ、「二客同に至る者を称して連璧賁臨と」と。○楚騷　『楚辞』の「離騒」。○講習　議論しあって学習する。『易経』兌卦の象伝に「麗沢は兌なり。君子以て朋友講習す」と。○宦暇　勤務の暇なとき。○旧社盟　かつて同じ詩社に属した文学仲間、詩友。○蕭条　もの寂しいさま。畳韻語。○衾枕　（掛け）布団と枕。

明卿が没してから、二十ほど後、齢五十近くになった東陽に次のように題した七絶（『詩鈔』巻八）がある。

「雨夜偶閲故友小栗明卿遺稿、感念平昔、若在初歿。掩巻憯然泣下不已。奚啻聞山陽笛經過黄公酒壚也。嗚呼、斯人而不幸短命、若天假之以年、蔚為當代文宗、豈不重可惜哉。余獨何人、徒保頑躬、行年垂五十而名不稱焉。將竟如此而没、其亦可哀也已。因以涙和墨、書感於巻末。三首」

（雨夜偶々故友小栗明卿の遺稿を閲するに、平昔を感念し、初めて歿するに在るが若し。巻を掩いて憯然として泣下りて已まず。奚ぞ啻に山陽の笛を聞き黄公の壚を経過するのみならんや。嗚呼、斯の人にして不幸短命、若し天の之に仮するに年を以てすれば、蔚として当代の文宗為らん、豈に重ねて惜しむ可からざらんや。余独り何人ぞや、徒に頑躬を保ち、行年五十に垂なんとして名称せられず、将に竟に此の如くして没せんとす、其れ亦た哀れむ可きのみ。因って涙を以て墨に和し、感を巻末に書す。三首）

○若在初歿　まだ亡くなったばかりのような気がする、という意。『世説新語』傷逝篇に晋・庾亮の語として「亡児を感念すれば、初めて没するに在るが若し」と。○憯然　心痛むさま。○山陽笛　竹林七賢の一人、西晋の向秀が友人の嵇康・呂安を偲んで作った「思旧の賦」（『文選』巻十六）を踏まえた表現。『書言故事』巻十二、笛類に「山陽聞笛」を挙げ、「晋の向秀、山陽に在り、聞くに隣人の笛を吹く者有り、声を発すること嘹亮、追って曩時嵇（康）王（戎）遊宴の好を想ひ、昔に感じて思旧の賦を作る」と。王戎のこととするのは、俗本ゆえの誤り。『蒙求』巻上の標題にも「向秀聞笛」がある。○黄公壚　黄さんの酒場。これも竹林の七賢の一人、王戎が栄達した後、店の前を馬車で通り過ぎ、昔は嵇康や阮籍とここで大いに飲んだものだと回想したという（『世説新語』傷逝篇）。○斯人云々　孔子が不治の病に罹った弟子の伯牛（冉耕）に対して発した「斯の人にして斯の疾有るや」（『論語』雍也篇）という嗟嘆の語および愛弟子顔回を悼んだ言葉「不幸短命して死せり」（雍也篇・先進篇）に拠る。○天仮云々　この言い方、古くは『左氏伝』僖公二十八年に「天之に年を仮し、而して其の害を除けり」と。○余独何人　三国・魏の曹丕「王朗に与ふる書」に「余独り何人ぞ、能く其の寿を全うするや」と。○頑躬　頑健な身体。

思えば天明八年正月晦日に発生した大火で一切合財を失くし、尾羽打ち枯らして帰郷したが、幸いにも寛政元年（一七八九）33歳の時、郷里の津藩に儒者として迎えられ仕官ができた。とはいうものの、それ以来ずっと支城のある伊賀上野でくすぶり続け、文雅に携わるのを快しとしない山崎闇斎派の偏狭な儒者との対立軋轢に苦しみ、気がつけばいつの間にやら不惑はとうに過ぎて知命の歳が目前に迫っている。東陽には『論語』の「四十五十にして聞ゆること無くんば、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ」（子罕篇）という言葉や「君子は世を没して名の称せられざるを疾む焉」（衛霊公篇）という文言が胸に突き刺さってくるようで、このまま成すこともなく山国に埋もれてしまうのか、といった不安や焦燥感を募らせていた。そんな時、亡友の遺稿集を久しぶりに繙いてみたのである。詩題に三首というが、実際に記されているのは二首。秋夜の静かな雨音は人を内省的にさせ過去への追憶を呼び覚ますものだが、二十年近くも昔のことが、ありありと今思い出される。

詩酒交歓洛水樓　詩酒交歓　洛水の楼
毎逢花月互相求　花月に逢ふ毎に互に相求む
秋風寒雨孤燈下　秋風寒雨　孤燈の下
忍更凄凉憶昔遊　更に凄涼として昔遊を憶ふに忍びんや

○洛水　ここでは鴨川を指す。○花月　春花秋月。

其二

往事茫茫獨自悲　往事茫茫　独自悲しむ
百年難復遇心知　百年復し難し心知に遇ふを
黯然相憶魂銷盡　黯然として相憶うて魂銷尽す

風雪都門送我時　風雪都門　我を送る時
○百年　一生涯。○心知　知己。○黯然云々　六朝梁・江淹「別れの賦」（『文選』巻十六）に「黯然として銷魂する者は唯だ別れ而已矣」と。

明卿が元気なころは、わが寓居にもよく訪ねてきてくれた。妻も足音で彼だとわかったほどで、春雨に降りこめられ、読書にも倦んで話し相手が欲しいと思っていると君があらわれた。

五絶「明卿至る」二首其一（『詩鈔』巻六）

閑窓倦讀書、春雨鬱陶情　閑窓讀書に倦む、春雨鬱陶の情
不用通名姓、家人識履聲　名姓を通ずるを用ひず、家人履声を識る

○鬱陶情　朋友を思う気持ち。六朝斉・謝朓「中書省に直す」詩（『文選』巻三十）に「朋情以て鬱陶たり、春物方に駘蕩」というのに基く。なお、この詩は『古文真宝』前集にも載せるが、六朝宋・謝霊運の作とする。俗本ゆえの誤り。ただし、東陽が最初に親しんだのは、『古文真宝』であろう。

また明卿が入京間もなく東陽の寓居に身を寄せていた時分であろうか、花見に誘われて出かけ、帰って来たら一勉強するつもりが、すっかり酔って脇息にもたれたままグウグウ高鼾。はっと目が覚めたら午前零時ごろ、隣の書斎ではまだ読書に励んでいる。ああ、自分は何をしているのだ、浮かれ気分の己れが恥ずかしい。

七絶「明卿に贈る」（『詩鈔』巻七）

花宴歸來酩酊餘　花宴帰り来る酩酊の餘
春窓隱几月升初　春窓几に隠る月升る初め
三更一覺鼾々夢　三更一たび覚む鼾鼾の夢
慙媿隣齋尚讀書　慙媿す隣斎尚ほ書を読むに

○鼾鼾　鼾の音。唐詩には見えず、北宋・蘇軾の「庚辰歳正月十二日、天門冬酒熟し、予自ら之を漉す」云々と題する七律二首の其二に「睡息鼾鼾自ら聞くを得たり」とある。

勉強と言えば、こんな詩も作っている。

「日が沈む頃になると打ち水をしたように清々しい風が勉強部屋に吹いてくる。勉強するには今からが掻き入れ時、寸暇を惜しんで読書に励んでいる。人は誘い合って鴨川に夕涼みにゆくのだが」。

七絶「明卿が夏夕読書に和す」（『詩鈔』巻七）

庭樹蔥蔥隔夕陽　庭樹葱葱夕陽を隔つ
清風如水灑書堂　清風水の如く書堂に灑ぐ
分陰自惜三餘業　分陰自ら惜しむ三餘の業
人誘東川去納涼　人は誘って東川に去きて納涼す

○葱葱　あおあおと生い茂るさま。○分陰　わずかな時間。寸暇。『世説新語』政事篇の劉孝標注に引く『晋陽秋』に陶侃の語として「大禹は聖人なるに猶ほ寸陰を惜しむ。凡俗に至っては、当に分陰を惜しむべし」と。『晋書』陶侃伝にもほぼ同様の語が見える。○三餘業　読書、勉強のこと。三国魏の董遇が勉強するなら三餘の時を以てすべきで、冬は歳の餘、夜は日の餘、雨降りは時の餘だと言った故事（『三国志』魏書、王粛伝の裴松之注に引く魚豢『魏略』）による。『蒙求』巻下の標題に「董遇三餘」がある。

とはいえ、日頃は互いに切磋して学問に励んでいるだけに、「佳節に逢ふ毎に君を邀へて酔い、幾処の名山か我を誘ひて行く」（『詩鈔』巻四、七律「明卿の忌日に梅を折って冢に上る」）のは、格好の気晴らしであり、何よりの楽しみでもあった。

かかる明卿は内大臣広幡前豊（寛保二年［一七四二］～天明三年［一七八三］）の寵遇を得ていた。その遺稿中には広幡公の命を受けて詠じた作が幾つか収められている。公は文学好きで知られ「此殿儒士を召さるゝに、官位の有無をばいはず、何れも同じ所に召入れ、膝すり寄せて文作り物語などし給ひける」（『落栗物語』）という闊達

な一面を有していた。この広幡前豊に仕えていたのが次に挙げる太田玩鷗である。ただし、明卿の遺稿中には玩鷗や序文を書いた巌垣龍溪の名は見あたらない。

※『落栗物語』については、新日本古典文学大系『当代江戸百物語　在津紀事　仮名世説』（岩波書店、平成十二年）所収の多比治郁夫校注『落栗物語』参照。

太田玩鷗（延享二年［一七四五］～文化元年［一八〇四］）

『日本詩選』の作者姓名には「賀象　甲賀氏、字は伯魏、玩鷗と号し、栄助と称す。京師の人。嘗て伊勢に遊び、業を南宮喬卿に受く。後に京師に還り、江邨綬兄弟に従遊す」と。安永四年（一七七四）版・天明二年版『平安人物志』にその名が記載され、『東山寿宴集』『平安風雅』にも見える。東陽より十一歳上。伊勢で南宮大湫（字は喬卿。享保十三年［一七二八］～安永七年［一七七八］）に学んだといえば、医術を学び庄屋を務めた東陽の父、山田房勝（享保十七年［一七三二］～寛政十一年［一七九九］）も宝暦三年（一七五三）大湫が尾張から伊勢にやってきた際に同好の士と相談してこれを隣村の卯川原（鵜河原。現在の菰野町下村）に招き、その講義を聴いたことがある（『文集』巻六、「先考節翁居士行状」）。こうした縁も、玩鷗との間にはあった。

さて、玩鷗は天明三年に江村北海の序を冠した『玩鷗先生詠物百首』を上梓。当時、広幡家に仕え従六位下近江介であったが、当主の前豊が亡くなった後、天明四年頃にはこれを辞し、塾を開いて漢学を講義・講釈すること、すなわち舌耕によって生計を立てていたらしい。そうした素浪人の暮らしぶりが、やはり同様の生活で何とか身過ぎ世過ぎをしていた東陽の共感を呼んだのであろう、『詩鈔』巻一に七言古詩として分類されている「舌耕歌、賀伯魏に贈る」があり、次のように詠じている。

吁嗟先生何其苦
蛟龍卻為魚黿侮
結髪漫期稽古力
功名直可唾手致*」
螢窓雪案惜分陰
蓬蒿没人深閉戸
業成經學最紛綸
挨天才藻亦絶倫」
勤哉吾道苦心務
三十已見二毛新
千金虚費屠龍技
逢掖終自誤斯身」
家徒四壁何所有
傑傑宛如喪家狗
更無負郭二頃田
設帳舌耕聊餬口」
皐比坐盡朝又昏
諄諄誨人良亦煩
雑沓烏集戸履満
輕薄動輒不酬恩」
家計況是桂玉地
長安物貴居不易
豈知天下大先生
進退維谷憑誰寄」
君不見自古才高反轗軻
何物智力無奈何
郢曲由來和歌少
齊竽自是濫吹多」

吁嗟　先生何ぞ其れ苦しむ
蛟龍却って魚黿の為に侮らる
結髪　漫に期す稽古の力
功名　直に手に唾して致す可し」
螢窓雪案　分陰を惜しみ
蓬蒿人を没して深く戸を閉づ
業成り経学最も紛綸
天を挨かす才藻も亦た絶倫」
勤むる哉吾が道　苦心務む
三十にして已に見る二毛の新たなるを
千金　虚しく費やす屠龍の技
逢掖　終に自ら斯の身を誤る」
家は徒だ四壁　何の有する所ぞ
儻儻として宛も喪家の狗の如し
更に負郭二頃の田無く
帳を設け舌耕して聊か口に餬す」
皐比坐し尽くす朝又た昏
諄諄として人を誨ふ良に亦た煩はし
雑沓烏集し戸に履満つ
軽薄動もすれば輒ち恩に酬いず」
家計況んや是れ桂玉の地
長安物貴く居ること易からず
豈に知らんや天下の大先生
進退維れ谷まり誰に憑りて寄せん」
君見ずや古自り才高きは反って轗軻
何物ぞ智力　奈何するとも無く
郢曲　由来歌に和するもの少なし
斉竽　自づから是れ濫吹多し」

世事憒憒何乃然　世事の憒憒たる何ぞ乃ち然る
人生窮達命在天　人生の窮達　命は天に在り
行藏順時善自愛　行藏　時に順ひ善く自愛せん
優游卒歳舊青氈」　優游して歳を卒へん旧青氈」

○蛟龍　優れた人物の喩え。その反対が〈魚黿〉で、つまらぬ輩。〈黿〉は、大スッポン。○結髪　成年に達すること。『薈蕞録』巻下に「結髪」の条あり、それには「其少小時ヲ云フナリ」と。○稽古力　学問の力。〈稽古〉は、古のことを調べ考えること（『尚書』堯典）。後漢の桓栄が太子少傅となった時、門下生を集め、下賜された品をならべて、「今日の蒙る所、稽古の力なり」といったという（『後漢書』桓栄伝）。『故事必読成語考』巻下、文事には「文に因って銭を得る、乃ち稽古の力と曰ふ」と。○唾手致　容易にできる意。＊〈致〉字だと去声寘韻で、上声麌韻の〈苦〉〈侮〉と韻を踏まない。ここは同韻の〈取〉字にすべきところである。

○螢窓雪案　いわゆる蛍の光、窓の雪で勉学に励むこと。○分陰　わずかな時間。寸暇。前出「明卿が夏夕読書に和す」詩の語釈参照。

○蓬蒿没人　庭が荒れ果て、人の背丈よりも高く伸びたヨモギの類が生い茂る。『蒙求』巻下の標題に「仲蔚蓬蒿」。○紛綸　学問が広くて深いこと。『後漢書』井丹伝に井丹（字は大春）は詩・書・易・礼・春秋の五経に通じていたので、都で「五経紛綸井大春」との評判が立ったという。『蒙求』巻上の標題に「井春五経」。○掞天才藻　輝かしい文才。西晋・左思「蜀都の賦」（『文選』巻四）に「藻を擒り天庭を掞かす」と。

○吾道　孔子の教え。『論語』里仁篇に「吾が道は一以て之を貫く」と。○三十云々　西晋の潘岳は三十二歳で白髪が生えたという。「秋興の賦の序」（『文選』巻十三）に「余、春秋三十有二、始めて二毛を見る」と。〈二毛〉は、黒い毛と白髪。なお、東陽30歳といえば、天明六年にあたる。七律「興を遣る」（『詩鈔』巻四）に「未だ年三十にならずして鬢蒼蒼たり」と。〈蒼蒼〉は、白髪まじりのさま。

○屠龍技　龍を殺す技。実際には使い道がないことから、役立たずの学問。『荘子』列禦寇篇に「朱泙漫、龍を屠ふることを支離益に学ぶ。千金の家を単す。三年にして技成る。而して其の巧を用ふる所無し」と。○逢掖　儒者の着る服（『礼記』儒行篇）。○誤斯身杜甫の五古「韋左丞に贈り奉る」詩（『古文真宝』前集）に「儒冠多く身を誤る」と。

○家徒四壁　家財道具が一つもないこと。前漢の司馬相如の故事。『書言故事』巻七、貧乏類に、この語を挙げる。○儽儽　疲れはてたさま。○喪家狗　宿なし犬。『史記』孔子世家に鄭国の人が弟子とはぐれて城郭の東門にひとり立つ孔子を評して「纍纍然として喪家の狗の若し」と。東陽の『薈蕞録』巻下に『孔子家語』困誓篇を挙げて「疲レテ瘦セ衰ヘタル状ヲ浪人ノ龍鍾タル様ニ比シ、儽然如二喪家狗一ト云ヘルナリ」と。○負郭二頃田　戦国の蘇秦が洛陽近くにそこそこの田地（負郭二頃田）を有していたら、六国の宰相の印を佩びることもなかったろうにと言った故事（『史記』蘇秦伝）。『薈蕞録』巻上、「負郭」の条に「負郭トハ、郭ノ背ナル処ナリ。スベテ城下近辺ノ田ハ何方ニテモ膏腴ナリ。且何物ヲ種テモ近ク売テ善價ヲ得ベシ」と。○設帳　私塾を開く。○餬口　（粥を啜る意から）暮らしを立てる。『故事必読成語考』巻十、師生に「教館を講するに口に餬すと曰ひ、又た舌耕と曰ふ」と。

○皐比　虎の皮。敷物に用いる（『左氏伝』荘公十年）。転じて講義の席。○諄諄　懇切丁寧に教えるさま。『詩経』大雅「抑」に「爾に誨ふる詢詢」と。○誨人　『論語』述而篇に「人を誨へて倦まず」と。○烏集　烏合と同じ。『漢書』谷永伝に「烏集雑会」の語がある。

○戸履満　人が多く集まること。『荘子』列禦寇篇に「戸外の履満てり矣」と。

○桂玉地　京都をいう。『書言故事』巻十一、都邑類に「桂玉之地」

を挙げ、『戦国策』楚策に蘇秦が威王に説いた言葉のなかに「食は玉より貴く、薪は桂より貴し」云々とあるのを引く。○長安云々　中唐の白居易が初めて首都長安に出てきた時、先輩詩人の顧況が「長安は百物貴く、居ること大いに易からず」とからかったという（『唐摭言』巻七、『唐才子伝』巻六）。○進退維谷　にっちもさっちもいかなくなる。『詩経』大雅「桑柔」に見える語。

○君不見　楽府や歌行体に用られる、相手に呼びかけ同意を求める表現。○轗軻　不遇なさま。双声語。○郢曲　高雅な歌曲。戦国楚・宋玉の「楚王の問に対す」（『文選』巻四十五）に、国都の郢で、下里巴人という通俗な曲を歌うとそれに和する者が数千人いたが、高雅な曲になるとそれが減り、陽春白雪の曲だと数十人しかいなかったという。○斉竽・濫吹　無能な者が才能あるごとく見せかけること。戦国斉の宣王は三百人編成で竽（笙の一種）を吹かせ、ある男ができもしないのにそれに加わり禄にありついたが、次の湣王が一人一人の演奏を好むと、逃げ出した（『韓非子』内儲説上）。

○憒憒　乱れるさま。○窮達　困窮と栄達。後漢の班彪「王命論」（『文選』巻五十二）に「窮達命有り、吉凶人に由る」と。○命在天　運命は天にある。『尚書』西伯戡黎に「我が生、命天に在る有らざらんや」と。○行蔵　世に出ることと隠れること。出処進退。『論語』述而篇に「之を用ふれば則ち行なひ、之を舎つれば則ち蔵る」と。

○優游卒歳　のんびりと歳月を過ごす（『晋書』山簡伝）。なお、『左氏伝』襄公二十一年に叔向の語として「詩に曰く、優なる哉游なる哉、聊か以て歳を卒へんと」と。西晋の杜預は『詩経』小雅の句とするが、それには見えない。○旧青氈　杜甫の五古「任城の許主簿と与に南池に遊ぶ」詩に「晨朝白露降る、遥かに憶ふ旧青氈」と見え、東晋の王献之が盗賊に家財道具一切ばかりか青氈まで奪われようとしたとき、それだけは勘弁してくれ「我が家の旧物、特に之を置く可し」といった故事（『晋書』王献之伝）を踏まえる。吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊（筑摩書房、昭和五四年）に「ふるさとの家の古だたみ」と訳す。後年の伊賀上野での作「秋感二首」其一（『詩鈔』巻五）にも「吾が家の旧物独り青氈」と。

寸暇を惜しんでひたすら勉学に励んでいた若い頃は、儒者として功名を立てるなど容易だと思っていたが、今や三十、苦労のため白髪も交じり、これといった家産もないまま、塾を開いてしがない講師暮らし。京洛の地は物価が高く、生活も楽ではない、と訴えている。自らを〈先生〉〈天下の大先生〉と称するあたり多分に諧謔味を帯びた表現で、まだ精神的余裕のあるところを見せてはいるものの、舌耕生活の苦しさは、同様の暮らしをしている玩鷗がいちばんよく理解共感してくれるに違いない。さればこそ、このような歌を贈ったのであろう。あまりにも講師稼業が忙し過ぎると、心静かに硯に向かい筆を執って詩文を作る暇もない。これでは、文雅風流を敵視し、しかつめらしく道学を説く偏狭な老いぼれ儒者とまるで変わらないと、自嘲気味に詠じたこともあった。

七絶「講餘戯れに成る」（『詩鈔』巻七）

廢來筆硯自生塵　　筆硯を廃し来たって自ら塵を生ず
日夜書堂挾筴人　　日夜書堂　挾筴の人
面貌可憎皐比座　　面貌憎む可し皐比の座
儼然道學老頭巾　　儼然たる道学の老頭巾

○書堂　講義室。○挾筴　書籍をたばさむ。筴は策と同じ。もとは竹簡の意。『書言故事』巻三、学問類に挙げる。○面貌可憎　『李卓吾批点世説新語補』言語篇に、北宋・黄山谷（庭堅）の語として「士大夫三日書を読まざれば、則ち理義胸中に交はらず、便ち面貌憎む可く、語言味無きを覚ゆ」を挙げる。〈面貌〉云々は、もとは中唐の韓愈「窮を送る文」（『韓昌黎集』巻三十六）に見える表現。○皐比座　講義の席。○儼然　いかめしいさま。○道学老頭巾　山崎闇斎派の道学者を指していう。

なお、後年の話になるが、北海門下で『日本詩史』の序を書いた柚木綿山（名は太玄、字は仲素。天明八年没）の甥にあたる柚木南畝（字は孟穀）が、京で開塾したがっていると知って、東陽はこれを思いとどまるよう手紙を書いている。それには講師稼業のしんどさばかりでなく、京都での暮らしにくさ、具体的には都人の巧言令色なる一面やしみったれぶりを説き、自身の体験から発した深切な忠告をしている（『文集』巻十、「柚木南畝に与ふ」）【資料編③】。

なお、この「舌耕歌」は、『詩鈔』では天明六年作の「夜蓮華王院の試射を観る歌」の後に置かれているから、同年以後の作であろう。すると詩中にいう〈三十〉は実際の数字と見てよさそうである。

さらに同じような内容の作は他にもあり、七絶「戯れに伯魏に答ふ」詩（『詩鈔』巻七）には、次のように云う。

結髪勤渠便抱經　結髪　勤渠して便ち経を抱く
業成逢掖竟伶俜　業成なるも逢掖竟に伶俜
還應菜色充溝壑　還って応に菜色　溝壑に充つべし
誰意詩書恁不靈　誰か意はん詩書恁く不霊なるを

○結髪　成年に達すること。「舌耕歌」に既出。○勤渠　つとめる意。双声語。六如の『葛原詩話』巻一に「勤渠ノ義、東涯ノ蓋簪録ニ辨ズ」とした後、詩語に用いた例として南宋・陸游の例を二つ挙げ、「イズレモ務ノ意ナリ」と説く。○抱経〈経〉は、儒教の経典。○逢掖　儒者の着る服。「舌耕歌」に既出。○伶俜　うらぶれるさま。畳韻語。○菜色　飢えた顔色。『蓍瓚録』巻上「菜色」の条参照。○溝壑　西晋・左思「詠史」詩八首其七（『文選』巻二十一）に「其の未だ時の遇はざるに当たりては、憂ひは溝壑に填まるに在り」と。○恁　俗語で「カク」と訓じる。釈大典の『詩語解』『文語解』に見える。○不霊　霊験がない、効き目がないこと。

学問はしたけれど、その甲斐もなく、どこまで続く泥濘ぞ、と泣き言を洩らしている。

京を離れて後、仕官がかなった伊賀上野での作に七律「懐を伯魏・公績に寄す」詩（『詩鈔』巻四）があって、後述の清田龍川（公績）と併せて二人に対して、日頃周囲の同僚には口にできない思いの丈を吐露したこともあった。

壯歲文華舊社盟　壯歳の文華　旧社盟
共將頭角競先鳴　共に頭角を将て先鳴を競ふ
獨憐寒霧投山國　独り憐れむ寒霧　山国に投じ
長恨春風別帝京　長く恨む春風　帝京に別るるを
花月芳樽一場夢　花月芳樽　一場の夢
萍蓬老淚各天情　萍蓬老涙　各天の情
皐比自媿頭巾氣　皐比自ら媿づ頭巾の気
辜負洛陽才子名　辜負す洛陽才子の名

○壮歳　『礼記』曲礼上に「二十を弱と曰ひ、冠す。三十を壮と曰ひ、室有り」と。○文華　文才。○旧社盟　前掲「明卿を哭す二首」其二の語釈参照。○頭角　中唐・韓愈「柳子厚墓誌銘」（『韓昌黎集』巻三十二）に「嶄然頭角を見す」と。『蓍瓚録』巻上「見頭角」の条に「頭角トハ頭形角状（アタマツキツノフリ）ノ稜稜ト竦エテ、リリシク際ダチタルコトナリ」とし、用例を挙げて「年少ノ才ヲ称ス、才気面貌ニ見ハレテ際ダチテ抜群ナル勢ナリ」という。○先鳴　敵の城に先登して大呼すること。一番乗り。古くは『左氏伝』襄公二十一年に見える語。○萍蓬　浮草（萍）のように漂いムカシヨモギ（蓬）のように風に吹かれてさすらう。○一場夢　はかない春の夜の夢。○各天情　離ればなれでいることによって抱く感情。「古詩十九首」其一（『文選』巻二十九）に「相去ること万里餘、各おの天の一涯に在り」と。○皐比講席。○頭巾気　こちたき道学者の臭気。『蓍瓚録』巻上、「頭巾気」の条に「道学家ヲ頭巾気ト言ハ俗ニシャラクサイト言フコトナリ、モノ〳〵シゲニ子細ラシキヲ謂フナリ」云々と説くのを参照。○辜負　そむく。○洛陽才子　西晋・

潘岳「西征の賦」（『文選』巻十）に前漢の賈誼について「賈生は洛陽の才子」と。

京都にいた時は、頭角をあらわし文才ある新進だと目されていたものだが、今ではしかつめらしい教師稼業。あれほど嫌っていた「頭巾の気」に染まりそうで、我ながら全くいやになる。離群索居の身で不如意な現状に対する苛立ちが自嘲の度合いを深めてゆくのである。

さらに伊賀上野での作に七絶「京師の旧社を懐ひ、公績・伯魏の諸友に寄す六首」（『詩鈔』巻八）があって、春夏秋冬それぞれに愉しく過ごした詩社の集まりを懐かしむとともに、やるせない心情を訴えているが、玩鷗に対しては七律「遥かに伯魏が感遇の作に同ず二首」（『詩鈔』巻五）を寄せている。

窮鬼胡為到處隨　窮鬼胡為ぞ到る処随ふ
賢才多見不逢時　賢才多く見る　時に逢はざるを
歎餘欲擲班生筆　歎餘　擲たんと欲す班生の筆
老去猶垂董子帷　老い去きて猶ほ垂る董子の帷
伏櫪安堪羈*驥足　櫪に伏して安んぞ驥足を羈するに堪えんや
入宮無奈妬蛾眉　宮に入って蛾眉を妬むを奈ともする無し
倦游吾亦龍鍾甚　倦游　吾れも亦た龍鍾甚だし
同病相憐更自悲　同病相憐れみ更に自ら悲しむ

＊羈は羈の誤字。

○感遇　自らの境遇に対する感慨を詠じた詩。初唐の陳子昂に五古「感遇三十八首」、張九齢に「感遇十二首」がある。○窮鬼　貧乏神、疫病神。韓愈「窮を送る文」（『韓昌黎集』巻三十六）に見え、智窮・学窮・文窮・命窮・交窮の五鬼を挙げる。○擲班生筆　〈班生〉は、後漢の班超。『書言故事』巻六、志気類に「投筆」の語を挙げ、「班超嘗て筆を投げ、嘆じて曰く、大丈夫当に功を異域に立て、以て侯に封ぜらるるを取るべし。安んぞ能く筆硯を事とせんや」と。○垂董子帷　〈董子〉は、前漢の儒者、董仲舒。『蒙求』巻中の標題に「董生下帷」がある。○伏櫪馬が櫪（厩舎の飼馬桶）に頭を垂れる。三国魏・曹操「歩出夏門行」に「老驥伏櫪に伏すも、志は千里に在り」と。○羈　繋ぐ。束縛。○驥足　駿馬の脚。優れた才能の喩え。○蛾眉　美しい女性の眉。美女をいう。後宮に入れば周囲から嫉妬される。仕官の身とて同じこと。『楚辞』離騒に「衆女余の蛾眉を嫉み、謠諑して余以て善く淫せりと謂ふ」と。○倦游　他郷での仕官にあきあきする。西晋・陸機「長安有狭斜行」（『文選』巻二十六）に「本と倦遊の客」と。○龍鍾　病み疲れるさま。畳韻語。○同病相憐　同じような不幸な目にあった者同士が互いに同情する。『呉越春秋』闔閭内伝に「同病相憐れみ、同憂相救ふ」と見える。

其二

老來豪氣盡消磨　老来　豪気尽く消磨し
堪嘆此生愁裡過　嘆くに堪ゆ此の生　愁裡に過ぐるを
人事變遷驚夢幻　人事の変遷　夢幻に驚き
世途艱險困風波　世途の艱険　風波に困ず
壯年祇道青雲志　壮年祇だ道ふ青雲の志
長夜空悲白石歌　長夜空しく悲しむ白石の歌
誰念為儒身自誤　誰か念はん儒と為って身自ら誤るを
悠悠踪跡竟如何　悠悠たる踪跡　竟に如何

○豪気　他に屈しない盛んな意気。元・趙孟頫の七律「秋に驚く」（『松雪斎文集』巻四）に「向来豪気消磨して尽き、空しく年光に対して浪自に驚く」と。○夢幻　『金剛般若経』に「一切有為の法は、夢幻泡影の如し」と。○青雲志　栄達せんとする志。初唐・張九齢の五絶「鏡に照らして白髪を見る」（『唐詩選』巻六）に「宿昔青雲の志、蹉跎す白髪の年」と。○白石歌　時運に恵まれない隠者の歌。春秋・寧戚の「飯牛歌」に「南山研たり、白石爛たり。生きて堯と舜の禅りに逢はず（中略）昏従り牛を飯いて夜に薄る、長夜漫漫として何

れの時にか旦けん」とあるのに拠る。○身自誤　「舌耕歌」の「逢掖終に斯の身を誤る」と同じ意味。その語釈参照。○悠悠　とりとめもないさま。○踪跡　足跡。

最後にもう一首、『詩鈔』巻五の七律「賀伯魏に答ふ」を紹介しておく。

清福元知造物慳　清福　元と知る造物の慳しむを
塵泥醍醐宦途間　塵泥　齷齪す宦途の間
詩稱作者聊衝口　詩は作者と称し聊か口を衝き
官列儒曹且抗顔　官は儒曹に列し且く顔を抗ぐ
與世迂疎多忤俗　世と迂疎して多く俗に忤ひ
及身彊健好登山　身の強健なるに及んで好く山に登る
老來豪氣銷磨盡　老来　豪気銷磨し尽き
不似當年酒膽豩　似ず当年酒膽の豩なるに

＊醍醐は齷齪の誤字。

○清福　俗事に煩わされず閑雅な時間を過ごす至福の時。それは〈造物〉、この世界を造った自然の神様が出し惜しみして、容易には与えてくれぬもの。○齷齪　こせこせする。畳韻語。○宦途　官界。役所勤め。○抗顔　厳めしい顔つきをして教えること。中唐・柳宗元「韋中立に答へて師道を論ずる書」（『柳河東集』巻三十四）に「顔を抗げて師と為る」と。○迂疎　世事にうとく実務に適しない。○豪気　前詩の語釈参照。○酒膽豩　撰明・陳耀文『天中記』巻四十四に『漢皐詩話』を引いて「酒膽豩　豩字、（反切による字音表示で）呼閑の切（クァン）。当に山字の韻に在るべし。劉夢得に盃前膽不豩、趙勰に呑缸酒膽豩の句有り。礼部韻に収めず、唐韻も亦た無し」と。なお、同様の記事は南宋・姚寛の『西渓叢語』巻上にも見える。〈豩〉は、怯まぬ意。

「今では豪気がすっかり消え失せ、かつては酒を前にして怯むことなく幾らでも飲んだのに、酒量がめっきり落ちました。」

玩鷗は、寛政六年（一七九四）頃、江戸で淀藩主稲葉正諶に招かれ、藩儒となったというが、上野でのこれら東陽の作は、その頃のものであろうか。「同病相憐れむ」という言葉が同じ仕官の身の上、似たような境遇を物語っているように思われる。

※太田玩鷗については、堀川貴司氏に「太田玩鷗の詠物詩―十八世紀後半京都詩壇一斑―」（「国語と国文学」平成三年七月号）、「太田玩鷗伝資料片々」（「太平詩文」第六号、平成九年）がある。また停雲会同人（青木隆・杉下元明・杉田昌彦・鈴木健一・日原傳・堀川貴司・堀口育男）による『玩鷗先生詠物百首注解』（太平書屋、平成三年）も参照。

巌垣龍渓（寛保元年［一七四一］～文化五年［一八〇八］）

『日本詩選』の作者姓名には、「巌垣彦明　字は亮卿。号は君水。大舎人、長門介。資性学を好み、奉職の外、日夜筆硯に従事す。京師の人」と。『東山寿宴集』にも見え、『平安風雅』には「岩垣彦明字は孟厚、号は龍渓、又た松蘿館。長門介」とある。その遠祖は伊勢安濃郡の出という。東陽より十五歳上。当時京都で漢詩界のみならず広く藝文の世界での世話役ともいうべき存在であったようで、詩社を主宰し、先に挙げた『常山遺稿』や『玩鷗先生詠物百首』もそうだが、幾つか詩文集の序跋を引き受けている。例えば、これも前述の明和八年刊の『淇園詩話』の跋、これは龍渓が皆川淇園に教えを乞うたことがあるのによるが、後述の端文仲『春荘賞韻』の序、六如の『葛原詩話』の序などもそうである。

東陽がいつ龍渓と知り合ったか、はっきりしないが、七律「巌垣孟厚に贈る」（『詩鈔』巻四）には、年長者の龍渓から青眼をもって迎えいれられたと述べている。魏末晋初の阮籍は、気に入った相手には青眼で、そうでないと白眼で接したという（『蒙求』巻下、「阮籍青眼」）。その上、偶然かあるいはその口利きによるものか、いず

れにせよこの時に東陽が借りた家の隣がなんと龍渓の住まいで、事あるごとに招いてくださる。詩文は清新で手だれのあざとさがなく、志操堅固にわが道をしっかり守っていらっしゃる。書物が山と積まれ、門下は俊才ぞろいで、何とも羨ましいかぎり。座敷の襖に描かれた絵は高々とした山に広々とした水をイメージさせ、そこから妙なる調べが流れ出てくるかのよう。これだけでもはや音楽はいるまい、と詠じている。ちなみに、安永四年・天明二年版の『平安人物志』に拠れば、龍渓の住所は富小路夷川上ル町であった。

青眼忘年分誼深　青眼　年を忘れて分誼深し
墻東居接毎招尋　墻東　居接し毎に招尋せらる
文章初發芙蓉色　文章初めて発く芙蓉の色
志節後凋松柏心　志節後に凋む松柏の心
家富圖書堆滿室　家は図書に富み堆く室を満たし
塾優多士養成林　塾は多士に優れ養ひて林を成す
畫堂山水峨洋趣　画堂の山水　峨洋の趣
不用更論絃上音　用ひず更に絃上の音を論ずるを

○分誼　交誼。○墻東　垣根の東側。なお、城東の意もあり、「世を避く墻東の王君公」と評された後漢の王君公の故事（『後漢書』逢朋伝）から、隠者の住まいを指す。ちなみに、六律「卜居二首」其一（『詩鈔』巻三）に「分に随って墻東に世を避く」、七律「漫成二首」其一（『詩鈔』巻四）に「墻東世を避く別乾坤」とあるのは、その例。○初発芙蓉　自然で清新であること。『南史』顔延之伝に、鮑照が謝霊運の詩を評して「謝の五言は初めて発く芙蓉の如し、自然愛す可し」と。○後凋松柏　『論語』子罕篇に「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るることを知る」と。○多士　多くの優れた人物。『詩経』大雅「文王」に「済済たる多士、文王以て寧し」と。○画堂　ここでは襖絵のある座敷の意であろう。○峨洋　山が高々と聳え水が広々と流れる。伯牙が琴を弾くのに高山をイメージすると鍾子期は「峩峩として泰山のごとし」と称え、流水だと「洋洋として江河のごとし」と讃えたという故事（『列子』湯問篇）から出た語。

それから、年の暮れに龍渓の自宅に招待されて飲んだことを詠んだ六言律詩もある。「巖舎人孟厚の書堂に夜飲む」（『詩鈔』巻三）。

臘天年例邀樂　臘天年ごとに例ね楽しみを邀め
款待憐*交誼敦　隣交を款待して誼敦し
竹雪窓明夜靜　竹雪　窓明らかにして夜静かに
茶烟屋潤冬温　茶烟　屋潤ひ冬温かし
才當筆陣誰敵　才は筆陣に当たり誰か敵せん
福占書城自尊　福は書城を占めて自ら尊し
塵世偏勞歲事　塵世偏へに歳事に労す
醉鄉肥遯忘言　醉鄉に肥遯して言を忘る

＊憐は隣の誤字であろう。

○臘天　十二月。○邀楽　『荘子』徐無鬼篇に「吾れ之と楽を天に邀め、食を地に邀む」と。○竹雪　晩唐・司空図の七絶「偶詩五首」其五に「中宵茶鼎沸く時驚く、正に是れ寒牕竹雪明らかなり」と。○茶烟　茶釜から立ち上る湯気。○筆陣　詩文を書くこと。その構成布置を軍陣に喩えていう。杜甫の七古「酔歌行」（『古文真宝』前集）に「筆陣独り千人の軍を掃ふ」と。○書城　明の陳継儒『太平清話』巻二に「宋の政和の時、都下の李徳茂、墳籍を環集し、名づけて書城と曰ふ」と。○酔鄉　気分のいい酔い心地。初唐の王績に「酔鄉記」がある。○肥遯　世俗を離れて悠悠自適すること（『易経』遯卦上九）。○忘言　『荘子』外物篇に「言なる者は意に在る所以なり、意を得て言を忘る」と。

師走の忙しさをよそに、のんびりと茶をたて、酒の陶然とした酔い心地に身を委ねる。そうした俗世間と一線を劃した市中の小天地は、さらに七律「歳杪、巖舎人の松蘿館に遊ぶ」（『詩鈔』巻四）にも描

かれている。

冬天雪後日還喧　　冬天雪後　日還た喧し
良宴幸逃塵事繁　　良宴幸に逃る塵事の繁きを
便見階庭林影靜　　便ち見る階庭林影の静かなるを
不妨門巷市聲喧　　妨げず門巷市声の喧しきを
琴中流水殊堪聽　　琴中の流水　殊に聽くに堪え
世上浮雲總莫論　　世上の浮雲　総べて論ずる莫し
更為梅花動春興　　更に梅花の為に春興を動かし
把杯看到月黄昏　　杯を把って看到すれば月黄昏

○不妨　かまわない。○流水　琴曲の名。○浮雲　『論語』述而篇に「不義にして富且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」とあるのをふまえ、不正な手段方法で得た富貴をいう。○月黄昏　北宋の林逋「山園小梅二首」其一に「暗香浮動す月黄昏」と。

また詩会に呼ばれて、その後、座敷から庭園に場所を移した酒の席でちと飲みすぎ、「月がとっても青いから」（清水みのる作詞）、つい我が家の前を通りすごしたという詩もある。七絶「寄せて巖垣孟厚に謝す」（『詩鈔』巻七）に云う、

朱李翠瓜金屈巵　　朱李翠瓜　金屈巵
詩筵夜向後庭移　　詩筵　夜　後庭に移る
醉將餘興仍乘月　　酔いて餘興を将て仍ほ月に乗じ
行過吾門了不知　　行きて吾が門を過ぎて了に知らず

○朱李　三国魏・曹丕「朝歌令の呉質に与ふる書」（『文選』巻四十二）に「甘瓜を清泉に浮べ、朱李を寒水に沈む」と。○翠瓜　杜甫の「解悶十二首」に「翠瓜碧李玉甃に沈む」と。○金屈巵　取っ手のついた金のさかずき。晩唐・于武陵の五絶「酒を勧む」（『唐詩選』巻六）に「君に勧む金屈巵」と。

これはあるいは、龍渓の別邸で催された詩会のことであったかもしれない。七律「巖舎人の東郊の別館に韻を探り、加字を得たり」と題する作（『詩鈔』巻四）があるが、こちらは春のそれ。会が終わったのが夕暮れ時。それからも一杯また一杯、朧月夜に漂う花の香。懇ろなもてなしにすっかり酔ってなかなか神興を挙げずにいたが、そろそろ御いとま申す。すっかり遅くなったと思いきや、市中はまだ賑やかにざわめいている。これなら帰り道を急ぐにおよぶまい。

栖雀林邸帶落霞　　栖雀の林邸　落霞を帯び
餘歡泥飲未廻車　　餘歡泥飲　未だ車を廻らさず
朦朧夜靜滄池月　　朦朧として夜静かなり滄池の月
馥郁春香雜樹花　　馥郁として春香る雑樹の花
終日杯盤情不淺　　終日の杯盤　情浅からず
滿堂絲竹興逾加　　満堂の糸竹　興逾々加はる
都門歸路宜無急　　都門の帰路　宜しく急ぐこと無かるべし
燈火熏天市尚譁　　燈火　天を熏して市尚ほ譁し

○落霞　夕焼け。○滄池　青緑色をした池。○糸竹　管弦。○熏天　勢いの盛んなこと。杜甫の五律「興を遣る五首」其一に「北里　富天を熏し、高楼　夜　笛を吹く」と。

ところで、この龍渓、今風に言えばイケメンで若い頃は色街でずいぶんともてたらしい。その粋な姿を祇園の老妓が覚えていると詠じた「戯れに巖舎人の感旧に和す」（『詩鈔』巻七）と題する七絶がある。

俊遊儀觀妙容姿　　俊遊の儀観　妙容姿
尚有東山舊妓知　　尚ほ東山の旧妓の知る有り
不分樓頭春月柳　　不分なり楼頭　春月の柳
風流張緒少年時　　風流の張緒　少年の時

○俊遊儀観　言葉は堅苦しいが、遊び慣れたる粋姿の意であろう。○東山旧妓　ここでは祇園の老妓をいうが、その語は『世説新語』識鑒篇の「謝公、東山に在りて妓を蓄ふ」を踏まえる。〈謝公〉は、東晋の謝安。会稽の東山に隠棲していた。○不分　東陽の『葛原詩

話糾謬』に「ガウガワクと訳す」と。六朝以来の俗語。杜甫の七律「路六侍御入朝するを送る」詩に「不分なり桃花錦に勝る」とあり、『杜律詳解』に「ハラガタツマイカハ」と左訓。拙稿「津阪東陽『杜律詳解』訳注稿(七)」参照。○春月柳　春の柳。優男の柔美な姿に喩える。東晋の王恭は、姿形美しく、「濯濯として春月の柳の如し」と評された（『世説新語』容止篇、『晋書』王恭伝）。〈濯濯〉は、みずみずしいさま。○張緒　南斉の武帝が宮殿の前に植えられた蜀柳を賞で、「此の楊柳風流愛す可し、張緒が当年の時に似たり」と感嘆したという故事（『南史』張緒伝）に拠り、龍渓を喩える。

ちなみに、龍渓が四歳上の太田玩鷗と知り合ったのも、「花柳の巷」においてであったという（『玩鷗詠物百首』後序）。

さてその後、龍渓との交流は、東陽が津藩に出仕してからも続いた。寛政四年（一七九二）に龍渓は官を辞し、粟原すなわち黒谷山の別荘に隠棲したが、それを知らされた東陽は伊賀上野にあって七律「寄せて巌舎人孟厚が栗原の別墅に退隠するを賀し、兼ねて令嗣君哲に示す二首」（『詩鈔』巻四）を作っている。

また龍渓から作詩を続けているかと問われ、風流とは縁遠い田舎暮らしで打油詩（卑俗な詩）めいた駄作しかできず、かつては公家の詩会で指名に与った身が、今では火箸で囲炉裏の灰に字を書くありさまだと答えている。

七絶「巌垣孟厚に答ふ」（『詩鈔』巻八）

音書鄭重問風流　音書鄭重　風流を問ふ
莫恠詩詞類打油　怪しむ莫かれ詩詞の打油に類するを
授簡王門舊賓客　簡を授く王門の旧賓客
劃灰田舎火爐頭　灰を劃す田舎の火爐頭

○音書　書信。手紙。○打油　唐代、張打油が作った卑俗な詩（明・楊慎『升庵詩話』巻十四）。○授簡　前掲「明卿を哭す」詩の語釈参照。○田舎火爐頭　南宋・范成大の七律「南塘冬夜倡和」詩（『石湖居士詩集』巻五）に「為に問ふ灞橋風雪の裏、田舎火爐頭に何如ぞ」と見える。

※巌垣龍渓の略伝については、中野稽雪「巌垣長門介彦明先生略伝（前編）（中編）（後篇）」（「洛味」第二二一集・第二二二集・第二二三集、昭和四十六年二、三、四月）がある。また前掲『落栗物語』に附せられた多治比郁夫「巌垣竜渓と『落栗物語』の作者」参照。

なお、池大雅（延享三年［一七四六］～安永五年［一七七六］）に安永元年（一七七二）作の「楡枋園図巻」があり、龍渓の居宅を描いている。東陽が一時その隣に住んでいたというのは、この家であろうか。

ついでに記せば、東陽は三十四歳上の大雅にも会っているようだ。『文集』巻七に奥田三角（元禄十六年［一七〇三］～天明三年［一七八三］）の孫、恕堂（明和元年［一七六四］～文化十二年［一八一五］）の所蔵にかかる大雅「五嶽図」の箱書を認めた「大雅道人五嶽の図を観る。其の櫝蓋の背に書す」があり、「大雅池無名、本邦画品第一為り。余少くして嘗て相識る。其の人為ること冲澹、性に任せて自適す。満腔子雅韻、毫も塵俗の意無し。幾んど是れ神仙中の人。資くるに学殖徳義の気を以てす。他人の能く及ぶこと莫き所以爾」という。この文章は、すでに森銑三「池大雅」（『森銑三著作集』第三巻「人物篇三」。中央公論社、昭和四十六年）に全文が紹介されている。大雅が祇園の葛原草堂で没したのは安永五年四月十三日のことで、初春以来病褥に就くことが多かったという。東陽が京で面識を得る機会があったとすれば、その最晩年ということになる。

※大雅の「楡枋園図巻」については、横尾拓真「池大雅筆『楡枋園図巻』（大徳寺蔵）について―中国園林文化の受容と展開」（「美術史」64(2)、平成二十七年）がある。

清田龍川（寛延三年［一七五〇］～文化五年［一八〇八］）

『日本詩選』の作者姓名には、「清勲　字は公績。江邨綬の弟*［第］三子。嬰咳*［孩］他家に撫養さる。兄秉死するに迨んで、復た綬家に帰る。年已に弱冠、始めて学に就き、日夜読書、頗る天授有り。居ること二年、渉猟粗ぼ遍く、最も辞才有り。是に於いて綬弟君錦子無し、因って請うて嗣と為す。故を以て清田氏を姓とす、俗称大太郎」とあり、『平安風雅』にも採録。東陽より六歳上。君錦は、清田儋叟（名は絢、字は君錦。享保四年［一七一九］～天明五年［一七八五］）のこと。龍川は儋叟の後を継いで福井藩儒となった。『東山寿宴集』に見えることは言うまでもない。

東陽の作で早い時期のものは、七絶「公績が塞上の曲に和す四首」（『詩鈔』巻六）で、純然たる盛唐詩風の習作である。やはり七絶で「公績・仲素諸子、城東の僧院に納涼す、余は事有り従ふ能はず。佳興を想ふに目に在り、伯魏に附して此を寄す」（『詩鈔』巻七）と題する作がある。

皓月精藍夜色澄　皓月精藍　夜色澄み
寶池荷淨露華凝　宝池　荷浄くして露華凝る
薫風占斷清涼界　薫風占断す清涼界
徒在塵寰苦鬱蒸　徒に塵寰に在りて鬱蒸に苦しむ

○皓月　白く輝く月。明月。○精藍　仏寺。○荷　ハス。○露華　露の美称。○薫風　香しい風。中唐・白居易「首夏南池に独酌す」（『白氏文集』巻六十九）に「薫風南自り至り、我が池上の林を吹く」と。○占断　占め尽くす。○清涼界　僧院をいう。○塵寰　俗世間。○鬱蒸　蒸し蒸した暑さ。杜甫の五古「特進汝陽王に贈る二十韻」に「花月遊宴を窮め、炎天鬱蒸を避く」と。

龍川とともに東山にある寺に夕涼みに誘ってくれた仲素は、医を業とした柚木綿山のことか。東陽に「柚仲素知命の寿言」と題する六言絶句（『詩鈔』巻六）がある。伯魏は、太田玩鷗。

さらに、七夕の納涼を兼ねて鴨川西岸の三本木にある酒楼で一献酌み交わそうと、先の仲素および伊藤君嶺・永田観鵞・太田玩鷗らが集まった際には、今度は体調不良で行けず、これを羨ましがった。七律「七夕、仲素・士善・公績・俊平・伯魏、三樹岸の酒楼に涼を取る。余病みて赴かず、想ひて歓宴を羨み、因って此の贈有り」（『詩鈔』巻四）。

河漢清澄片月孤　河漢清澄　片月孤なり
病逢佳節獨長吁　病みて佳節に逢ふも独り長吁す
樓臺近水凉應好　楼台　水に近くして涼応に好かるべし
樹竹生風暑已徂　樹竹　風を生じて暑さ已に徂く
天上今宵慰離別　天上今宵　離別を慰むるに
人間何事失歡娛　人間何事ぞ歓娛を失する
詩成綵筆爭揮處　詩成り綵筆争って揮ふ処
能奪七襄雲錦無　能く七襄の雲錦を奪ふや無や

○河漢　天の川。「古詩十九首」其九（『文選』巻二十九）に「皎皎たる河漢の女」と。○片月　弓張月。中唐・李益の七絶「暁角を聴く」（『唐詩選』巻七）に「吹角城に当って片月孤なり」と。○長吁　長嘆と同じ。○佳節　めでたい節句の日。盛唐・王維の七絶「九月九日山東の兄弟を憶ふ」（『唐詩選』巻七）に「佳節に逢ふ毎に倍々親を憶ふ」と。○綵筆　五色の筆。優れた文才の意がある。杜甫の七律「秋興八首」其八に「綵筆昔曾て気象を干す」と。○七襄　『詩経』小雅「大東」に「跂たる彼の織女、終日七襄す。則ち七襄すと雖も、報章を成さず」と。明・周祈『名義考』には「織文の数」とする。○雲錦　雲紋のある錦。結句は、唐の則天武后が洛陽の龍門に行幸したおり、侍臣に詩を作らせ、最初にできた東方虬に褒美の錦袍を賜ったが、宋之問がすばらしい詩を作ると、これを奪って之問に与えたという「奪錦」の故事（劉餗『隋唐佳話』巻下。『唐才子伝』巻一、宋之問の条）を踏まえ、どなたがいちばん出来栄えの

よい詩を作られましたか、という意。

それから次に挙げる七絶「和して公績に答ふ」（『詩鈔』巻八）は、京都での暮らしが立ち行かなり、帰郷する決意を固めた頃の作であろう。

儒冠何事誤斯身　儒冠何事ぞ斯の身を誤る
宿志蹉跎要津路　宿志蹉跎す要津の路
三十無家漂泊客　三十家無し漂泊の客
好將妻子托誰人　好く妻子を将て誰人に托さん

○宿志蹉跎　前掲、張九齢詩の「宿昔青雲の志、蹉跎す白髪の年」を踏まえる。〈蹉跎〉は、ぐずぐずして時機を失すること。畳韻語。○三十無家　盛唐・綦毋潜の七絶「早に上東門を発す」詩（『唐詩紀事』巻二十）に「三十家無く路人と作る」と。○漂泊　あてどなくさすらう。双声語。

其二

蒯緱彈盡一身孤　蒯緱弾じ尽くして一身孤なり
落魄無因涉世途　落魄して世途を渉るに因無し
宦學十年成底事　宦学十年　底事をか成す
田園歸去舊農夫　田園に帰り去らん旧農夫

○蒯緱　アブラガヤの縄を巻いた剣の柄。戦国斉・孟嘗君の食客馮驩は、蒯緱の剣一ふりがあるのみで甚だ貧乏であったが、「其の剣を弾じて謌」い、自分を優遇するよう求めたという（『史記』孟嘗君列伝）。○落魄　うらぶれること。畳韻語。○宦学　仕官のため学ぶこと（『礼記』曲礼上）。○底事　俗語的表現。なお、〈何〉は平字、〈底〉は仄字で、ここは仄字を用いる箇所。

「紈袴餓死せず、儒冠多く身を誤る」と歌ったのは盛唐の杜甫だったが、その後半生、縁故を頼り官職を求め家族を伴っての漂泊の旅を続けた偉大なる詩人も若い頃には「立ちに要路の津に上る」、すぐにも栄達して高い地位に駆け上るなぞ容易だと考えていた。自分もある意味同じだ。もとはと言えば郷士とはいえ百姓の倅、帰りなんいざ故郷の田園で百姓仕事をやろうか。

龍川との交流は、東陽の仕官後も続き、五律「和して公績に答ふ」（『詩鈔』巻三）には、次のように詠じている。

雲鴻呼友處、別恨悵相望　雲鴻友を呼ぶ処、別恨悵みて相望む
舊交書千里、曽遊梦一場　旧交　書は千里、曽遊　夢は一場
交情擬膠漆、索居奈參商　交情　膠漆に擬し、索居　参商を奈せん
何日論文興、重登風月堂　何れの日にか論文の興、重ねて風月の堂に登らん

○雲鴻　空高く飛ぶ鴻。○膠漆　ニカワとウルシ。親密な喩え。『蒙求』巻上の標題に「陳雷膠漆」。○索居　学友と離れて独りいること。『礼記』檀弓上に子夏が曾子から、その思い上がりをたしなめられて謝した言葉に「吾れ群を離れ索居すること、亦た已に久し矣」と。鄭玄の注に「群は同門の朋友を謂ふなり。索は猶ほ散のごとし」と。○参商　参宿（オリオン座の三つ星）と商宿（蠍座のアンタレス）で、同じ空のもと一度に見えることはない。『古文真宝』前集にも収める杜甫の五古「衛八処士に贈る」に「人生相見ざること、動もすれば参と商との如し」と。○論文　やはり杜甫の五律「春日、李白を憶ふ」詩に「何れの時にか一樽の酒もて、重ねて与に細かに文を論ぜん」と。

龍川は伊賀上野の東陽のもとに越前和紙の彩箋を送ってくれたこともあった。七絶「越州雲錦箋」（『詩鈔』巻八）の題下に「清文学の遺る所」という自注がある。

故人佳惠遠方來　故人の佳恵遠方より来たる
百種彩箋雲錦開　百種の彩箋　雲錦開く
悔惜常供等閑用　悔み惜しむらくは常に等閑の用に供して

探笥僅剰兩三枚　　笥(はこ)を探すも僅かに剰(あま)す両三枚

○雲錦　雲紋の錦。○等閑用　中唐・元稹の七絶「楽天の紙に書す」詩（『元氏長慶集』巻十八）に「拈将して等閑に用ふるに忍びず、半ばは京信を封じ半ばは詩を題す」と。

友人からのせっかくの贈り物なのに、ありきたりの日用品みたいに使ってしまい、文箱を探しても二三枚しか残っていないという。

なお、寛政元年（一七八九）に『龍川詩鈔』が刊行されたが、河内の儒医北山元章（享保十六年［七三一］～寛政三年［一七九一］）の序を巻頭に置き、ついで巌垣彦明の「龍川詩稿に題す」、太田玩鷗の「龍川詩集の序」が載せられている。

伊藤君嶺（延享四年［一七四七］～寛政八年［一七九六］）

『日本詩選』の作者姓名に「伊藤栄吉　字は士善。君嶺と号す。本姓塩田氏、播州北条邑の人。伊藤君復の嗣と為り、職を襲って越藩の文学」と。『平安風雅』にも採録。伊藤君復は、伊藤錦里（宝永七年［一七一〇］～明和九年［一七七二］）のこと。江村北海・清田儋叟の長兄。君嶺は安永六年（一七七七）に北海および儋叟の序を冠した『日本咏物詩』三冊を編纂刊行した。前述の清田龍川の従兄にあたり、東陽より九歳上。

嵯峨野に雪景色を見に往き、君嶺の詩に次韻した作がある（『詩鈔』巻四、七律「嵯峨雪望、伊藤士善に次韻す」）。その後半四句に云う、騒々しく何かを争う鷺の群れ、林の木々には雪の花。もっと寒くたってかまいはしない、度月橋の前には酒を売る店がある（「水を隔てて群れを争ふは都(すべ)て是れ鷺、林を圧して斉しく発するは花に非ざるは無し。妨げず寒冽を祈るを、度月橋前酒を売る家」）。

また夜訪ねてくれたこともあった。五絶「士善に夜過ぎらる」（『詩鈔』巻六）に云う、

風月酒中趣、何必綺羅席　　風月　酒中の趣、何ぞ綺羅の席を必せん

這些骨董羹、與君永今夕　　這些の骨董羹、君と今夕を永うせん

○風月　清風明月。○酒中趣　飲酒の深い味わい。晋末宋初の陶淵明「晋の故の征西第将軍長史孟府君伝」に見える。○綺羅席　美しく着飾った妓女の侍る宴席。○這些　これらの。近世以来の俗語。○骨董羹　魚肉や野菜のごった煮。北宋・蘇軾の著とされる『仇池筆記』に「羅浮の穎老、飲食を取りて之を雑烹し、骨董羹と名づく」と。○永今夕　『詩経』小雅「白駒」の「之を縶(ちう)し之を維し、以て今夕を永うせん」から出た語。〈縶〉を〈維〉も、つなぎとめる意。

「野菜の炊き合わせしかありませんが、今宵はじっくり飲みましょう」。

ある年の仲秋、君嶺と龍川との三人で東山に月を観る約束をしたが雨で果たせず、わが借家で一杯やったと題する詩もある。七絶「中秋、士善・公績と東山に遊ぶを約す。雨に遇ひて果たさず、予が僑居に小酌す。虚字を分韻す」（『詩鈔』巻七）。

聯壁*相迎照艸廬　　聯壁相迎へて草廬を照らす
雲陰遮莫月華虚　　雲陰　月華の虚しきに遮莫(まか)す
若非風雨妨行樂　　若(も)し風雨の行楽を妨ぐるに非ざれば
濁酒爭能此駐車　　濁酒争(いかで)か能く此(ここ)に車を駐めん

＊壁は、璧の誤字。

○聯壁　「明卿を哭す二首」其二に既出。○遮莫　任す。釈大典『文語解』に、この語を挙げ「俚語ノカマワヌナリ」と。「サモアラバアレ」は旧訓。○月華　月。

「りっぱなお二方がお見えになって、わがあばら家もぱっと明るくなったような気がします。曇り空が月の光を隠しても、それはそれでかまいません。もし雨でもなければ、濁り酒しかない我が家に来ていただくわけにはまいりませんから」。

郷里に帰る時に、見送ってくれた君嶺に贈ったのが七律「伊藤士善に留別す」（『詩鈔』巻四）で、

落月都門曉色侵　落月都門曉色侵す
悽然別涙欲沾襟　悽然として別涙　襟を沾さんと欲す
歸來大澤深山境　帰り来る大沢深山の境
已矣攀龍附鳳心　已んぬるかな攀龍附鳳の心
流水無情亦嗚咽　流水情無きも亦た嗚咽す
浮雲含恨自陰沈　浮雲恨みを含んで自ら陰沈
殷勤久要平生好　殷勤にす久要平生の好
時復因風惠德音　時に復た風に因って徳音を恵め

○曉色侵　夜が白々と明けてくる。○大沢深山　『左氏伝』襄公二十一年に「深山大沢、実に龍蛇を生ず」と見えるが、かなりおおげさな表現。○攀龍附鳳　龍や鳳のようなりっぱな人々につき従う。○陰沈　どんよりとしたさま。畳韻語。○久要云々　『論語』憲問篇に「久要平生の言を忘れざる、亦た以て成人と為す可し矣」と。『書言故事』巻三、交情類にも、この語を挙げる、また同巻に「平生懽」の項あり、「素より相善きを平生の懽と曰ふ」と。○德言　善き言葉。

古くは『詩経』に見える語で、ここでは便りをいう。

別れをうらんで、本来感情をもたない渓流も嗚咽するかのよう、空に浮かぶ雲もすっかり暗く沈みこんでいる。「どうかこれまでの長い間の好で、時々は風にのせて便りを下さい」。

その後、伊賀上野に在って君嶺と龍川の二人に詩を寄せている。七絶「懐を士善・公績に寄す」（『詩鈔』巻八）に云う、

懷舊秋風望日邊　旧を懐ひ秋風　日辺を望む
長安不見白雲天　長安見へず白雲の天
一場春梦東流水　一場の春夢　東流の水
花月相將十五年　花月相将ふ十五年

○日辺・長安　東晋の明帝（司馬紹）が数歳の時、父の元帝（司馬睿）から長安と太陽とどちらが遠いかと尋ねられ、「日遠し。人の日辺従り来るを聞かず」と答えたが、翌日になると、「目を挙ぐれば日を見るも、長安を見ず」と答えた逸話（『世説新語』夙慧篇）をふまえる。○一場春夢　儚いことの喩え。五代・張泌の七絶「人に寄す」詩（『才調集』巻四）に「柱に倚りて尋思すれば倍々惆悵す、一場の春夢分明ならず」と。伊賀上野での作、七絶「浪華の旧遊を追憶し筆に信せて興を遣る二首」其一（『詩鈔』巻八）にも「一場の春夢旧風流」と。○東流水　過ぎ去って帰らぬもの喩え。中国の江河はおおむね西から東へと流れる。李白の雑言古詩「夢に天姥に遊ぶの吟、留別」に「世間の行楽亦た此の如し、古来万事東流の水」と。

○相將　行動を共にする。

京での暮らしは、春の花、秋の月それに浮かれて遊興三昧に明け暮れたわけでは決してなく、むしろ生活に追われ苦労する毎日だったが、思い出されるのは、そうした愉しかったことばかり。だが、それは今となっては儚い春の夜の夢、二度と帰らぬ青春の日々だった。ここで「十五年」というのを額面どおり受け取れば、安永三年東陽18歳、尾張の医師村瀬氏のもとを辞していったん郷里にもどり、その後ただちに上京したことになる。そして北海に入門し、そこで君嶺や清川とも相識となったのであろう。

大江玄圃（享保十四年［一七二九］～寛政六年［一七九四］）

『日本詩選』の姓名録に「大江資衡　字は稚圭、玄圃と号す。本姓某、久川靭負と称す、業を龍草廬に受く。京師に講説す」と。『東山寿宴集』にも見え、『平安風雅』には「大江資衡　字は穉圭、号は玄圃。久川靭負」。東陽より二十七歳上。伯祺（宝暦七年［一七五七］～天明八年［一七八八］）は、その長子で、藍田と号した。『日本詩選続編』に「大江維翰　字は伯祺、久川玄蕃と称す。玄圃の長子」と。『東山寿宴集』『平安風雅』にも見える。伯祺は東陽の一歳下。

「春日、大江伯祺に寄す」（『詩鈔』巻七）があって、次のように詠じている。

烟霞佳興阿誰携　　烟霞の佳興　阿誰携ふ
芳艸池塘緑正齊　　芳草の池塘　緑正に斉し
澹蕩東風春雨歇　　澹蕩たる東風　春雨歇み
垂楊橋下鵅鳩啼　　垂楊橋下　鵅鳩啼く

○烟霞　山水の春景色。○阿誰　俗語で、だれの意。〈阿〉は、接頭語。○池塘　池のつつみ。南朝宋・謝霊運「池上の楼に登る」詩（『文選』巻二十二）に「池塘春草生じ、園柳鳴禽変ず」と。○澹蕩　ゆったりとしてのどかなさま。駘蕩。双声語。李白の五古「相逢行」に「春風正に澹蕩、暮雨来ること何ぞ遅き」と。○垂楊　垂れ柳。○鵅鳩　鳩の一種。曇れば連れを追い払い、晴れると呼び戻すために啼くという。

また『詩鈔』巻四には七律「大江伯祺の江戸に宦遊するを送り、兼ねて大田公幹に寄す」詩、巻六には五絶「大江伯祺江戸に赴き過ぎりて草堂を訪ふ」詩があるが、ここでは前者を挙げておく。友人との別離や青春の放縦など、高揚した気分の非日常的世界を詠出する際には、唐詩それも『唐詩選』に選ばれるような感情の振幅の大きな表現がうまくあてはまるようだ。

才子高名振洛陽　　才子の高名　洛陽を振ふ
風流十載結交場　　風流十載　交はりを結びし場
鉛刀一割猶能斷　　鉛刀一割　猶ほ能く断つも
鐵摘三摧豈可當　　鉄摘三摧　豈に当たる可けんや
世上升沉皆有數　　世上の升沈　皆数有り
人間離會自無常　　人間の離会　自ら常無し
想看燕市悲歌士　　想い看よ燕市悲歌の士
慷慨相逢醉且狂　　慷慨相逢へば酔ひ且つ狂するを

○鉛刀一割　鉛製の刀でも一度は用いることができる意（『後漢書』班超伝）。鈍才の喩え。○鉄摘　竹簡に記録する際に用いた鉄筆。晋・葛洪『抱朴子』祛惑篇に孔子が晩年に易を好んで「韋編三たび絶え、鐵摘三たび折る」と。ここでは、伯祺の猛勉強ぶりをいう。○数命数。命運。○燕市　戦国・燕の市場。太子丹に招かれた荊軻が高漸離らと毎日酒を飲み、高漸離が筑（琴の一種）を撃ち、荊軻がそれに合わせて歌ったという（『史記』刺客列伝）。中唐・李渉の七律「魏簡能の東遊するを送る」に「燕市悲歌又た君を送る、目は征雁に従って寒雲を過ぐ」と。○悲歌士　中唐・銭起の五絶「侠者に逢ふ」詩（『唐詩選』巻六）に「燕趙悲歌の士」と。韓愈の「董邵南を送るの序」（『韓昌黎集』巻二十）に「燕趙古より感慨悲歌の士多しと称す」と。

詩題に見える大田元貞は、大田錦城（明和二年［一七六五］～文政八年［一八二五］）。加賀大聖寺の人。かつて京で皆川淇園の門をたたいたことがあり、那波魯堂・柴野栗山にも教えを乞うたが、その学問にあきたらず江戸に出ていた。東陽はいう、「伯祺よ、この十年つきあってくれてありがとう。君の高名は都に鳴り響いており、勉強ぶりではかないっこないが、この世での浮き沈みには決まった定めがあり、人の出会いと別れとは常なきもの。それを思えば、悲歌慷慨の士が大いに飲みハメを外して騒ぐのもわかろうというものさ」。この時、伯祺は天明の大火で家産を失い、江戸で仕官の口を見つけようとしていたのである。ところが道中で流行性感冒に罹り、江戸に入って二日で亡くなってしまう。寛政四年（一七九二）刊の『藍田遺稿』に附された「藍田先生墓銘」に云う、「戊申の災に罹り、家貲渾て竭く。是に於いて先生貧の為に禄仕を乞ひ、既にして東都に之く。会たま羈途に就き、疫邪に感し、疾を力めて東都に入る。居ること二日にして歿す。天明八年五月八日なり。年三十二」と。

その父、玄圃は東陽が津藩に出仕することになった時に、祝意を述べてくれた。伯祺と年がほとんど変わらぬ東陽に息子の姿を見る思いがしたのであろうか。それに答えたのが、七律「和して京師の

大江稚圭の予が筮仕するを賀して贈らるるに謝し、兼ねて岡崎師古・香山吉甫に寄す」（『詩鈔』巻四）。

雲樹相望嘆別離　雲樹相望んで別離を嘆ず
優游幾載在京師　優游幾載か京師に在る
聊充薄宦従容職　聊か充てらる薄宦従容の職
尚念窮途落魄時　尚ほ念ふ窮途落魄の時
敢展經綸參政事　敢へて経綸を展べて政事に参ぜんや
徒將句讀授童兒　徒に句読を将て童児に授く
山城寂寞論文友　山城寂寞たり論文の友
同社休慳寄近詩　同社　近詩を寄せるを慳しむを休めよ

○雲樹　杜甫の「春日李白を憶ふ」に「渭北春天の樹、江東日暮の雲」。○優游　ゆったりと過ごす。古くは『詩経』大雅「巻阿」に見える語。○薄宦　低い位階の軽微な勤め。○従容職　のんびりとした閑職。〈従容〉は、畳韻語。○窮途落魄　この表現は仕官後休暇を取って帰省した時の作、七古「解褐後、謁仮（休暇申請）して帰省す、途に在りて詠を成す」詩（『詩鈔』巻一）にも「窮途落魄十年来、艱難計尽き志摧けんと欲す」とある。〈落魄〉は、うらぶれて身を寄せるところもないありさま。畳韻語。○経綸　天下国家を治める計略（『中庸』）。○句読　韓愈の「師の説」（『韓昌黎集』巻十二、『古文真宝』後集）に「彼の童子の師は、之に書を授けて其の句読を習はす者なり。吾が所謂其の道を伝へ其の惑ひを解く者に非ず」と。○山城　伊賀上野をさす。

太田玩鷗に贈った「舌耕歌」にも見られるごとく、京都での生活が閑雅風流に終始したはずはないのだが、講師稼業の苦しさを含めて、今にしてこれを思えば輝かしい時間であったことには間違いない。たしかに京を離れ先が見えず行き詰まっていた時期のことを思えば、幸にも仕官できたのをとりあえずよしとしなければならないのだろうが、現状はといえば、大した職務でもなく安月給で子供相手の田舎教師。文学を語り合う友もおらず孤立している。最後は「かつての同人の諸先輩方、近作をぜひとも見せてください」と結ぶ。

ここに名の挙がっている岡崎師古は、廬門のこと。『日本詩選』の作者姓名に「平信好　字は師古。廬門と号す。岡崎氏。平太と称す。龍草廬の門人。京師に授徒す」と。『東山寿宴集』にも見える。東陽より二十二歳上。その編になる『平安風雅』に東陽の作が収められたことについては、前に述べた。ただし、ここで一つ気になる点がある。というのは、諸書に拠れば廬門は天明七年三月二十六日に病没しており、この詩が作られた時には既にこの世の人ではなかったはずなのに、その名を挙げていることである。東陽は六年の冬に一時帰省し七年の初夏には京にもどっているから（『文集』巻七、「遊春巻に題す」）、その逝去はちょうど京を留守にしていた時期にあたるけれども、それからずっと廬門の消息を知らずにいたとは考えにくいのだが、やはり知らずにいたのだろうか。この間の事情については不明。

香山吉甫は、香山適園（寛延二年［一七四九］～寛政七年［一七九五］）のことで、北海門下。『日本詩選』の作者姓名には「香山彰　字は吉甫。文内と称す。京師の人。江邨綬の門人」と。『東山寿宴集』にも見え、『平安風雅』には「字は吉甫。適園と号し、又た三楽と号す。大学と称す」と。東陽より七歳上で、『詩鈔』巻三に五言排律「香山吉甫の漫興に和す」がある。それによれば、名利に囚われず酒好きで「烟霞の癖」を有した人物であったようだ。その家は綾小路烏丸西入町にあったが（天明二年版『平安人物志』）、東山に別荘を持っていたようで、七絶「東山にて雨に値ひ東隴菴を過ぎる」詩（『詩鈔』巻七）があり、その自注に「香山吉甫の別業」という。本宅か別荘か不明だが、適園を訪ねた作もある（『詩鈔』巻七、七絶「適園を訪ねて主人の偶たま出づるに遇ふ」）。この適園は玄圃や師古と詩社を結び、東陽もそこに顔を出していたらしい。

永田観鵞（元文三年［一七三八］～寛政四年［一七九二］）

その名は明和版の『平安人物志』から見えており、『日本詩選』の作者姓名には「永田忠原　字は俊平。東皐と号す。京師の人。初め服伯和に師事す。伯和没して業を江邨綬に受く。詩思清雅、最も臨池を以て称せらる」と。『東山寿宴集』『平安風雅』にも見える。服伯和は、服部蘇門（享保九年［一七二四］～明和六年［一七六九］）。ちなみに、永田観鵞と同年生まれで、やはり当初、服部蘇門に師事し、その没後、北海に学んだ人物に三河出身の薩埵元雄（寛政八年［一七九六］没）がおり、東陽にはこの人に贈った詩も一首あるが、ここでは措く。観鵞は東陽の十八歳上。

天明八年、五十を迎えた観鵞に寿詞を贈っている（『詩鈔』巻四、「永田俊平知命壽詞」）。

結髪斯文惜寸陰　結髪して斯文　寸陰を惜しみ
看君未有二毛侵　君を看るに未だ二毛の侵すこと有らず
芝蘭香滿詩書室　芝蘭　香満つ詩書の室
桃李花開翰墨林　桃李　花開く翰墨の林
天下達尊稽古力　天下の達尊は稽古の力
人間至樂育英心　人間（じんかん）の至楽は育英の心
風流大筆臨池技　風流大筆　臨池の技
五朶雲飄絶古今　五朶雲飄（ひるがへ）り古今に絶す

○斯文　この学問の意（『論語』子罕篇）。儒学をいう。○未有二毛侵　白髪がないこと。前出「舌耕歌」の語釈参照。○芝蘭　〈芝〉も〈蘭〉も香草の名。『孔子家語』六本篇に「善人と居れば、芝蘭の室に入るが如し。久しくして其の香を聞かず、即ち之と化す」と。善人による感化をいう。○桃李　優秀な門下生の喩え。ちなみに、六如の「永観鵞を哭す十二韻」（『六如庵詩鈔』二編巻四）の自注に拠れば「晩年名は海内に聞こえ、門人は千を以て数ふ」という盛況ぶりであった。○天下達尊　この世の中でこの上なく尊ばれるもの。『孟子』公孫丑下に「天下に達尊三有り。爵一、歯（よはひ）一、徳一」と。○稽古力　前出「舌耕歌」の語釈参照。○人間至楽　この世での最高の楽しみ。○育英　英才を教育する。○臨池　後漢の張芝が池に臨んで書を学び、筆や硯を洗うためその水を真っ黒にした故事（『晋書』衛恒伝）から習字、書道をいう。

この詩には、以下のような自注が附せられている。「俊平、書は李北海に学び、嘗（かつ）て筆力を試みて麟鳳の二大字を書す。画くこと広さ数尺、径二丈五尺、遒勁殊勝、余、諸（これ）を稽古餘筆に詳かにす。五朶雲は、俊平創る所の筆名」と。李北海は、後漢の李邕。篆隷を善くした。観鵞が麟鳳の二文字を楷書で大筆したのは、当時有名な話柄で、森銑三「永田観鵞」に拠れば、安永三年（一七七四）のことであった。東陽の『稽古餘筆』は、現在伝わっていない。ちなみに、〈五朶雲〉の名は、『西陽雑俎』続集巻三に唐の韋陟の書が五朶雲（五色の雲）のようであった旨記した話を載せており、それから取ったのであろう。

なお、東陽には「永田周介遺金を拾ふの事を記す」（『文集』巻八）があり、森氏の文章にも紹介されている。これはまだ観鵞の暮らし向きが豊かでなかった頃の話である。――永田俊平は儒を業とし、家は貧しかった。子の周介が八歳の時、桶屋の子と北野天満に遊びに行って、方金（小粒金）一枚拾ったものの、それが何やらわからない。桶屋の子から金子だから大事にしまっておけよと言われたが、その子が玩具（原文は、轉輪戯糾索五綵者）を九文で買うと、それが欲しくてたまらなくなり、拾った方金と交換し、家にもどってからも嬉々として遊んでいた。しばらくすると桶屋の妻が申し訳なさそうに方金を返しにきたが、周介の母は受け取らない。今度は桶屋が来て返そうとすると俊平が断る。困った桶屋は町役に相談したところ、町役はその清廉ぶりに感嘆し、その金を等分することでまるくおさまったという話である。それに東陽の評が附せられており、

「嗟乎桶匠夫妻、生来半行の書も読まず、礼節義理、斯れ焉にか斯れを取らん（どこからこうした徳を身につけたのだろう）。蓋し俊平人と為り朴実、性、名利に恬たり、古の君子の風有り。隣里其の徳に化するなり。周介は即ち伯行の小字、酷だ乃翁（その父）に肖て、家声を墜さず」という。〈斯焉取斯〉は、『論語』公冶長篇に見える言い方。その周介こと永田西河（字は伯行。宝暦十一年［一七六一］～文化六年［一八〇九］）については、七絶「春日永田伯行に贈る」詩（『詩鈔』巻七）がある。なお、先に挙げた東陽の評には続けて「余嘗て此の事を質す。伯行時に成童、笑いて曰く、幼にして了了たらざる（ぼんやりしている）こと是の若し。庶幾はくは長じて了了たらざるを免れん」とあり、成童（十五歳）になった西河にその真偽を確かめた旨記しているが、そうすると東陽が20歳の時、すなわち安永五年には京に在住し、観鶩父子とはかなり親しかったことになる。

さて、この永田観鶩も東陽が京都を発って帰郷する際には太田玩鷗とともに送別の宴を催してくれた。『詩鈔』巻八に七絶「俊平・伯魏に留別す」詩がある。

梧窓淅瀝雨聲寒　梧窓淅瀝　雨声寒し
共惜風流十載歡　共に惜しむ風流十載の歓
杯酒慇勤永今夕　杯酒慇勤　今夕を永うす
天涯一別夢中看　天涯一別　夢中に看ん

○淅瀝　雨風や落ち葉の音。畳韻語。北宋の欧陽修「秋声の賦」（『古文真宝』後集）に「欧陽子、夜に方って書を読む。……初め淅瀝として蕭颯たり」と。○杯酒慇勤　前漢・司馬遷「任安に報ずる書」（『文選』巻四十一）に「僕、李陵と倶に門下に居る、（中略）未だ嘗て盃酒を銜み慇懃の餘に接せず」と。『書言故事』巻三、二）交情類、「接殷勤」の項にも引く。○永今夕　前掲「士善に夜過ぎらる」詩に既出。「この十年風流なおつきあい、愉しく過ごさせていただきました、今夜はゆっくり飲みましょう。ここでお別れしたら最後、二度とお目にかかる機会もありませんから、これからは夢で逢いましょう」。

ところで、これまで再三述べたように、仕官はしたものの、東陽にとって伊賀上野での職務は決して満足できるものではなかった。その不本意な現状を折にふれ在京の詩友の一部に洩らしていたが、永田観鶩にも同様の心情を吐露している。七律「和して俊平に答ふ」詩（『詩鈔』巻四）に云ふ、

休道榮官命運開　道ふを休めよ栄官命運開くと
苦寒山國最堪哀　苦寒の山国　最も哀しむに堪ゆ
安能鵬翼搏風去　安んぞ能く鵬翼　風を搏って去らん
宛是胡孫入袋來　宛も是れ胡孫　袋に入りて来たる
陰嶺嚴凝經臘雪　陰嶺厳凝たり臘を経し雪
凍林蕭索待春梅　凍林蕭索たり春を待つ梅
講堂畢竟村夫子　講堂　畢竟　村夫子
閑殺梁苑授簡才　閑殺す梁苑授簡の才

○休道　勿言（言ふ勿れ）の俗語的表現。○鵬翼云々　『荘子』逍遥篇に見える鵬の故事。○胡孫入袋　自由気ままにならぬこと。北宋・梅堯臣（聖愈）が唐書を修する勅命を受けた際、妻の刁氏に「吾の書を修するは、猢猻の布袋に入ると謂ふ可し」といったところ、「君の仕宦に於ける、亦た何ぞ鮎魚の竹竿を上るに異ならんや」と答えた故事による（北宋・欧陽修『帰田録』巻二）。〈胡孫〉は、サル。〈猢猻〉も同じ。〈鮎魚〉は、ナマズ。それが竹竿を上るとは、つるつる滑ってうまくいかないことをいう。栄達できない喩え。ちなみに、『蓍瓚録』巻下に「胡孫入袋ノ譬ハ尻カケ猿ノ困リタルヲ言フナリ、清君錦日本詩選跋、胡孫入袋鮎魚上竿、ト云ヒシハ選ニ入ルマジキ者ヲ載セテ入ルベキ者ハ漏ルコトニ用ヰタリ、大ニ誤レリ」と。なお、清君錦は、清田儋叟のこと。『日本詩選』の跋に「鮎魚竹に上り、王孫袋に入る、是れ何ぞ選に取らん」と見える。○厳凝　厳寒の意。

『礼記』郷飲酒義に「天地厳凝の気、西南に始まりて、西北に盛んなり」と。双声語。○蕭索　ひっそりとしたさま。双声語。○閑殺　ひどく暇なこと。〈殺〉は、程度の甚だしいことを示す。○梁苑授簡　前掲「明卿を哭す」詩の語釈参照。

「仕官できて君も運が開けてきたね、なんて言わないでください。しょせん山の学校の田舎教師、かつて都で鳴らした詩才を発揮する場もありませんから」。

この永田観鵞は、三熊花顛原著・伴蒿渓補の『続近世畸人伝』（寛政十四年［一七九八］）にも取り上げられているが、後述する六如上人に哭詩（『六如庵詩鈔』二篇巻四）があり、それを引いている。東陽の交友圏には今ひとりやはり畸人伝中の人物がいる。それが次に挙げる端文仲である。

※永田観鵞については、『森銑三著作集』第四巻「人物篇四」（中央公論社、昭和四十六年）に見える。服部蘇門との関係については、中野三敏『江戸狂者伝』（中央公論社、平成十九年）の「第七　蘇門狂狷」に詳しい。また『続近世畸人伝』については、宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』（平凡社東洋文庫、昭和四十七年）参照。

端文仲（享保十二年［一七三二］～寛政二年［一七九〇］）

『日本詩選』の姓名録に「端隆　字は文中。東都の人。家を京師に遷す。賈に隠る。詩才巧妙、但だ人と為り卑謙、名に遠ざかる。故を以て世人知る無し」と。天明二年版の『平安人物志』にその名が見え、『東山寿宴集』『平安風雅集』にも採録。東陽より二十四歳上。

東陽に安永八年以前の作とおぼしき七律「端文仲の越に適くを送る」詩（『詩鈔』巻四）があるのだが、どういう理由で暑い盛りに一人で越前へ赴くのか、この詩だけからはわからないものの、とりあえず次に挙げておく。

班馬蕭蕭曉色新　　班馬蕭蕭として曉色新たなり
浮雲流水旅行身　　浮雲流水　旅行の身
夷猶累顧都門月　　夷猶して累りに顧る都門の月
炎熱能衝驛路塵　　炎熱能く衝く駅路の塵
湖上勝遊張樂地　　湖上の勝遊　楽を張る地
郢中雅興知歌人　　郢中の雅興　歌を知る人
休嘆孤客無知己　　嘆くを休めよ孤客　知己無きを
吾道由來德有隣　　吾が道　由来徳に隣有り

○班馬蕭蕭　李白の五律「友人を送る」詩（『唐詩選』巻三）に「手を揮って茲自り去れば、蕭蕭として班馬鳴く」と。〈班馬〉は、前に進まぬ馬。○曉色新　夜が白々と明け始める。○浮雲流水　行雲流水と同じ。○夷猶は、ためらってぐずぐずするさま。双声語。○湖上　琵琶湖のほとり。○勝遊　よき旅。○張楽地　李白の五排「儲邕の武昌に之くを送る」詩（『唐詩選』巻四）に「湖は連なる楽を張る地」とあり、『荘子』天運篇の「黄帝、咸池の楽を洞庭に張る」をふまえる。○郢中　「舌耕歌」の〈郢曲〉の語釈参照。○吾道　孔子の教え、儒学。「舌耕歌」の語釈参照。○徳有隣　『論語』里仁篇に「徳は孤ならず、必ず隣有り」と。

この時、文仲は初めての越前行きであったらしい。それ故「御心配めさるな、かの地できっとよき出会いがありましょうから」と結ぶ。

また前詩よりは後の作になるが、同じく七律に「居を移し、和して端文仲に答ふ」（『詩鈔』巻四）がある。

數椽茅屋俯青郊　　数椽の茅屋　青郊に俯す
境靜更無塵俗淆　　境静かにして更に塵俗の淆ふ無し
詭計冒營三兎窟　　詭計肯へて営まんや三兎の窟
僑居姑占一鳩巢　　僑居姑く占む一鳩巢

庭池點水新荷葉　庭池　水に点す新荷の葉
隣苑過墻嫩筍梢　隣苑　墻を過ぐ嫩筍の梢
散帙書窓消永日　帙を散じて書窓　永日を消し
柴門只恐有人敲　柴門只だ恐る人の敲く有らんことを

○数椽茅屋　小さく粗末な家をいう。〈椽〉は、たるき。〈茅屋〉は、茅葺の家。○俯青郊　杜甫の七律「堂成る」詩に「江に縁って路熟し青郊に俯す」と。〈青郊〉は、春の郊外。〈俯〉は、「ミオロス」。○詭計　人をだますはかりごと。○三兎窟　三つの家。『戦国策』斉策四に「狡兎三窟有り。僅かに死を免るるのみ」と。六律「卜居二首」其二（『詩鈔』巻三）にも「計は慙づ狡兎の三窟、棲は定む鷦鷯の一枝」と。○鳩巣　他人の家を借りて住む。『詩経』周南「鵲巣」に「維れ鵲巣有れば、維れ鳩之に居る」と。〈鳩〉は、カッコウ。○散帙　書物を開いて読む。〈帙〉は、線装本を包む覆い。六朝宋・謝霊運「従弟恵連に酬ゆ」（『文選』巻二十五）に「帙を散じて知る所を問ふ」と。○柴門　柴折戸、粗末な門。あるいは、ここは門を閉ざす意か。『後漢書』楊震伝に「門を柴して賓客を絶つ」と。

「三軒、家を借りているのではなく、三度めの引っ越しをしただけで、今度も借家住まいです。前と違って市内の端っこ、閑静なところで庭には池あり、ハスの葉が大きくなり、隣庭の竹林の筍が垣根を越えるほどに伸びています」。この時の引っ越し先が、前に出てきた巌垣龍渓の住まいに隣接した借家であるかどうかは不明だが、小栗明卿がよく訪ねて来たというところとは、おそらく異なっているだろう。

なお、寛政十二年（一八〇〇）刊の『春荘賞韻』には、これまで言及した江村北海・太田玩鷗・巌垣龍渓・清田龍川・伊藤君嶺・大江玄圃・岡崎廬門・香山適園それに後述の桂洲・六如らに交じって東陽の「端文仲詞伯の春荘」と題する五律が収められている。

蝸廬市塵裏、怪得號春荘　蝸廬市塵の裏、怪しみ得たり春荘と号するを
好是煙霞疾、豈夫泉石場　好し是れ煙霞の疾、豈に夫れ泉石の場のみならんや
心閑自山野、興至便壺觴　心閑にして自ら山野、興至って便ち壺觴
詩思堪長日、臥遊何有郷　詩思　長日に堪え、臥遊　何有の郷

○蝸廬　蝸牛廬。狭く小さな家をいう。○煙霞疾　極度の自然愛好癖。『旧唐書』隠逸伝の田遊岩伝に「泉石膏肓、煙霞痼疾」と。○心閑云々　陶淵明の「飲酒二十首」其五（『古文真宝』前集に『雑詩』として収載）に「心遠ければ地も自ら偏なり」と。○何有郷　何もないところ。『荘子』逍遥遊篇に説く理想郷、「無何有之郷」。

「失礼ながら市中の陋屋にお住まいなのに、春荘と名づけられているのはとても異なことと訝しく思っておりましたが、病膏肓に入るほどの自然好きのあなたには、心のどかであればそこは山や野にいるのと同じで、興が湧くと酒徳利を傾けられる。日がな一日詩を考え、荘子のいう無何有郷にのんびり寝そべっておられる」。天明二年版の『平安人物志』に拠れば、「間之町二条上ル町」にその住まいがあった。

ちなみに、『続近世畸人伝』巻二の端文中の条には「書林なりしかど、隠操ある人にて、詩を能して名あり。天明の火にあひて大に零落す。しかれども、春荘帖と名付る書画帖を懐にして、知己の諸名家に乞てしるさしめ、此帖はおのが別荘なりとたのしめり」云々とあり、文末に六如の「端文仲を哭し、其の絶筆詩の韻に和す」詩（『六如庵詩鈔』二篇巻二）を挙げている。

※『春荘賞韻』については、その影印が堀川貴司氏の解説を附して『太平詩文・別冊・一』として刊行されている（太平書屋刊、平成十年）。

緇流――桂洲・大典・六如

ここでは学僧・詩僧として知られた人物を取り上げておく。

桂洲（正徳四年［一七一四］～寛政六年［一七九四］）

『日本詩選続編』の作者姓名に「僧桂洲　閑雲と号す。洛西天龍寺大和尚。西山延慶菴に卓錫す」と。『東山寿宴集』には見えないが、北海とは親交があった。『平安風雅集』に採録。臨済宗の高僧で、安永六年（一七七七）天龍寺二百二十一世となった。東陽より四十一歳上。先に挙げた『春荘賞韻』にも閑雲杜多の名で一首載せられている。

『詩鈔』巻四に七律「桂洲長老に贈る」詩があり、初めて桂洲に面会したことを詠じている。

法界天涼夜色澄　法界天涼しく夜色澄む
勝縁相引謁高僧　勝縁相引きて高僧に謁す
圓通禪味正三昧*　円通の禅味　正に三昧
直指宗風最上乗　直指の宗風　最上乗
秋静空山千嶂月　秋静かに空山千嶂の月
林深古殿一龕燈　林深く古殿一龕の燈
苦心慙媿書生業　苦心慙媿す書生の業
文字由來屬葛藤　文字は由來葛藤を属す

＊昧は、昧の誤字。

○法界　仏教語で、全世界。○勝縁　よきえにし。○円通　缺けることなく通達する。○直指　言葉や文字に拠らず端的に示すこと。禅の極致を表す「直指人心見性成仏」の語が『伝心法要』に見える。○千嶂月　連なる山なみにかかる月。宋・恵洪の五律「熏上人　雲渓に帰る」詩（『石門文字禅』巻九）に「夜楼千嶂の月、画榻一渓の雲」と。○一龕燈　厨子の前に供えられた灯明。晩唐・李郢の七律「長安にて徹上人を訪ぬ」に「聞道らく天台旧禅の処、石房独り一龕燈有り」と。〈龕〉は、仏像をおさめる厨子。○文字　詩文をいう。○属　つづる。

また晩秋の頃、半月にわたってその延慶庵に長逗留したことがあったようだ。七絶「嵯峨延慶菴二首」其二（『詩鈔』巻七）に云う、

方外逍遙半月留　方外に逍遙し半月留まる
茶烟禪榻飫風流　茶烟禪榻　風流飫し
白雲紅葉西山寺　白雲紅葉　西山の寺
管領詩家富貴秋　管領す詩家富貴の秋

○方外　世俗の外。仏寺をいう。○茶烟禪榻　晩唐・杜牧の七絶「禅院に題す」詩に「今日鬢糸禪榻の畔、茶烟軽く颺る落花の風」と。『三体詩』巻一に「酔後僧院に題す」として収める。〈禅榻〉は、禅寺にある横長の腰かけ。○白雲紅葉　晩唐五代の詩僧斉巳の七律「宜春江上、仰山の長老に寄す二首」其二（『白蓮集』巻八）に「白雲紅葉又た新秋」と。○管領　とりしきる。○詩家富貴秋　元・楊公遠の七絶「劉曉窓の九日の韻に次す十首」其九（『野趣有声画』巻下）に「黄花堆積し銭の流るるが若し、粧点す詩家富貴の秋を」と。素寒貧の詩人でも秋は詩興が湧き、詩嚢が豊かになる季節だという意であろう。

この桂洲は禅語の研究で知られる学僧で、禅の語録に見える俗語に注解を施した『諸録俗語解』の撰述者の一人である。

※桂洲道倫については、小畠文鼎『続禅林僧宝伝』第一輯巻之中に伝がある。芳澤勝弘編注『諸録俗語解』（禅文化研究所、平成十一年）の解説「『諸録俗語解』とその撰者について」参照。また論考に上村観光「桂洲和尚と江村北海」（「禅宗」第二一三号、大正元年。『禅林文藝史譚』所収、大鐙閣、大正八年。後に復刻版『五山文学全集』所収、昭和四十八年）、水田紀久「打旧話―雨森芳州と桂洲道倫」（「国

語国文」第四七巻第二号、昭和四十七年。後に『近世日本漢文学史論考』所収。汲古書院、昭和六十二年）がある。

大典（享保四年［一七一九］～享和元年［一八〇一］）

『日本詩選』の作者姓名に「僧顕常　字は大典、梅荘と号す。又た蕉中と号す」と。臨済宗の高僧で、安永六年（一七七七）相国寺百十四世となった。東陽より三十六歳上。東陽には、七絶「夜、蕉中禅師を訪ふ二首」（『詩鈔』巻七）がある。

月下敲門數訪偏　月下門を敲き数しば訪ふこと偏し
忘形結分宿因緣　忘形の結分　宿因緣
葛藤文字閑談話　葛藤の文字　閑談話
又妨蒲団一夜禪　又た妨ぐ蒲団一夜の禪を

○月下敲門　推敲の故事で知られる中唐・賈島の「李凝の幽居に題す」詩（『三体詩』巻三）に「僧は敲く月下の門」と。○訪偏　例えば中唐の劉長卿「病に臥して田九の寄せらるるを喜ぶ」詩（『劉随州集』巻三）に「唯だ君のみ相訪ふこと偏し」と。○忘形　年齢や僧俗の違いを忘れる。『薈瓚録』巻下に「忘形交」の条がある。○結分　結交。〈分〉は、情誼。○葛藤文字　ここでは詩文の意であろう。○蒲団　座禪する時の敷物。

其二

禪餘遊戯綵毫文　禪餘の遊戯　綵毫の文
長老名聲世普聞　長老の名声　世普く聞く
身混京塵心不染　身は京塵に混じるも心は染まらず
緇衣猶帶故山雲　緇衣は猶ほ故山の雲を帯ぶ

自注に「名声普聞は、維摩経の語」と。『維摩経』香積仏品に見える。○綵毫　五色の筆（六朝梁の江淹が夢の中でこれを晋の郭璞から授かったという）。麗しい文才をいう。○長老　禪師に対する敬称。○京塵　西晋・陸機「顧彦先の為に婦に贈る二首」其一（『文選』巻二十四）に「京洛風塵多く、素衣化して緇と為る」と。○故山雲　盛唐・王維の五律「白髪を嘆ず」詩に「惆悵す故山の雲」と。大典は近江の出である。

また天明八年に大典が古稀を迎えた際には、七律「梅荘和尚七十寿詞」（『詩鈔』巻四）を贈った。

龍門一世仰玄關　龍門一世　玄関を仰ぐ
碩學非唯冠五山　碩学　唯に五山に冠たるのみに非らず
自有文章驚海内　自ら文章の海内を驚かす有り
更看書字重人間　更に書字の人間に重んぜらるるを看る
金經証得無量壽　金経証し得たり無量の寿
丹鼎留來不老顔　丹鼎留め来たる不老の顔
韓客勾當黒衣相　韓客勾当す黒衣の相
賢勞莫厭攪清閑　賢労厭ふ莫かれ清閑を攪すを

○玄関　玄妙なる仏教世界の入り口の意を含む。○龍門　声望ある人物の喩え。○碩学　大学者。江戸期に学識すぐれた五山の高僧に授けられた称号、五山碩学の意を含む。この称号を授与されると、朝鮮修文職として朝鮮国との外交折衝にあたる任務に就いた。下文の〈韓客〉云々はそのことをいう。六如に「戊戌の冬、相国の蕉中禅師、五山の碩学に任じられ恩を謝して東武に至る」云々と題する詩（『六如庵詩鈔』巻二）がある。○文章云々　杜甫の七律「賓至る」詩に「豈に文章の海内を驚かす有らんや」と。○書字云々　その書は元の趙子昂（名は孟頫、号は松雪）の神髄を得たものという。○金経云々　仏典に『観無量寿経』がある。○丹鼎　不老不死の丹薬を作る鼎。○勾当　管轄する、担当する意。○黒衣　墨染めの衣、僧衣。南朝宋の僧慧琳が政治に参与して「黒衣の宰相」と称せられ（『仏祖通載』巻八）、わが国では南禅寺二百七世の金地院崇伝が徳川家康に仕え、寺社や外交関係の事務を掌り、「黒衣の宰相」といわれた。○賢労　苦労する意で、古くは『孟子』万章上に見えるが、

ここでは御迷惑でしょうが、の意か。

もっとも、東陽は大典の人物については後の六如の項で取り上げるように、あまり好ましく思っていなかったようだが、その詩学や語学関係の著述はこれを精力的に学んだと思われる。文政七年に刊行された『訳準笑話』は、「初学習文階梯」と銘打つように、巻末に「初学作文須用書冊」として、(1)「文語を講解する者」十三種、(2)「名物称謂を訳解する者」五種、(3)「文を作る法程を示す（者）」八種、(4)「文章を肄習するに便なる者」三種を挙げているが、そのなかに大典の『文語解』五冊（明和九年刊）が(1)に、『学語編』二冊（明和九年刊）が(2)に、『初学文談』一冊（天明四年刊）および『初学文軌』一冊（寛政十二年刊）が(3)に、『尺牘式』三冊（安永二年刊）が(4)に採られている。さらに東陽が杜甫の七律に注解を施した文化十三年刊の『杜律詳解』は、大典の『杜律発揮』（文化元年刊）を常時参看している。

その大典が詩人としての技量を高く評価していたのが、次に挙げる六如であった。

※大典については、小畠文鼎『大典禅師』（昭和二年）がある。また末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻「僧門」』（岩波書店、一九九六年）参照。

六如（享保十九年［一七三四］～享和元年［一八〇一］）

『日本詩選』の作者姓名に「僧六如　名は慈周」と。『東山寿宴集』『平安風雅』『春荘賞韻』にも見える。天台宗の学僧。東陽より二十二歳上。安永四年（一七七五）江戸に下り、天明二年十月、京にもどった六如は永田観鵞・伊藤君嶺・清田公績・巌垣龍渓・太田伯魏・端文仲・佐竹噲々らを会して宴を催した。『六如庵詩鈔』巻四に七律「窮冬十九夜、弊居小集、余西上の後甫（はじめ）て此の一閑を得、賦して諸友に示す」と題する詩があり、その自注に「此の日会する者、永俊平・伊藤士善・清君績*・岩孟厚・田伯魏・端文仲・佐貞吉、凡そ七人」と見える。佐貞吉すなわち売酒郎佐竹噲々（元文三年［一七三九］～寛政二年［一七九〇］）を除けば、これまで見てきたように、いずれも東陽と交流のあった人々である。彼らを通して、東陽は六如と相識る機会を得たものと思われる。

翌三年、顕常（大典）・江村北海および江戸の松村梅岡・伊東藍田・井上金峨の序を冠した『六如菴詩鈔』六巻三冊が上梓された際、東陽もその恵贈に与った。次に挙げる五絶「六如菴詩鈔刻成り貽（おく）らる」詩（『詩鈔』巻六）は、その礼状代わりというべき作。

篇篇總奇想、一句不尋常　篇篇総べて奇想、一句尋常ならず
淵雅驚天下、僧中有此郎　淵雅天下を驚かす、僧中に此の郎有りと

どの篇も奇抜な着想に溢れ、句作りも尋常一様のものではないと、これを称えている。〈淵雅〉は、深遠で高雅。結句は、北宋・欧陽修が韓埼から契嵩の文章を見せられ、その出来栄えに驚嘆して発した「意（おも）はざりき僧中に此の郎有るか」という語を用いる（宋・恵洪『石門文字禅』の巻二十三、「嘉祐の序」。ちなみに、『石門文字禅』には寛文四年（一六六四）刊の和刻本がある）。

また東陽は六如の無著庵で中元の月を賞でたこともあった（『詩鈔』巻七、七絶「中元夜、無著庵にて月を賞す」）。その他、七絶「六如上人に贈る」（『詩鈔』巻七）と題した作に云う、

松偃玄關晝寂然　松は玄関に偃し昼も寂然たり
幽尋得得碧雲篇　幽尋得得たり碧雲篇
淵才雅思詩中佛　淵才雅思　詩中の仏
打破葛藤文字禅　打破す葛藤文字禅

○幽尋　奥深い境地を探る意。○得得　自ら満足し楽しむさま。○碧雲篇　六朝宋の僧湯休が怨情を詠じた詩を指す。彼の詩に比擬した六朝梁の江淹「雑体詩三十首」其三十（『文選』巻三十一）に「日

暮碧雲合し、佳人殊に未だ来たらず」とあるのに拠る。○淵才雅思『石門文字禅』巻二十九「雲蓋に代はりて北禅方老を賀する書」に見える。○葛藤文字禅　ここでは（旧来の陳腐な）詩風の意か。

こうしてみると、六如とはたんに面識があるどころか、それなりの交遊があったものと思われるが、しかしながら、後年、東陽が六如に言及する際には、かなり手厳しい見方をしているのも事実で、『夜航詩話』巻二には、江戸在住の菊池五山（明和六年［一七六九］～嘉永二年［一八四九］）が、寛政十二年入京のおり皆川淇園の勧めで六如に面会しようとしたものの病気を理由に断られ、それがかなわなかったという話柄（文化四年刊『五山堂詩話』巻一）を取り上げている。

菊池五山言ふ、六如上人は詩才奇警にして、寔に方外の一敵国なり。然れども其の人と為りを聞くに、矜情作態、面目憎む可しと、故に吾れ之を見るを欲せず。恐らくは十年の情恋、一朝に灰冷せん。嘗て皆川笻斎に勧められ、一たび往きて之を候す。門下疾を以て辞す。五山終に見ざるを以て幸と為すと云ふ。昔、唐の宰相鄭畋の女、羅隠の詩を覧て諷誦して已まず。畋、才を慕ふの意有るかと疑ふ。隠貌寝陋、女、一日簾を隔て之を見る。是れ自り絶えて其の詩を詠ぜず。五山の六如に於ける、其れ斯れに類するか。然れども此の弊は、独り六如のみならず、率ね京僧の常態なり。若し生きて蕉中和尚を見しめば、其れ必ず酸水三斗を嘔かん。

六如声伎を好む。故に其の詩、酒婦人を言ふ、一にして足らず。殊に衲子の本色を失す。殆ど俗と科を同じうす。

○矜情作態　わざとらしく不自然。清・袁枚『随園詩話』巻九に見える。○羅隠　この逸話は、『旧五代史』巻十四、羅隠伝および『唐才子伝』巻九、羅隠の条に見える。○寝陋　容貌のみにくいこと。○酸水　反吐。

さらに、人品に難ありとするばかりでなく、宋詩の提唱者として世に喧伝される彼の詩についてもこれを手放しで認めていたわけではないようだ。『詩鈔』巻八に七絶「愚亭遺稿を読む」詩があり、次のように詠じている。

廼翁詩品本潭潭　　廼翁の詩品　本と潭潭
憐爾新奇更出藍　　憐れむ爾が新奇更に出藍
天假餘年盡才力　　天　餘年を仮して才力を尽さしめば
無人道著六如庵　　人の六如庵を道著すること無からん

○廼翁　乃翁と同じ。○潭潭　深くて広々としたさま。○憐　愛する、すばらしいと思う意。○道著は、言う。俗語的表現。〈著〉は、動詞の後について結果に至ることを示す。

「愚亭の父、北海は、その詩の格調はもとより広々としていたが、愚亭の詩の新しさ奇抜さはそれをはるかに凌駕しており出藍の誉れというべきである。天がもっと長生きさせて才能・能力を出し尽くさせたら、誰も六如庵のことなど言わなくなっただろうに」。

その自注に「六如倡宋詩以尖新驚人、人以僧中放翁稱之。愚亭即江村孔均、為北海長子、夙着先鞭、尤擅其妙。六如則瞠若乎其後矣。惜夫以早世不顯焉」（六如は宋詩を倡し尖新を以て人を驚かす、人は僧中の放翁を以て之を称す。愚亭は即ち江村孔均、北海の長子為り、夙に先鞭を着け、尤も其の妙を擅にす。六如は則ち其の後に瞠若たらん矣。惜しい夫、早世を以て顕はれず焉）という。〈瞠若乎其後〉は、後に取りのこされて、すべもなく目を見張るばかり、という意。『荘子』田子方篇に見える。

愚亭については、『日本詩選』の作者姓名に「江邨秉　字は孔鈞、号は愚亭、江邨綬の次子、夙恵常に異なり、九歳詩を能くし、十二文を能くし、兼ねて書画に巧みなり。其の人為る耿介不群、明和甲寅病卒す」とある。なお、その集『愚亭遺稿』には刊本がなく、その写本が美濃加納の人で龍草廬や北海に学んだ宮田嘯台（延享四年

［一七四七］～天保五年［一八三四］）の蔵書を収めた香園文庫（岐阜県立図書館蔵）に伝わる。

六如が南宋の陸游（字は務観、号は放翁）に比せられたことは、巌垣龍渓の「葛原詩話の序」にも「人以て鉢盂中の陸務観と為す」と見え、菊池五山もこれをいう。

また六如と言えば、『葛原詩話』でも知られるが、これは端文仲が校訂繕写しておいたのを書賈が聞きつけ天明七年に刊行されたもので、大典・巌垣龍渓・柴野栗山・端文仲の序が冠せられている。この書に関しても、東陽は取るべきところは取りながらも、一方で、詩話の体をなさず「詩語の摘み食い」と称したがよかろうと痛烈な批判をしている。『夜航餘話』巻上に「六如葛原詩話ハ、奇語ヲ博綜発揮シテ、詩人ノ帳秘ニ備フ。実ハ其集ノ自註ナリ。惜シムラクハ学殖菲浅ニシテ、頗ル粗浅ノ誤アリ」として、幾つかの例を挙げ、「且其書詩話ノ体ニアラス、改テ詩語鈔撮ナト号スヘキナリ」という。ちなみに、現在、池田四郎次郎編の『日本詩話叢書』に収録されている東陽の『葛原詩話糾謬』は、『葛原詩話』に東陽が備忘用に書き入れたのを齋藤拙堂が筆写したものがもとになっており、東陽はこれを世に問い六如の非を鳴らす意識があったかどうかは疑問である。

それはさておき、東陽がその瑕疵を鋭く批判するのは、先に見た清田儋叟の例もあるごとく、六如ひとりに限られたわけではなく、大典の『文語解』についても疑義を呈した例がある。これは彼が学問をする上で、他人の「応声虫」（いいなり）になることを何よりも嫌った証左であろう。

※六如については、高橋博巳「六如の生涯と詩」（「金城学院論集　国文学編」26、昭和六十二年）ほか幾つか論考があり、年譜には宗政五十緒「六如庵釈慈周年譜」（『近世の雅文学と文人―日本近世文苑の研究続編』所収、同朋舎出版、平成七年）がある。菊池五山の六如評価をめぐっては、揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』（角川叢書、平成十三年）の第九章「批判と葛藤」第一節「六如批判の底意」参照。また六如の陸游詩受容を論じたものに中島貴奈「六如と陸游」（長崎大学国語国文学会「国語と教育」第三十号、平成十七年）がある。

儒者――那波魯堂・皆川淇園・頼春水・古賀精里・藪孤山・柴野栗山

ここでは先輩の儒者に贈った詩を取り上げる。ただし、これらの作は詩友と贈答応酬した作に比べると、おおむね面白味には缺ける。概して相手の学問人品を称えることに終始しているからである。

那波魯堂（享保十二年［一七二七］～寛政元年［一七八九］）

『日本詩選』の作者姓名に「那波師曾　号魯堂。播州の人。帷を京師に下す」と。姫路の人で、京に出て岡白駒（元禄五年［一六九二］～明和四年［一七六七］）に師事し、徂徠学を学んだが、後に朱子学に転じた。東陽より二十九歳上。『詩鈔』巻七に「冬夜、那波魯堂に詣る」と題する七絶がある。この人は安永九年に阿波に赴任しているから、おそらくそれ以前の作であろう。東陽が京に遊学して間もない頃だと思われる。

當世儒宗自屬公　　当世の儒宗　自ら公に属し
文章經術並稱雄　　文章経術　並に雄と称さる
不知氷雪嚴寒夜　　知らず氷雪厳寒の夜
坐了春風和氣中　　坐了す春風和気の中

○当世儒宗　当代の儒学の大家。『類書纂要』巻十一、人事部に、この語を挙げ、「晋の賀循、朝廷の凝滞皆之を諮訪す。輒ち経礼を以て対す。当世の儒宗なり」と。『蒙求』巻上の標題にも「賀循儒宗」がある。○坐了春風　同じく『類書纂要』に「坐了春佳風」を挙げ、

「朱光庭、程明道先生に従学す。帰りて人に語って曰く、光庭春風の中に在り、坐了す一個月」と。『書言故事』にも見える。

弱齢で詩の技量がまだ十分ではないせいか、語釈に示したごとく出来合いの言葉をうまく並べた感があるのは否めないが（もっとも、詩語を如何に巧みに配置するかが問われるのが漢詩であるからそれを否定しては詩が成り立たぬのも事実だが）、一介の書生に対しても温かく接してくれた大家に感激の思いを抱いたことは伝わってくる。

ところで承句に「文章経術」と並べて記していることには注意してよかろう。東陽にとって文章と学問とは切っても切れない関係にあるもので、それを両立させることに自身のあるべき姿を見出していたからである。むろんそれは、中国の学藝においては伝統的な考えかたであって、とりたてて指摘する程のことではないと言えば、そうである。しかしながら、当時、文章にこるのを「玩物喪志」（『尚書』旅獒）として、これを斥ける北宋の程伊川（頤）流の考え方（『二程遺書』巻十六および『近思録』巻二に載せる門人劉安節との問答に見える）から大きな影響を受けた山崎闇斎派の学者のように文雅を否定するような極端な見解が一方で存在したことを考慮すれば、一般論を述べたものに過ぎぬとして軽視してよいというものでもなかろう。そして、その評価基準は、他の儒者に対しても同様であったことが後に挙げる頼春水に贈った詩およびその自注からもよく窺えるのである。

※那波魯堂については、古くは猪口繁太郎『四国正学魯堂先生』（大正五年刊）があり、年譜が附されているが、それを基にして竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』（風間書房、平成元年）の「第三章　那波魯堂」により詳細な年譜が作成されている。

皆川淇園（享保十九年［一七三四］～文化四年［一八〇七］）

『日本詩選』の作者姓名に「皆川愿　字は伯恭。淇園と号す。帷を京師に下す」とあり、『平安風雅』『春荘賞韻』にも見える。東陽より二十二歳上。東陽が在京中に贈った詩は見あたらないが、『詩鈔』巻四に七律「答へて皆川笻斎に謝す」詩があり、次のように詠じている。

萩林能事講經餘　藝林の能事　講経の餘
詩卷披來錦不如　詩巻披き来れば錦も如かず
海内大名眞泰斗　海内の大名は真に泰斗
人間至樂是琴書　人間の至楽は是れ琴書
雁池明月陪飛蓋　雁池の明月　飛蓋に陪し
竹苑清風厠曳裾　竹苑の清風　曳裾に厠ふ
野性自甘邱壑裡　野性自ら甘んず邱壑の裡
好將山長老村居　好し山長を将て村居に老いん

○藝林　藝苑。○能事　長じた才能。○詩巻　詩集。寛政四年（一七九二）に『淇園詩集』が刊行されている。○錦不如　杜甫の五律「韋韶州の寄せらるるに酬ゆ」に「新詩錦も如かず」と。○泰斗　泰山北斗の略。人々から仰ぎ尊ばれる学問の大家。『新唐書』韓愈伝賛に「学者之を仰ぐこと泰山北斗の如しと云ふ」と。○雁池　前漢の梁孝王が築いた兎園にあった池の名。貴族の庭園の池をいう。○飛蓋　蓋い付きの車を馳せること。三国魏の曹植「公讌詩」（『文選』巻二十）に「清夜西園に遊び、飛蓋相追随す」と。○曳裾　前漢・鄒陽の「書を呉王に上る」（『文選』三十九）に「何れの王の門にか長裾を曳く可からざらんや」と。『蒙求』巻上の標題に「鄒陽長裾」がある。○邱壑　丘と谷。転じて田舎。○山長　書院や私塾の長。『薈瓚録』巻下に「書院ハ私ノ学院ナリ。宋ノ世ヨリシテ処処ニ盛ナリ（中略）書院ヲ主ドル先生ヲ山長ト称ス。（中略）書院ハ多ク山ニ在ルヲ以テ山長ノ号ヲ呼ビナラワシタルナリ」と。

頸聯からは、東陽が淇園に陪して堂上家で催される詩酒の会に参じたように窺えるが、具体的にそのことを示す詩は見あたらない。

尾聯は、都会人の洗練された趣味嗜好を持ち合わせておらず、村の校長先生のまま年老いてもかまいません、という意。これまで見てきたように、詩友の太田玩鷗や巌垣龍渓らにこぼした愚口や本音を淇園には吐いていない。この一首だけからは判断しにくいものの、想像するに、東陽の心境に変化があったと考えるより、淇園に対してはそういうことをあからさまに言いたくない、そういう心理的距離が存在したのではなかろうか。

なお、『文集』巻八に「淇園の墨竹に題す」という一文があり、「往に在京の時、淇園先生の画竹を見」たが、当初はたんに形を似せた画工のそれと変わり映えしないではないかと思っていたところ、今度その幅をよくよく鑑賞したら、「筆精飛動、天趣飄逸」で、「真に墨君三昧を得て、毫髪も遺恨無し」だと得心したという。これは文化四年以後すなわち淇園没後の作らしいが、ここでは淇園を先生と称している。淇園が山水蘭竹の画を得意としていたことについては、東陽より一世代後の田能村竹田『山中人饒舌』巻下にもこれを指摘する。

ちなみに、先に大典の項で、『訳準笑話』巻末の「初学作文須用書冊」に大典の著述が挙げられていることを指摘したが、同様に淇園のそれが多く取り上げられている。『虚字解』正続四冊（天明三年刊）、『虚字詳解』十五冊（文化十年刊）、『実字解』六冊（寛政三年刊）、『助字詳解』三冊（文化十年刊）、『左伝助字法』三冊（明和六年刊）、『史記助字法』二冊（宝暦十年刊）が(1)「文語を講解する者」に、『医案類語』五冊（安永三年刊）、『訳文要訣』一冊（天明四年刊）、『淇園文訣』一冊（天明七年刊）が(3)「文を作る法程を示す［者］」に、『習文録』六冊（寛政十年刊）、『習文録甲乙判』四冊（寛政十年刊）が(4)「文章を肄習するに便なる者」に挙げられている。

ところで、東陽は京都在住の儒者の多くに対しては、学問的にあまり高い評価を下していないようで、頼春水や菅茶山と親交の深い備中鴨方の西山拙斎（享保二十年［一九三五］～寛政十年［一七九八］）に寄せた七律「備中の西子雅に寄す」詩（『詩鈔』巻四）に「洛儒多くは是れ麒麟楦」と切り捨てている。〈麒麟楦〉は、麒麟の扮装をしたロバの意で、見かけ倒し。初唐の楊炯が朝廷の高官を評した語（『太平広記』巻二六五、軽薄一に引く『朝野僉載』、『唐才子伝』巻一、楊炯の条）。そうした中で、彼が注目していたのは、当時大坂に集まっていた頼春水ら壮年の朱子学者たちであった。

※皆川淇園について、古くは天囚西村時彦『学界乃偉人』（梁江堂書店、明治四十四年、再版）がある。また高橋博巳氏の前掲書および同氏の編集・解説にかかる『近世儒家文集集成第九巻　淇園文集』（ぺりかん社、昭和六十一年）も参照。

西山拙斎には、朝森要『関西の孔子　西山拙斎』（山陽新聞社、平成十年）がある。

頼春水（延享三年［一七四六］～文化十三年［一八一六］）

『日本詩選』の作者姓名に「頼惟寛　字は千秋。安藝竹原の人。俗称弥太郎。少にして敏警、今、浪華に授徒す。二弟有り、並に有才を以て称せらる」と見える。春水は、明和三年（一七六六）二月から天明元年（一七八一）十二月、広島藩儒となって帰国するまで大坂に居住した。その間のことは「在津紀事」にまとめられている。東陽より十歳上。『詩鈔』巻四にある七律「頼千秋に贈る」詩は、東陽が京都に遊学してまだ間もない頃、大坂に下ったおりの作であろう。

吾道修來席上珍　吾が道修め来る席上の珍
舊氈冷落清貧守　旧氈冷落　清貧を守る
彈冠行會逢明主　冠を弾いて行々会らず明主に逢はん
奉檄應須慰老親　檄を奉じて応に須らく老親を慰むべし
安效鄙儒勞訓詁　安んぞ鄙儒に效ひて訓詁に労せんや

將觀大國展經綸　将に大国を観て経綸を展べんとす
文章學術如君者　文章学術　君の如き者は
千百人中一二人　千百人中に一二人

○吾道　儒学。前掲「舌耕歌」の語釈参照。○席上珍　座席上の珍宝。儒者の才学を喩えていう。『礼記』儒行篇に「儒に席上の珍、以て聘を待ち、夙夜強学して問を待ち、忠信を懐きて挙げらるるを待ち、力行し以て取るを待つ者有り」と。○旧氈　「舌耕歌」に見える「旧青氈」と同義。故郷の家を指す。○弾冠　出仕の準備をする。前漢の貢禹は親友の王吉が官に就いたとき、自分も仕官しようと冠の塵を払ってお召しを待ったという（『漢書』王吉伝）。○奉檄　親のために仕官すること。後漢の毛義は家貧しく母が老いていたため、召し抱えの通知書（檄）を受けて喜色を満面にあらわしたという。『蒙求』巻上の標題に「毛義奉檄」と。○鄙儒　見識のない役立たずの儒者。○訓詁　古典の注釈。○経綸　天下国家を治める大計。

この詩には「世儒の理学を以て自任して頭巾の気習無く、文藻の尤も観る可き者は、浪速の中井処叔・肥後の藪子厚・阿波の柴彦輔・肥前の古賀淳風等数人而已。皆千秋の友とする所なり」という自注が附されている。寛政の学界を領導することになる、朱子学派の面々について、早くからその存在に着目し動向に注意していたのである。中井処叔は、懐徳堂の中井履軒（享保七年［一七二二］～文化十四年［一八一七］）。伊賀上野での作に七律「中井履軒に贈る」（『詩鈔』巻五）がある。

なお、これは餘談になるが、『詩鈔』巻五に七律「瀬*子成に寄す」詩があり、次のように詠じられている。

才鋒到處座中驚　才鋒到る処　座中驚く
大器還看便夙成　大器還って看る便ち夙成するを
禮樂觀光遊上國　礼楽観光　上国に遊び
文章修業泝西京　文章修業　西京に泝る
烟花易溺紅裙醉　烟花溺れ易し紅裙の醉
風月能尋白社盟　風月能く尋ねん白社の盟
努力雄飛丈夫志　努力して雄飛せよ丈夫の志
青袍未必誤儒生　青袍未だ必ずしも儒生を誤らず

○大器　『老子』第四十一章の「大器晩成」をもじった表現。○夙成　早熟。○観光　他国のよいところをよく見る。『易経』観卦に「国の光を観る、用て王に賓するに利あり」から出た語。○上国　周代、王都に近い国をいう（『左氏伝』昭公二十七年）。上方。ここでは大坂を指していう。○泝　大坂から京に向かうのに淀川をさかのぼる。○烟花　春霞と花樹。元明以降、煙花市とか煙花巷といえば、花街。ここもその意を含む。○紅裙　紅色のもすそ。妓女をいう。盛唐・万楚の七律「五日、妓を観る」（『唐詩選』巻五）に「紅裙は妬殺す石榴の色」と。○白社盟　晋宋の慧遠が開いた白蓮社のような詩社の集い。○青袍云々　『三体詩』巻二に中唐・盧綸の作として載せる七律「呉中に厳士元に別る」詩に「東道若し相識の問ふに逢はば、青袍今已に儒生を誤る」と。なお、この詩は劉長卿の作とみなされている。唐代、官位の等級によって官服の色が決まっており、〈青袍〉はランクが一番下だが、初めて任官される場合いきなり高等官になることはあり得ないから、初任の服をいう。〈儒生〉は、学問をする人。もとの詩は、今も低い官職でしかなく、学問が我が身を誤らせたという意だが、東陽はそれを翻用してとにかく出仕しようと思えば、学問に励むことだ、というのであろう。ちなみに、七律「芥子泉の聘に応じて越に適くを聞く、為に此の寄有り」と題する作（『詩鈔』巻四）にも「大器由来晩成を待つ、青袍終に儒生を誤らず」と。なお、思堂と号した芥子泉（延享元年［一七四四］～文化四年［一八〇七］）は、芥川丹邱（宝永七年［一七一〇］～天明五年［一七八五］）の長子で、天明八年に越前鯖江藩儒となった。京に遊学する若者に、花街で綺麗どころにうつつを抜かさず、さあ

しっかり勉強しなさいと激励した内容であるが、この瀬子成なる人物がわからない。あるいは想像するに〈瀬〉は〈頼〉字の筆写の誤りで、頼子成すなわち春水の長子、頼山陽に寄せた詩ではなかろうか。とすれば、山陽が文化八年（一八一一）備後神辺の菅茶山のもとを去って、大坂を経て入京した際に、本詩を寄せたと考えられる。時に山陽33歳。いささか臺が立っているきらいがしないでもないが、首聯に称えるような才能の持ち主がそうざらにいるとは考えにくい。もっとも、詩の配列から見ると、文化十四年（一八一七）東陽60歳ごろの作になり、これでは山陽に寄せた詩だと言いにくくなるけれども、ただ後の葛子琴の項でも言及するように、『詩鈔』の配列にやや問題ありとすれば、あながちむげに否定できない気もするが、如何であろうか。

※「在津紀事」については、前掲、新古典文学大系本『在津紀事』参照。ただし、そこに東陽の名は見えない。なお、春水の年譜に頼山陽記念文化財団『〝詩豪〟頼春水～その生涯と書～』（平成二十一年）附載の「頼春水略年譜」がある。

古賀精里（寛延三年［一七五〇］～文化十四年［一八一七］）

名は樸、字は淳風。精里はその号。肥前佐賀の人。安永三年（一七七四）から八年（一七七九）まで、京大坂に遊学し、片山北海（名は猷、字は孝秩。享保八年［一七二三］～寛政二年［一七九〇］）を中心とする浪華混沌社の面々と交遊した。寛政三博士の一人。東陽より六歳上。次に掲げる七律「夏夕小倉泝にて古淳風に和す」（『詩鈔』巻四）は、安永八年の作であろう。

晩凉湖色爽秋同　晩涼の湖色　爽秋同じ
銀漢涵光玉宇空　銀漢光を涵して玉宇空し
蘋末風薫波瀲灩　蘋末風薫り波瀲灩
荷間露滴月玲瓏　荷間露滴り月玲瓏
乗槎客欲通天上　槎に乗りて客は天上に通ぜんと欲し
倚檻人疑坐鏡中　檻に倚りて人は鏡中に坐すかと疑ふ
萍水相逢須盡興　萍水相逢ふ須らく興を尽くすべし
明年此會各西東　明年此の会　各々西東

○小倉泝　巨椋池。〈泝〉は、水面の穏やかな湖沼の称。七絶に「小倉湖の豊公堤、月に歩む」、「小倉泝にて蓮を観る」詩（『詩鈔』巻七）がある。○銀漢　天の河。○玉宇　ここは大空をいうか。○蘋末　浮草の葉先。○瀲灩　さざなみの立つさま。畳韻語。○蘋　デンジソウ。○荷　ハス。○玲瓏　清らかなさま。双声語。○乗槎客　小舟に乗った遊客。前漢の張騫が槎に乗って黄河の源流を遡り、天の河に達したという故事をふまえる（六朝梁・宗懐『荊楚歳時記』七月の条）。○倚檻　（建物の）欄干によりかかる。○萍水相逢　偶然出会うこと。初唐・王勃「滕王閣の序」（『古文真宝』後集）に「萍水相逢ふ、尽く是れ他郷の客」と。○明年此会　杜甫の七律「九日藍田崔氏の荘」（『唐詩選』巻五）に「明年此の会知んぬ誰か健なる」と。○各西東　杜甫の五律「孟雲卿に酬ゆ」に「明朝事務に牽かれ、涙を揮って各々西東」と。

この詩が作られたときには、おそらく国元に帰ることが決まっていたのであろう。その帰国に際しては、「古賀淳風の佐賀に帰るを送る」（『詩鈔』巻七）と題する作がある。

重禽*無期涙濕襟　重会　期無く　涙　襟を湿ほす
片帆帰去海雲深　片帆帰り去りて海雲深し
神交別後相思夢　神交別後　相思の夢
天末長懸明月心　天末長く懸る明月の心

*禽は、會の誤写であろう。

○重会　再会。○片帆　一艘の船。○神交　意気投合して忘形の交わりを結ぶ。○天末　天の果て。極めて遠いところ。杜甫の五律「天末にて李白を憶ふ」詩に「凉風天末に起こり、君子意如何」と。○

明月心　盛唐・王昌齢の七絶「芙蓉楼にて辛漸を送る」詩（『唐詩選』巻七）に「寂寂たる寒江明月の心」と。

※古賀精里については、一海知義・池澤一郎『江戸漢詩選第二巻「儒者」』（岩波書店、平成八年）の解説参照。

藪孤山（享保二十年［一七三五］～享和二年［一八〇二］）

『日本詩選続編』の作者姓名に「藪慤　字は士厚。茂二郎と称す。肥後に仕へ、国学祭酒」と。孤山はその号。古賀精里は、その門人。東陽より二十二歳上。安永四年に京大坂に来遊した。東陽とは終生面識はなかったようだが、六律「肥後の藪祭酒に贈る」詩（『詩鈔』巻三）がある。

斯文夙奉庭訓　斯文夙に庭訓を奉じ
終歳窺園未曽　終歳園を窺ふこと未だ曾てせず
君子唯須一徳　君子は唯だ一徳を須ふ
聖人不必多能　聖人は必ずしも多能ならず
教明庠序才育　教へは庠序に明らかにして才をば育て
化洽邦家道弘　化は邦家に洽く道をば弘む
功業儒林軌範　功業は儒林の軌範
臨風景慕何勝　風を臨んで景慕何ぞ勝へん

○斯文　この学問の意（『論語』子罕篇）。儒学をいう。○庭訓　家庭教育。孔子が庭を小走りで通り過ぎようとした息子の鯉を呼びとめて詩や礼を学ぶ大切さを説いた故事（『論語』季氏篇）による。孤山が父の藪慎庵（元禄元年［一六八八］～延享元年［一七四四］）から教えを受けたことをいう。慎庵は徂徠に従学したが、後に朱子学に転じた。○窺園　『書言故事』巻十、地理類に「不窺園」の語を挙げ、「漢の董仲舒帷を下し、発憤して書を読み、三年園を窺はず」と。○一徳　『論語』里仁篇に「吾が道は一以て之を貫く」と。○多能　『論語』子罕篇に「吾れ少くして賤し。故に鄙事に多能なり。君子、多ならんや、多ならざるなり」と。○庠序　藩校。熊本藩の時習館を指す。○邦家　諸侯の国。熊本藩をいう。○道弘　弘道の意。押韻のため倒置する。『論語』衛霊公篇に「人能く道を弘む。道、人を弘むるに非ず」と。

また七絶「肥後の藪文学に贈る」（『詩鈔』巻七）には、次のように云う。

關西夫子德華隆　関西の夫子　徳華隆し
賦筆凌雲氣象雄　賦筆　雲を凌ぎ氣象雄なり
教育英才天下樂　英才を教育するは天下の楽しみ
滿門桃李競春風　門に満てる桃李　春風を競ふ

○関西夫子　後漢の楊震は「関西の孔子」と称せられた（『後漢書』楊震伝）。『蒙求』巻上の標題に「楊震関西」と。○凌雲　雲の上まで登る。○教育英才　『孟子』尽心上に「天下の英才を得て之を教育するは、三の楽しみなり」と。○満門桃李　俊英の士が門下に集まること。ちなみに、寛政十一年（一七九九）、古義堂の三代目伊藤東所が七十の寿を迎えたときにこれを祝した「伊藤東所の七袤の寿旦を祝す」詩（『詩鈔』巻五）にも「景仰す春風桃李の門、英才教育典刑存す」と、ここと同様の表現。

さらにもう一首、七律に「藪子厚に酬ゆ」詩（『詩鈔』巻四）がある。これは、伊賀上野での作。

關西夫子實超群　関西の夫子　実に超群
京洛諸儒孰若君　京洛の諸儒　君に孰若ぞ
庠序育人功刻石　庠序人を育て　功は石に刻む
英雄說劍氣陵雲　英雄剣を説き　気は雲を陵ぐ
蹇驢爭得行千里　蹇驢争か千里を行くを得ん
弊帚何曾直一文　弊帚何ぞ曾て一文に直せん
休問皐比鄕曲學　問ふを休めよ皐比鄕曲の学
虛名謬自大方聞　虛名　謬りて自ら大方に聞こゆ

○孰若君　貴殿の方がずっとすぐれている。「孰か君に若かん」の意。○蹇驢　びっこのロバ。愚鈍の喩え。○弊帚　破れ箒。三国魏・曹丕「『典論』論文」（『文選』巻五十二）に「里語に曰く、家に弊帚有り、之を千金に享く」と。○郷曲　辺鄙な田舎。○大方　見識ある人。

前半四句は孤山を称え、後半四句は自ら謙遜していうが、東陽の名はある程度知られていたことが窺える。

※藪孤山については、今田哲夫『宝暦の詩人藪孤山　詩とその心』（白鳳社、平成三年）がある。

柴野栗山（享保十九年［一八三四］～文化四年［一八〇七］）

『平安風雅』に「柴邦彦　栗山と号す。阿州文学、柴野氏」と。讃岐牟礼の人。東陽より二十一歳上。七絶「柴博士に寄す」（『詩鈔』巻八）がある。これは在京時の作ではないが、東陽が天明八年の大火で京都での生活基盤を失い、一時帰郷した後、江戸に赴こうとしていた時期に、「貴殿は今やはるか青雲の高みに上ってしまわれたが、この素浪人の私を気にかけて下さるでしょうか」という一種の自己宣伝を兼ねた挨拶のつもりで作った詩であろう。そこには就職口斡旋への淡い期待感を滲ませている。時に栗山は、松平定信の推輓を得て昌平黌教授に任じられていた。寛政三博士の一人。

浪迹蹉跎歳月徂　浪迹蹉跎し歳月徂く
生涯只合老江湖　生涯只だ合に江湖に老ゆべし
君今迴在青雲上　君今迴かに青雲の上に在り
能念烟波一釣徒　能く念はんや烟波の一釣徒を

○浪迹　あちらこちら漫遊すること。○蹉跎　ぐずぐずして時機を失すること。畳韻語。前に挙げた張九齢詩に「宿昔蹉跎す青雲の志」と。○歳月徂　杜甫の七古「今夕行」に「今夕何の夕べぞ歳云に徂く」と。○老江湖　宮仕えせずに在野のままで年老いること。南宋・陸游の五古「嘆を書す」（『劍南詩稿』巻七）に「世方に珉玉を乱す、吾れ其れ江湖に老いん」と。○烟波一釣徒　『書言故事』巻四、漁釣類に「釣徒」の語を挙げ、「張志和、烟波の釣徒と号す。釣を江湖に垂れて餌を設けず。志は魚に在らず」と。中唐の張志和は『新唐書』隠逸伝に立伝。

なお、ついでに記せば、『訳準笑話』巻末の(2)「名物称謂を訳解する者」に柴栗山著『雑字類編』二冊（天明六年刊）を挙げている。

※柴野栗山については、西村天囚、前掲書参照。

この他、『詩鈔』には、播州赤穂の儒者赤松滄洲（享保六年［一七二一］～享和元年［一八〇一］）の名も見える。巻六の六言絶句「東山芙蓉楼の宴会、洛下の諸賢畢く集ふ。赤松滄洲適に播自り至る。次韻して和して答ふ」がそれだが、これは省略する。

その他の学者・文人――桃西河・菅茶山・葛子琴・木村世粛

京には長期にわたって遊学する者や短期の研修に訪れる者、老いも若きもさまざまに地方から上ってきたが、そこでその他として、こうした学者文人のうち桃西河と菅茶山の二人を取り上げたい。それから、大坂在住の葛子琴と木村蒹葭堂についてもここで取り上げておく。

桃西河（寛延元年［一七四八］～文化七年［一八一〇］）

名は世明、字は君義。西河はその号。出雲松江の人。東陽より九歳上。安永三年（一一七四）、京都に遊学。皆川淇園・江村北海に師事。柴野栗山にも学んだ。皆川淇園に安永六年（一七七七）作の「桃世明の松江に帰省するを送るの序」（『淇園文集後編』巻一）が、江村北海に七律「桃君義の郷に帰るを送る」（『北海詩鈔三編』巻三）

がある。安永九年（一七八〇）江戸に出て、林鳳潭に入門。享和元年（一八〇一）家督を継いで明教館教授となった。京都遊学時に交友があったことは、次に挙げる三つの詩から窺うことができる。

まず七律「懐を雲州の桃文学に寄す」（『詩鈔』巻四）

客舎京城接巷樓　客舎京城　巷楼に接し
風流勝事毎來攜　風流勝事　毎(つね)に来り携ふ
西園雅集春零落　西園の雅集　春　零落し
南浦離愁晚慘悽　南浦の離愁　晩に慘悽たり
歳月空於忙裏過　歳月空しく忙裏に過ぎ
關山毎向夢中迷　関山毎(つね)に夢中に迷ふ
襟期望斷終天恨　襟期望断す終天の恨み
自慰相思和舊題　自ら相思を慰めて旧題に和す

○勝事　すぐれた風物。○西園雅集　北宋の米芾に「西園雅集の記」がある。○零落　寂(さび)れ廃れる。双声語。○南浦　もとは南の水辺の意。『楚辞』九歌「河伯」に「美人を南浦に送る」とあり、送別の地を指す。六朝梁・江淹「別れの賦」（『文選』巻十六）に「君を南浦に送る、傷むこと之を如何せん」と。○慘悽　双声語。○関山　国境の山々。○襟期　胸中の思い。○望断　遠望しても見えない意だが、ここは希望が断たれているの意に用いるか。○終天恨　恵洪の七律「胡卿才の時思亭」（『石門文字禅』巻十）に「功名未だ洗はず終天の恨み」と。〈終天〉は、終身の意。なお、この詩は、〈毎〉字を二度用いるが、律詩では同字の重複を避けるのがきまり。『夜航詩話』巻四にも「詩は同字を犯すを忌む。然れども義同じからずんば重複と為さず」云々と。

次に七絶「雲州桃文学に寄す」（『詩鈔』巻七）を挙げておこう。

都門分手歳華移　都門　手を分かちてより歳華移り
邈矣美人天一涯　邈たり美人　天の一涯
惟有昔遊時入夢　惟(た)だ昔遊の時に夢に入る有り
屋梁殘月照相思　屋梁の残月　相思を照らす

○分手　（つないだ手を離して）別れる。六朝梁・沈約の「范安成に別る」（『文選』巻二十）に「生平少年の日、手を別つも前期を易しとす」と。○歳華　歳月。○邈矣　はるかに遠い。〈矣〉は、感嘆を表す助字。○美人　うるはしき君子。西河を指していう。○天一涯　「古詩十九首」其一（『文選』巻二十九）に「相去ること万里、各々天の一涯に在り」と。○入夢　杜甫の五古「李白を夢む」詩（『古文真宝』前集）に「故人我が夢に入る」と。○屋梁云々　これも「李白を夢む」に「落月屋梁に満つ」と。

もう一首、七律「雲州の桃文学に報ゆ」（『詩鈔』巻五）には、

各天離恨杳音塵　各天の離恨　音塵杳たり
望斷生涯重會因　望断す生涯　重会の因
二十年前同學友　二十年前　同学の友
三千里外索居人　三千里外　索居の人
雲山愁慰相思夢　雲山　愁(なまじひ)に慰む相思の夢
風月偏傷獨坐神　風月　偏(ひとへ)に傷む独坐の神
蒼髯長為宦途客　蒼鬢　長く宦途の客と為る
桑楡暮景尚迷津　桑楡の暮景　尚(な)ほ津に迷ふ

○各天　それぞれ遠くに離ればなれでいること。前詩の「天一涯」の語釈参照。○音塵　消息。便り。○望断　前出「懐ひを雲州の桃文学に寄す」詩の語釈参照。○二十年前　下文の〈三千里外〉と対偶表現にした例として、中唐・白居易「何れの処にか酒を忘れ難き七首」其二（『白氏文集』巻五十七）に「二十年前に別れ、三千里外に行く」と。○愁　しいて。○蒼鬢　白髪交じりの鬢。○宦途　官界。役所勤め。○桑楡暮景　人生の暮れつ方。三国魏の曹植「白馬王彪に贈る」（『文選』巻二十四）に「年は桑楡の間に在り、影響追ふ能はず」と。○迷津　道に迷う。〈津〉は、渡し場の意。「人生の暮れつ方を迎えようとしている今も、自分の行く道に迷っ

ています」。

ちなみに、『葛原詩話糾謬』巻一、「蓴菜」の条に「余聞二之ヲ雲人一ニ、松江ノ鱸魚、以テ二名産ヲ一稱ス。其號スルハ二松江ト一、職トシテ是レ二之レ由ル一」云々と見える雲人（出雲の人）は、この西河であろう。

※桃西河については、佐野正巳『松江藩学芸史の研究　漢学篇』（明治書院、昭和五十六年）の「第五章　桃西河」に詳しい。

菅茶山（寛延元年［一七四八］～文政十年［一八二七］）

名は晋帥、字は礼卿。茶山はその号。備後神辺の人。東陽より九歳上。茶山は19歳の時に初めて上洛し、その後24歳にして那波魯堂に入門。西山拙斎とは同学である。それらを含め都合六回にわたって、学問修業のため京に来ているが、遊学の最後になったのが安永九年（一七八〇）33歳の時で、その折には詳細な日記をつけているものの、そこに東陽の名が見あたらない。東陽の在京中には直接会う機会はなかったようだが、茶山の命名はその耳にも届いていた。詩の配列からすれば天明五年から八年までの間の作となる七律「備後の菅礼卿に酬ゆ」（『詩鈔』巻四）に云う、

青山緑野俗塵空　青山緑野　俗塵空し
終日芸牕萬巻中　終日芸窓　万巻の中
秋水池頭蓮葉雨　秋水池頭　蓮葉の雨
夕陽門外稲花風　夕陽門外　稲花の風
親朋不妨書癡謗　親朋妨げず書癡の謗を
郷里何須武斷雄　郷里何ぞ須ひん武断の雄を
莫道費才村學究　道ふ莫かれ才を費す村学究と
聲名籍甚大都通　声名籍甚　大都通ず

○芸窓　書斎。〈芸〉は、香草。書物の防虫効果がある。○籍甚　賞賛する者が多いこと。『書言故事』巻六、声名類にこの語を挙げ、『後漢書』陸賈伝の「名声籍甚」を引く。

前半四句は、神辺の夕陽黄葉村舎をとりまく情景を想像して詠じる。後半四句「周囲から何と言われようと書痴文弱で大いにけっこうではないですか。田舎儒者だと謙遜されるには及びますまい、都では詩名が高くていらっしゃるのだから」。

※菅茶山の評伝・伝記については、富士川英郎『菅茶山』上下（福武書店、平成二年）および西原千代『菅茶山』（白帝社、平成二十二年）参照。また年表に菅茶山記念会・神辺町教育委員会編『菅茶山生誕250年記念　菅茶山略年表（草稿）』（平成十一年）がある。

葛子琴（元文四年［一七三九］～天明四年［一七八四］）

『日本詩選』の作者姓名に「葛張　橋本氏。字は子琴、蠹庵と号す。俗称貞元。浪華の人。少にして聡穎、初め詩を兄臧宗・菅甘谷に学ぶ。啻に出藍のみにあらざるなり。医を業とす」と。『東山寿宴集』にも見える。東陽より十七歳上。『詩鈔』巻六に五絶「浪華の葛子琴に寄す」詩がある。

勝遊空入夢、風月去年秋　勝遊空しく夢に入る、風月去年の秋
江閣就君宿、通宵話不休　江閣君に就いて宿し、通宵話して休まず

○勝遊　すばらしい旅。○江閣　葛子琴の居宅をいう。堂島川に架けられた玉江橋の北畔にあった。○通宵　一晩中。

葛子琴と言えば、有名な逸話を東陽は『夜航余話』に書き留めている。――浪華の鳥山世章に奉公していた下女が急に暇乞いをして、葛子琴の家に仕えたかと思えば、またまもなく辞めてしまった。下女が申すに、世章の家で詩会があると、医者や坊主が集まって一晩中ひそひそ密談を交わし、時には激昂して声を張り上げる者もいる。これは謀反を企てる一味に違いないと関わり合いになっては大変だというので、奉公先を変えて葛子琴の家に来たら、やはり同じこと。

空恐ろしくなってそれで辞めたという。その話をした葛子琴は、これは由井正雪や山県大弐の事件を語る軍書読み（講談）の影響だろうと大いに笑ったという。

なお、『詩鈔』では、この詩の八首前に寛政元年作の「釈褐三首」が置かれ、四首後に「高山彦九郎を悼む」詩がある。これは寛政五年の作と見られるから、葛子琴に寄せたこの詩は、その間に作られたということになるが、葛子琴は天明四年に没しているので、それはあり得ない。詩の配列に問題があるのであろう。

※葛子琴については、水田紀久『葛子琴　中島棕隠』（江戸漢詩人選集第六巻。岩波書店、平成五年）参照。『夜航余話』については、揖斐高、前掲書参照。

木村世粛（元文元年［一七三六］～享和二年［一八〇二］）

『日本詩選』の作者姓名に「木弘恭　字は世粛、浪華の人。木村氏、吉衛門と称す。居る所、蒹葭堂と名づく。好事博交の故を以て、其の名四方に伝播す」と。『春荘賞韻』にも見える。大坂で酒造業を営んだ豪商。屋号は坪井屋。書画典籍の蒐集や博物学で知られた好事家で、混沌社にも加わった。東陽より二十一歳上。在京時代の作に七絶、「秋夜浪華の木世粛を懐ふ」（『詩鈔』巻七）があり、題下に「世粛の居る所、蒹葭堂と号す」と注する。

金天玉露入涼秋　　金天玉露　涼秋に入る
坐向江南憶舊遊　　坐して江南に向ひ旧遊を憶ふ
詩酒清歡風月興　　詩酒清歓　風月の興
蒹葭一水望悠悠　　蒹葭一水　望め悠悠

○金天　秋。五行説で、秋は金に属する。○玉露　玉のような露。杜甫の七律「秋興八首」其一（『唐詩選』巻五）に「玉露凋傷す楓樹の林」と。○清雅　俗事に関わらぬ閑雅な楽しみ。○風月　清風明月。

さらにもう一首、題下に「世粛往に浪華を去り、北勢の海浜に卜居す。予の郷里に近し」と注する七絶「懐を木世粛に寄す」詩（『詩鈔』巻八）がある。世粛は、寛政元年に酒造の石高違反に問われ、翌年、伊勢長島に引退したが、これは当地を治める増山正賢（号は雪斎。宝暦四年［一七五四］～文政二年［一八一九］）の後援によるもので、〈北勢の海浜〉は、長島を指す。なお、世粛が大坂にもどるのは、寛政五年になってからである。

舊好依依思有餘　　旧好依依として思ひ餘り有り
滄洲遁跡水雲居　　滄洲の遁跡　水雲の居
春風郷味櫻花節　　春風郷味　桜花の節
紅艶時鮮吉鬣魚　　紅艶時鮮　吉鬣魚

○依依　心ひかれるさま。○滄洲　『夜航詩話』巻二に「詩家毎に滄洲を用ふ。蓋し滄浪を取り名と為す。朝市に対して言ふのみ。必ずしも仙島を指さざるなり」と。杜甫の七律「曲江酒に対す」に「吏情更に覚ゆ滄洲の遠きを」とあり、『杜律詳解』に「滄洲は江湖隠逸の境を謂ふ」と注する。拙稿「津阪東陽『杜律詳解』訳注稿㈣」参照。○遁跡　隠居をいう。○水雲居　水や雲が広がる地にある住まい。これも隠逸をイメージさせる語。ここは、伊勢長島を指していう。○時鮮　旬の食べ物。

結句の後に「花時、紅魚尤も美なり。俗に桜鯛と称す」と注する。

※木村世粛については、中村真一郎『木村蒹葭堂のサロン』（新潮社、平成十二年）、水田紀久『水の中央に在り　木村蒹葭堂研究』（岩波書店、平成十四年）がある。なお、世粛に来訪者や交友の記録『蒹葭堂日記』があり、水田紀久氏らによって影印・翻刻されているが、東陽の京都時代と重さなる安永八、九年および天明二年から八年（天明元年は原闕）までの記述に彼の名は見あたらない。

おわりに

安永五年（一七七六）頃に上京して以来、天明八年（一七八八）まで京都で過ごした遊学時代は東陽にとってかけがえのない第一の青春とも呼ぶべき時期であり、彼が過した十数年間は京都の詩壇もまさに活況を呈していた。経済的豊かさを背景にした自由闊達な都市の風気やそれに培われた詩人文人たちの旺盛で暢達な活動。東陽はその「寿壙誌銘」において「学ぶに常の師無し」と揚言し、ともすれば独学で一家を成したように見られやすいが、当地で結ばれた詩人や文人あるいは学者との交友が彼の詩作の技量を磨き学問形成に大きな影響を及ぼしたであろうことは、これまでに紹介してきた詩の数々からもその一斑が窺えよう。後に迎える寛政年間、伊賀上野での逆境雌伏の日々を読書に沈潜して送るなかでの精神的支えになったと思われる。そして享和を経て文化を迎えると、やがて儒者としての実力が認められて同四年（一八〇七）には津に召還され、その後、教育行政に手腕を発揮し雄飛する道筋が開けてくるようになった。

その間、天下の文運はしだいに江戸に移っていったが、今度はその江戸で東陽は時代を代表する詩人や文人、市河寛斎・亀田鵬斎・柏木如亭・大窪天民・菊池五山や大田南畝らと出合い交流する機会に恵まれることになるのである。福山侯の命を受けて『福山志料』の編纂校訂のため出府していた菅茶山との邂逅もあった。文化十一年（一八一四）八月から十二年（一八一五）五月までの江戸帯在期がそれである。時に東陽、58、59歳。あしかけ二年たらずの短い期間で国元の妻が病没するという不幸に見舞われたが、詩作の面では第二の青春時代というにふさわしい活動を見せている。上記の江戸の文人たちとの交流については、これもすでに津坂治男氏の著書に言及されているところだが、東陽の詩を中心として、私なりに次回改めてこれを探ってゆきたい。

＊　＊　＊

【資料編①】

津阪東陽、五古「古学・紹述両先生の墓を拝す」（『詩鈔』巻一）

聖人不復起、斯文孰適従
嗟彼高頭巾、穿鑿屬懸空
勃窣陷理窟、將無異端同
夫子辭闢之、廓如大道通
堂構濟其美、先業益彰隆
俱是百世師、偉哉聖門功
吾生雖後時、結髪欽遺風
盛德固難及、文章亦可宗
今日小倉山、瞻拜馬鬣封
儼然神如在、橋梓鬱葱葱
景慕情彌切、對越感無窮
碑文三復罷、祇回夕陽中

○高頭巾『薈瓚録』巻下、ヲ指シテイヘルナリ」と。ここは、（山崎闇斎派の）道学者を指して

聖人復びは起たず、斯文孰れにか適従せん
嗟　彼の高頭巾、穿鑿　懸空に属す
勃窣　理窟に陥り、将た異端に同じきこと無からんや
夫子　辞して之を闢き、廓如として大道通ず
堂構　其の美を済し、先業益ます彰隆
俱に是れ百世の師、偉なる哉　聖門の功
吾が生　時に後ると雖も、結髪より遺風を欽む
盛徳は固より及び難く、文章も亦た宗とす可し
今日小倉山、瞻拜す馬鬣封
儼然として神在すが如く、橋梓鬱として葱葱たり
景慕　情弥々切、対越　感窮まり無し
碑文三復して罷み、祇だ回る夕陽の中

頭巾気の条に「高頭巾輩ハ胡元ヨリ宋人

いう。○懸空　架空と同じ。○勃窣云々　『世説新語』文学篇に「張憑は勃窣として理の窟を為す」と。『蒙求』巻中の標題にも「張憑理窟」と。ここでは、難渋してとんでもないこじつけに陥っているという意。○将無異端同　異端の学問と同じではなかろうか、の意であろう。〈異端〉の語、『論語』為政篇に「異端を攻むるは、斯れ害あるのみ」と。○辞闢之　批判して（邪説を）しりぞける。韓愈の「進士策問十三首」其四（『韓昌黎集』巻十四）に「夫子既に没して、聖人の道明らかならず。蓋し楊・墨といふ者有って、始めて侵して乱る。（中略）孟子辞して之を闢くときは、則ち既に廓如たり」と。これは前漢・揚雄の『法言』吾子篇に「古へ楊墨路を塞ぎ、孟子辞して之を闢くこと廓如たるなり」というのに基く。〈廓如〉は、広々としたさま。○堂構　父の後を継ぐこと。『尚書』大誥の「考の室を作るが若き、既に法を底す。厥の子乃ち肯て堂せず、矧んや肯て構せんや」から出た語。○済美　『左氏伝』文公十八年に「世よ其の美を済し、其の名を隕さず」と。○百世師　百代にわたる師表。『孟子』尽心上に「聖人は、百世の師なり」と。○瞻拜　仰ぎみて拝礼する。○馬鬣封　墳墓。『礼記』檀弓上に見える。○神如在　『論語』八佾篇に「祭ること在すが如くし、神を祭ること神在すが如くす」と。○橋梓　仰ぎみる橋木と俯してみる梓木とをいう。それぞれ父道・子道を象徴する（『尚書大伝』梓材）。そこから転じて人の父子を称える語。『書言故事』巻一、父母類に見える。○葱葱　あおあおと生い茂るさま。○対越　『詩経』周頌「清廟」に「対越在天」の句が見え、旧来「越に天に在るに対す」と訓ずるが、清・王引之は対揚の意とする。○碑文　仁斎の碑文は、門人の北村可昌撰。東涯のそれは内大臣藤原常雅撰。寺田貞次『京都名家墳墓録』（山本文華堂、大正十一年）に全文を挙げる。

小栗明卿、五古「古学伊藤先生の墓に謁す」（『常山遺稿』巻上）

叔季諸儒學、多遠聖賢蹤　叔季　諸儒の学、多く聖賢の蹤に遠ざかる

大道漸榛蕪、鴻教誰弥縫　大道漸く榛蕪、鴻教誰か弥縫せん

先生時傑出、竭力拆蒙茸　先生時に傑出し、力を竭くして蒙茸を拆く

議論亦温厚、直得古學宗　議論も亦た温厚、直ちに古学の宗を得たり

吾生已相後、不得親德容　吾が生　已に相後る、徳容を親しむことを得ず

嵯峨青山裏、儼然馬鬣封　嵯峨　青山の裏、儼然　馬鬣封

日暮悲風發、蕭瑟滿長松　日暮悲風発り、蕭瑟　長松に満つ

九京不可起、嗟嘆欲安從　九京起こす可らず、嗟嘆す安くにか従はんと欲す

○叔季　末世。○榛蕪　草木が乱雑に茂る意から、荒れ果てること。○鴻教　偉大な教え。『文心彫龍』宗経篇に「経なる者は、恒久の至道、不刊の鴻教なり」と。○弥縫　縫い合わせる。補い救う。『左氏伝』僖公二十六年に見える語。○蒙茸　乱れた状態。畳韻語。○嵯峨　山が高く険しい様子。畳韻語。二尊院のある嵯峨の地名も含意する。○悲風　「古詩十九首」其十四（『文選』巻二十九）に「白楊悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す」と。○蕭瑟　風の音。さわさわ。双声語。○九京　墓地。『書言故事』巻五、墳墓類に、この語を挙げ「祖宗の墓地を称して九京と曰ふ」とし、『礼記』檀弓下を引く。

【資料編②】

五古「小栗明卿の小祥忌に墓に謁して泣きて賦す」（『詩鈔』巻一）

嗚呼吾畏友、胡為命不脩　嗚呼吾が畏友、胡為れぞ命脩からざる

形影虚相夢、魂魄何處求　形影虚しく相夢み、魂魄何処に求めん

德言猶在耳、更想才藝優　徳言猶ほ耳に在り、更に才藝の優なるを想ふ

傾蓋稱知己、意氣便相投
交久逾敬愛、情好日綢繆
儒術道論説、雅興詩唱酬
志節互砥礪、對君輒忘憂
哀哉二豎祟、百藥訖罔瘳
幽明奄相隔、緬邈作昔遊
逝水人間世、光陰浹春秋
埋骨托蕭寺、宿草夜臺幽
香火聊相吊、拜來涙先流
憶君初入京、駿譽都下周
經筵丞相府、詞翰親王樓
青雲直堪致、豈翅出一頭
若天假之年、海内更尠儔
已矣昆弟契、何物慰我愁
雖然人既朽、言存自千秋

予梓遺集、剞劂適成、故云（予、遺集を梓し、剞劂適に成る、故に云う）

傾蓋知己と称し、意気便ち相投ず
交はり久しく逾いよ敬愛し、情好日びに綢繆たり
儒術　道をば論説し、雅興　詩をば唱酬す
志節互に砥礪し、君に対すれば輒ち憂ひを忘る
哀しい哉　二豎祟り、百薬訖に瘳ゆること罔し
幽明奄ち相隔て、緬邈たり昔遊を作せしこと
逝水　人間世、光陰　春秋浹る
埋骨　蕭寺に托し、宿草　夜臺幽なり
香火聊か相弔ひ、拝し来りて涙先づ流る
憶ふ君初めて京に入りしとき、駿誉都下に周し
経筵は丞相の府、詞翰は親王の楼
青雲直ちに致すに堪ふ、豈に翅に一頭を出すのみならんや
若し天の之に年を仮さば、海内更に儔尠からん
已んぬるかな矣　昆弟の契、何物か我が愁を慰めん
人既に朽つと雖然も、言は存す自ら千秋

○小祥忌　一周忌。○傾蓋　初めて出会って、すぐに親しくなること。孔子が程子と路上で出会い、車を傘を傾けて立ち話をした故事による。『書言故事』巻三、朋友類に、この語を挙げるが、もとは『孔子家語』致思篇に見える。○綢繆　ねんごろ。畳韻語。古くは『詩経』に見える語で、前漢・李陵の作とされる「蘇武に与ふる詩三首」其二（『文選』巻二十九）に「独り觴を盈たす酒有り、子と綢繆を結ばん」と。○二豎　病魔。春秋晋の景公が病に罹り名医を呼ぼうとしたとき、ふたりの子供（二豎子）が相談する夢をみたという。「病　膏肓に入る」の故事（『左氏伝』成公十年）。○緬邈　遥かに遠いさま。西晋・潘岳「寡婦の賦」（『文選』巻十六）に「緬邈として長く乖く」とあり、五臣注に「緬邈は、長遠の貌」と。○蕭寺　仏寺。梁の武帝（蕭衍）が仏教を好み、寺を創建した際、蕭字を大書して掲げさせたという。『書言故事』巻四、釈教類に、この語を挙げる。前掲『京都名家墳墓録』によれば、明卿の墓所は堀川五条の本国寺。○宿草　一年たった草。『礼記』檀弓上に「朋友の墓は、宿草有れば哭さず焉」と。○夜台　墳墓。○出一頭　頭ひとつ分抜きん出る。○経筵　経書を講ずる席。○詞翰　詩文。〈翰〉は、筆の意。○梓　版木。上版すること。○剞劂　小刀で版木に彫ること。出版。

【資料編③】

常山遺稿序

天明甲辰春正月、小栗明卿歿シヌ矣。今茲乙巳、先タツテ祥祭之辰ニ、友人津阪君裕、上ニ木シ其ノ遺稿ヲ、問フ序ヲ於余ニ。余受テ而閲レ之ヲ、翕然トシテ起テ曰、明卿、逸羣之氣、絶倫之才、使シメハ其ヲシテ長ニ轡シ藝苑ニ、與ト世之高材疾足ニシテ、以テ為ル華騮緑耳ト者上相ヒ馳逐セ甲。玉美燦然トシテ、遺レ風ヲ騰レ雲ニ、足ニ以テ逞フスルニ其ノ神駿ヲ矣。惜カナ夫千里之稱未レ著ハレ、溘焉トシテ帰シコトヲ房星之舍ニ也。君裕之有ルハ此ノ舉ニ、可レ不ンヤ謂ハ之ヲ真ノ死友ト哉。余知ル愛ス明卿ヲ、思テ其ノ人ヲ而不レ見。今閲スレハ是ノ稿ヲ、則チ

神駿之氣、爽然於巻中。嗚呼不朽者文、謂明卿為寿、不亦可乎。

天明乙巳春二月

龍溪巖垣彦明撰

（天明甲辰春正月、小栗明卿歿しぬ。今茲乙巳、祥祭の辰に先だって、友人津阪君裕、其の遺稿を上木し、序を余に問ふ。余受けて之を閲し、翕然として起ちて曰く、明卿、逸羣の気、絶倫の才、其れをして藝苑に長轡し、世の高材疾足にして、以て華騮緑耳と為る者と相馳逐せしめば、玉美燦然として、風を遺し雲に騰し、以て其の神駿を逞しうするに足らん矣。惜しい夫千里の称未だ著はれず、溘焉として房星の舍に帰しことを。君裕の此の挙有るは、之を真の死友と謂はざる可けんや。余、明卿を知愛す、其の人を思いて見ず。今、是の稿を閲すれば、則ち神駿の気、巻中に爽然たり。嗚呼朽ちざる者は文、明卿寿を為すと謂はんも、亦た可ならずや。）

○祥祭　死後十三ヶ月めに行う祭祀。○上木　版木に彫る。上梓。○翕然　突然、急に。○長轡　長い手綱を操って馬を走らせる。○華騮・緑耳　いずれも駿馬の名。『淮南子』主術訓に「夫れ華騮・緑耳は一日にして千里を致す」と。○騰雲　雲に駕す。○溘焉　たちまち。○房星　天馬を象徴する星。○死友　『書言故事』巻三、朋友類にこの語を挙げ、「列士伝、羊角哀・左伯桃、死友為り」云々とあり、「古人の友と為る、時を同じうして生まれずと雖も、誓って必ず時を同じうして死せんことを願ふ、故に死友と曰ふ。亦た曰く、死に至るまで相背負せず」と注する。○不朽者文　初唐の宋之問「楊盈川を祭る文」に「古自り皆死あり、朽ちざる者は文なり」と。

是為亡友小栗明卿遺稿。明卿諱は世煥、常山は其の號。若狭小濱の人。自り幼穎悟好學、手不釋巻、比至弱冠、既通六経の大義に、歴史諸子、渉獵幾遍。於是来游京師、廣く與諸名儒周旋す。學殖彌く固く、才識日に長す。名士の之譽、隆々然として興る矣。朝紳諸公、延請して簡を授け、先を争いて請授簡を、争先快覩す、丞相廣幡公、特に加寵眷を、賓禮甚殷なり。既に而下帷輦轂の之下、諄々然善く誘人を、屹として有老成の典刑。従遊の之徒日衆し矣。蓋し明卿為る人耿介、立る志を高尚、専ら研讀し古經を、以名教を為に己が任。文藝小伎*、固より不之を屑せ。雖然天縦之才、於て詩に尤も富。奇題険韻、揮へば筆を立に就る。警策絶到*、幾泣し鬼神を。度る彼其の錦心繡腸、行く将為に風騒一代の之主。而して旻天不弔せ、一朝罹り病に、不幸短命にして而死す。時に天明甲辰正月、行年僅に二十二歳。嗚呼哀哉、明卿平日所に知遇する、不為に不多し、而して與に余特に綢繆。其の初て来に京師、依る余が僑居に、金蘭の之契、互に稱す知己、以て故に其の吟稿多く在余が之所に、廼ち毎に一展閲する之を、輒ち愴然感傷、涙簌々として下る、未嘗て不三たび呼て天を恨む其の不る假さ年を也。乃ち遂に慫慂して其の弟公叔を、令に編録して成る巻と、以て壽せ諸を梓に焉。但明卿於る詩に、常に不る留る稿を、故に今の之所る獲る、僅に三百餘首。其の散逸する他方の者、無る由て珠還る合浦、殊に可る惜耳。公叔葬次涕泣、黽勉従る事に、兼閲月にして而殺青就る緒を、可る謂る勤なり矣。余因て為に博く募て同好、助く剞劂之費。逾年にして板成る、傳播す四方に。嗟夫る名湮滅して而不る稱せ、古人の之所に深悲む焉。是の舉や也、雖る非ずと明卿本意乎、然も明卿身既に歿して、而著作頼に存し、不る與に骨俱に朽、猶幸なり也。古に不る言乎、詩以て觀る人を、々其る或は有に以て知ること明卿が之學術志操を於此乎。庶くは乎足る慰する明卿地下の之霊を哉。抑く亦余が之悲憾、可る以少く解く焉耳。因て序す。

天明乙巳春正月伊勢津阪孝綽撰

（是れ亡友小栗明卿の遺稿為り。明卿諱は世煥、常山は其の号。若狭小濱の人。幼き自り穎悟学を好み、手巻を釈かず、弱冠に至る比、六経の大義に通じ、歴史諸子、渉獵すること幾んど遍し。是に於いて来たりて京師に游び、広く諸名儒と周旋す。学殖彌々固く、才識日に長ず。名士の譽、隆隆然として興る矣。朝紳諸公、延請して簡を授け、先を争いて

快覩す。丞相広幡公、特に寵眷を加へ、賓礼甚だ殷なり。既にして帷を輦轂の下に下し、諄諄然として善く人を誘い、屹として老成の典刑有り。従遊の徒日に衆し矣。蓋し明卿人為る耿介、志を立つる高尚、専ら古経を研読し、名教を以て己が任と為す。文藝小技、固より之を屑とせず。然りと雖も天縦の才、詩に於いて尤も富む。奇題険韻、筆を揮へば立に就る。警策絶倒、幾んど鬼神を泣かしむ。度るに彼其の錦心繡腸、行々将に風騒一代の主と為らんとす。而して旻天弔せず、一朝病に罹り、不幸短命にして死す。時に天明甲辰正月、行年僅に二十二歳。嗚呼哀しい哉、明卿平日知遇する所、多からざると為さず、而して余と特に綢繆。其の初めて京師に来たる、余が僑居に依る。金蘭の契、互に知己と称す、故を以て其の吟稿多く余の所に在り、迺ち一たび之を展閲する毎に、輒ち愴然感傷、涙簌々として下る、未だ嘗て三たび天を呼んで其の年を仮ざるを恨まずんばあらざるなり。乃ち遂に其の弟公叔を慫慂し、編録して巻を成し、以て諸を梓に寿せしむ焉。但だ明卿詩に於ける、常に稿を留めず、故に今の獲る所、僅に三百餘首。其の他方に散逸する者、珠合浦に還るに由無く、殊に惜しむ可き耳。公叔葬次涕泣、黽勉事に従ひ、兼ねること閲月にして殺青緒に就く、勤めたりと謂ふ可し矣。余因って為に博く同好を募って、剞劂の費を助く。逾年にして板成り、四方に伝播す。嗟、夫れ名湮滅して称せられざる、古人の深く悲しむ所焉。是の挙や、明卿本意に非らずと雖も、然れども明卿身既に歿して、著作頼に存し、骨と倶に朽ちざる、猶ほ幸ひなり。古に言はざるや、詩以て人を観ると。人其れ或は以て明卿が学術志操を此に知ること有らんか。庶くは明卿地下の霊を慰めるに足らん。抑そも亦た余が悲憾、以て少しく解く可き耳。因って序す。）

○周旋　応接交際する。○輦轂　みやこ。○延請　招待。○授簡　詩文を作るよう命じる。前掲「明卿を哭す」詩の語釈参照。○争先快覩　先を争って会いたがる。○丞相広幡公　内大臣の広幡前豊。○詢詢然　丁寧に教えるさま。○誘人　『論語』子罕篇に顔回の言葉として「夫子、循循然として善く人を誘ふ」と。○典刑　典型。手本。『詩経』大雅「霊台」に「尚ほ典刑有り」と。○耿介　節操を堅く守って世に迎合しない。戦国楚の宋玉「九弁」（『楚辞』巻六）に「独り耿介にして随はず、願はくは先聖の遺教を慕はん」と。○文藝小技　杜甫の五古「華陽の柳小府に貽る」詩に「文章は一小技、道に於いて未だ尊しと為さず」と。＊〈技〉字、原文は〈伎〉に作るが、誤まりであろう。○名教　儒教。○天縦　天賦。『論語』子罕篇に子貢が孔子を評して「天縦の将聖」と。○奇題　ふつうでは詩に詠まない題目。東陽の「夢を記す」（『文集』巻八）に「広幡相公の詩筵の如きは、尤も奇題をもうけて才を試む」と。○険韻　押韻するのに字数が少ないなど使いづらい韻目。○警策　文章中の人を深く感動させる箇所（『文選』巻十七、西晋・陸機「文の賦」）。○絶倒　はなはだ敬服する。＊〈倒〉字、原文は、〈到〉に作るが誤まりであろう。○泣鬼神　杜甫の五排「李十二白に寄す二十韻」に「詩成りて鬼神を泣かしむ」と。○錦心繡腸　胸中にたくわえた詩文の才華。中唐の柳宗元「乞巧文」（『柳河東集』巻十）に「駢四儷六、錦心繡口」と。○風騒　『詩経』国風と『楚辞』離騒。○旻天不弔　天が憐れまずの意。『左氏伝』哀公十六年に見える魯の哀公が孔子を悼んだ言葉。○不幸短命而死　孔子が愛弟子の顔回についていった言葉。『論語』雍也篇および先進篇。○綢繆　親密なこと。畳韻語。○金蘭契　金属のように堅く、蘭のようにかぐわしい交わり。『易経』繫辞上伝に「二人心を同じくすれば、其の利きこと金を断ち、同心の言、其の臭しきこと蘭の如し」と。『書言故事』巻三、朋友類に「金蘭契」を挙げる。○簌々　涙がはらはらこぼれるさま。○公叔　小栗十洲（文化八年［一八一一］没）のこと。○寿諸梓　刊行して永く留める。明の王陽明『伝習録』巻下に「衆皆翻録を憚る、乃ち謀りて諸を梓に寿せしむ」と。〈梓〉は、版木。○珠還合浦　合浦（広東省）は真珠貝の産地で年貢代わりに乱獲すると、真珠貝は隣の郡に逃げ出したが、循良な長官が治めるとまた戻って来たという（『後漢書』循吏伝、孟

嘗伝）。そこから物が元の持ち主に戻ること。○黽勉従事　『詩経』小雅「十月之交」に見える。〈黽勉〉は、努め励むさま。双声語。○閲月　一個月。〈閲〉は、経る意。○殺青　竹の油抜きをして竹簡を作ることから、校書すること。○就緒　とりかかる。『詩経』大雅「常武」に見える語。○可謂勤矣　頑張ってよくやったいえよう、の意。韓愈「進学解」（『韓昌黎集』巻十二）に「先生の業、勤めたりと謂ふ可し矣」と。○剞劂費　出版費。○逾年　年を越える。○名湮滅云々　『史記』伯夷伝に「名湮滅して称せられず、悲しい夫」と。○古人　前漢の司馬遷。

※この序は、『文集』巻一に収めるものとの間にかなり異同がある。例えば、ここでは父祖の事績に触れられていないが、『文集』では、「常山其號」以下を「若狭小濱名家、鶴皐先生元愷乃其祖父也」に作る。鶴皐ついては、『日本詩選』に「小栗元愷　字は子佐、鶴皐と号す。若狭小浜の人」と。なお、向嶋成美氏に「若狭小浜の漢詩人、小栗鶴皐とその詩について」（「斯文」第一一八号、平成二十一年）がある。

また、明卿の弟、公叔を『文集』では光胤に作るが、十洲と号し書画を善くしたこの人については、寛政三年頃の作に「懐を小栗十洲に寄す、長崎に在り」と題する七絶（『詩鈔』巻八）がある。

京洛交游意氣親　　京洛の交游意気親し
花飛蝶駭十三春　　花飛び蝶駭く十三春
為羇終世窮途恨　　羇と為りて世を終ふ窮途の恨み
羨尓東西南北人　　羨む爾東西南北の人

○花飛蝶駭　晩春の情景。春が過ぎゆくこと。晩唐・陸亀蒙の七絶「鄴宮」（『三体詩』巻一）に「花飛び蝶駭きて人を愁えしめず」と。○為羇終世　他郷にさすらって生涯を終える。『左氏伝』昭公十三年に見える語。○東西南北人　気ままに各地を旅する自由人。盛唐・高適の七古「人日杜二拾遺に寄す」（『古文真宝』前集、『唐詩選』巻二）に「愧づ爾東西南北の人」と。もとは『礼記』檀弓上に、孔子が自らを「今、丘や東西南北の人なり」といったのに基く。官職を求めて諸国を放浪するというのが、その本来の意味。

長崎へは画の修業のために赴いていたのであろうか。ちなみに後年、文化五年（一八〇八）冬、柏木如亭が入洛して十洲と親交を結び、「七友歌」を贈っている。

世所稱才子者不爲不多。而奇才如明卿者、果有幾人。余未多見其比儔也。使明卿得壽考乎、海内文名必有帰焉。苗而不秀可悲夫。余恠天已寵明卿、以斯奇才、奚為不假以歳月乎。天道夢々、孰得其解。往余男秉亦頗以俊才采。潜喜吾業有託、而一朝溘焉死矣。後得明卿、余視猶秉、又潜喜吾業有所託、而天復奪明卿、其謂之何。顧余無状得天、迷深重若斯耶。常山遺稿刻成、弟公叔請余題言、乃録之以寓懺悔之意云。

天明乙巳春正月　　北海江邨綬撰

（世の才子と称する所の者は多からずと為さず。而れども奇才明卿の如き者は、果して幾人か有る。余、未だ多くは其の比儔を見ざるなり。明卿をして壽考を得しめんか、海内の文名必ず焉に帰する有らん。苗にして秀でざる、悲しむ可きかな。余怪しむ天已に明卿を寵するに、斯の奇才を以てするに、奚為ぞ仮すに歳月を以てせざるやと。天道夢々、孰れか其の解を得ん。往に余が男秉も亦た頗る俊才を以て采せらる。潜に喜ぶ吾が業託する有るを、而れども一朝溘焉として死せり矣。後に明卿を得て、余視ること猶ほ秉のごとく、又た潜に喜ぶ吾が業の託する所有るを、而れども天復た明卿を奪ふ、其れ之を何と謂はんや。顧だ余、得天を状する無く、迷ひ深重斯の若き耶。常山遺稿刻成り、弟公叔、余に題言を請ふ、乃ち之を録して以て懺悔の意を寓すと云ふ。）

○比儔　同類。○寿考　長寿（『詩経』大雅「棫樸」）。○苗而不秀　『論語』子罕篇に見える語。○夢夢　はっきりしないさま。『詩経』小雅「正月」に「天を視るに夢夢たり」と。○溘焉　にわかに。○得天　天の

助けを得ること（『左氏伝』僖公二十八年）。

【資料編④】

與柚南畝（柚南畝に与ふ）

昔遊一場春夢、別來行復四年、思慕光霽德容、未嘗不羹墻於懷也。時維夏五、溽暑駸々逼人、不審近況作何狀、想亦左圖右書、優游自如、著述倍紛綸否。頃日人或傳足下不安其土、欲設帷於京師、僕聞之頗懷市虎之疑、審爾甚爲左計。

（昔遊は一場の春夢、別れて来行ゆく復た四年、光霽德容を思慕し、未だ嘗て懐に羹墻せずんばあらざるなり。時に維れ夏五、溽暑駸々として人に逼る。近況何の狀を作すかを審らかにせず、想ふに亦た図を左にし書を右にして、優游自如、著述倍々紛綸たるや否や。頃日人或いは伝ふらく足下は其の土に安んぜず、帷を京師に設けんと欲すと、僕之を聞き頗る市虎の疑を懐く、審に爾とせば甚だ左計と為す。）

○光霽德容　すぐれた風采。尺牘用語。○羹墻　思慕する。『後漢書』李固伝に舜が堯を慕って「坐すれば則ち堯を墻に見、食すれば則ち羹に堯を覩る」ありさまであったという。○溽暑　蒸し暑さ。古くは『礼記』月令、季夏之月に見える。○駸々　盛んなさま。○左図右書　左右に書物を積み上げる。○優游自如　ゆったりのんびりと過ごすこと。○紛綸　多いさま。○安其土　生まれ故郷に安住する。『礼記』哀公問に「其の身を有つこと能はざれば、土に安んずること能はず」と。○設帷　塾を開く。○市虎　あらぬ噂。市中にトラがいると一人二人が言っても信じる者はいないが、三人が言えば皆それを信じる（『戦国策』魏策二）。○左計　拙策。まずい計画。

夫輦轂之下、固人文之淵藪、舌耕開肆、絳帳如雲、然其升講席者、率皆青囊之子、其餘則浮屠氏耳。此輩爲學自有専門之業、餘力染指斯文、不過略識字綴詩以装體面向上其術而已。故其學未至小成則已弁髦之、比々皆是也。乃就其師也、亦聚散無定、或聞某先生精某書、則輒往聽其講、朝升此席、夕入彼門、一人幾師、無所底止、徒爲邯鄲之歩、卒之多岐亡羊。孺子可教、充育英之樂者、豈可得哉。是以輕薄成風、不復知師道之可敬、入門無束脩之礼、往々白手投謁、所謂五節謝敬、亦捐花銀三四錢耳。或有迫其期則輒颺去者、不亦甚乎。人非神仙、須仰衣食而喫著不給、何以生活哉。僕自弱冠薄遊輦下、嘗因人之勸、抗顔坐皐比、門徒輻湊、頗稱隆盛、値其講日、則盥漱未畢、而戸外之屨已盈矣。其務苦口辨析、唇焦嗌嗄、三寸欲裂、勞良甚矣。然餬口之不及、豈代耕之足云。壁立之室、困於屨*空、動輒有夫子陳蔡之色、吁講師之業、徒自辱道耳。是以遂斷捲帳、不復弄嘴于茲。幸遊事王門、及爲朝紳諸公延請而得不填溝壑矣。今而思之、良以自咲也。

（夫れ輦轂の下、固より人文の淵藪、舌耕肆を開き、絳帳雲の如し、然れども其の講席に升る者は、率ね皆青嚢の子、其の餘は則ち浮屠氏耳。此の輩学を為すに自ら専門の業有り、餘力指を斯文に染む、略ぼ字を識り詩を綴り以て体面を装ひ其の術を向上する而已。故に其の学未だ小成に至らずして則ち已に之を弁髦とし、比々皆是れなり。乃ち其の師に就くや、亦た聚散定め無く、或いは某先生は某書に精しと聞けば、則ち輒ち往きて其の講を聴き、朝に此の席に升り、夕に彼の門に入る、一人にして幾師、底止する所無く、徒に邯鄲の歩を為し、之を多岐亡羊に卒ふ。孺子教ふ可く、育英の楽しみに充つる者、豈に得可けんや。是れ以て軽薄風を成し、復た師道の敬す可きを知らず、入門するに束脩の礼無く、往々にして白手にて投謁し、所謂五節の謝敬、亦た花銀三四錢を捐する耳。或いは其の期に迫れば則ち輒ち颺去する者有り、亦た甚しからずや。人は神仙に非ず、須らく衣食を仰ぐべくして喫著給せず、何を以て生活せんや。僕は弱冠自り輦下に薄遊し、嘗て人の勧めに因って、抗顔して皐比に坐し、門徒輻湊し、頗る隆盛と称せらる、其の講日に値へば、則ち盥漱未だ畢らざるに、戸外の屨已に盈てり矣。其の務めは口を苦くして

辨析し、唇焦げ嗌嗄れ、三寸裂けんと欲し、労良に甚し矣。然れども餬口の及ばざる、豈に代耕の云ふに足らんや。壁立の室、屢々空しきに困ず、動もすれば輒ち夫子陳蔡の色有り、吁、講師の業、徒自に道を辱める耳。是れ以て遂に断じて帳を捲き、復た嘴を茲に弄せず。幸ひに王門に遊事し、朝紳諸公の為に延請せらるるに及んで溝壑に填まざるを得ん矣。今にして之を思へば、良に以て自ら咲ふなり。）

○輦轂　みやこ。○淵藪　集まる場所。○絳帳　講席。私塾をいう。後漢の馬融が教授するのに「常に高堂に坐し、絳沙帳を施し、前に生徒に授け、後に女楽を列ね」たという故事（『後漢書』馬融伝）による。○如雲　はなはだ多いことをいう（『詩経』鄭風「出其東門」）。○青囊　薬を入れた袋の意から、医者をいう。○浮屠　僧侶。ブッダの音訳語。○弁髦　不要のもの（『左氏伝』昭公九年）。〈弁〉は元服に用いる冠、〈髦〉は子供の垂れ髪の意。成人すれば不要となる。○比比どれもみな。○無所底止　きりがない。○邯鄲歩　虻蜂とらず。戦国燕の寿陵の若者が趙の都邯鄲に行き、優雅な歩き方を学んだが習得せぬうちに元の歩き方を忘れ、腹ばいになって国に帰ったという（『荘子』秋水篇）。○多岐亡羊　本来の目的を見失う。逃げた羊を分かれ道で見失う（『列子』説符篇）。○孺子可教　この小僧見どころがある、という意（『史記』留侯世家）。○束脩　入門して教えを乞うときの手土産（『論語』述而篇）。入門料。○白手　手ぶらで。○五節　人日・上巳・端午・七夕・重陽をいう。○花銀　純銀。○颺去　ずらかる。○人非神仙云々　三国魏・応璩「韋仲将に答ふる書」（『藝文類聚』巻三十五に引く）に、「人は神仙に非らず、須らく衣食を仰ぐべし」と。○喫著　食べ物・着る物。○弱冠　二十歳（『礼記』曲礼上）。○薄遊　漫遊。○抗顔　厳めしい顔つき。○皐比　講席。○輻湊　四方から集まる。○盥漱　顔を洗い（盥）、口を漱ぐ。○戸外之履前掲「舌耕歌」に「戸に屨満つ」と。その語釈参照。○三寸　舌。○屢空　『論語』先進篇に「（顔）回や其れ庶きか、屢々空し」と。○夫子陳蔡色　飢えた顔つき。孔子とその弟子が諸国放浪の途上、陳・蔡の地で迫害され、糧食を断たれた故事（『史記』孔子世家）による。○今而思之　この言い方、韓愈「李翺に与ふる書」（『韓昌黎集』巻十六）に見える。

且夫長安物貴、居大不易、燃桂食玉、生理甚苦。於是市井之人、皆纎嗇委瑣、數米而炊、秤薪而焚、率恒茗粥塩虀、僅充腹而已。尤不可耐者、其俗脂韋、阿而少意氣、狡而多首鼠、習於文飾機巧、善爲辨佞應對、卽傭奴爨婢亦皆嫺熟、一呼再諾、周旋如舞、而視四方之人、皆以爲椎魯可咲、百虚一實、唯利是視、苟利之可射、蠶絲秋毫、無微不拆。天下之人、傳以爲口實、誠不虚也。是以人有金則嫗媧、無則不之齒。苟失路困窮、恝焉路視聽其生死、則京城雖廣、託足無所。豈非尤難居之地耶。

（且つ夫れ長安は物貴く、居ること大いに易からず、桂を燃やし玉を食ふ、生理甚だ苦し。是に於いて市井の人、皆纎嗇委瑣、米を数へて炊き、薪を秤りて焚く、率ね恒に茗粥塩虀、僅に腹を充たす而已。尤も耐ふ可からざる者は、其の俗脂韋、阿りて意気少なく、狡にして首鼠多く、文飾機巧に習い、善く辨佞応対を成すこと、即ち傭奴爨婢も亦た皆嫺熟し、一たび呼べば再諾し、周旋舞ふが如し。而して四方の人を視るに、皆以て椎魯咲ふ可しと為す。百虚一實、唯だ利を是れ視、苟も利の射す可き、蠶絲秋毫、微として拆せざるは無し。天下の人、伝へて以て口実と為す、誠に虚ならざるなり。是れ以て人の金有らば、則ち嫗媧し、無ければ則ち之を歯せず。苟も失路困窮、恝焉として路に其の生死を視聴す。則ち京城広しと雖も、足を託するに所無し。豈に尤も居り難きの地に非ずや。）

○長安云々　「舌耕歌」に「長安物貴く」云々と。その語釈参照。○燃桂食玉　これも「舌耕歌」に「桂玉の地」と見える。その語釈参照。○生理　生計。○纎嗇　吝嗇。○委瑣　やたらと細かいことに拘る。○数米而炊　『夜航詩話』巻二に「朝野僉載に、韋荘性倹に米を数へて炊き、薪を秤りて爨ぎ、一緇少なければ而ち之を覚る」云々と。『朝野僉載』は、初唐の張鷟撰。ここに挙げるのは、『太平広記』巻

一六五、吝嗇に引く。東陽は、晩唐の韋莊のことと解するが、おそらく元は同姓同名の別人。『唐才子伝』巻十、韋莊の条にも挙げるのも、同様。○茗粥塩虀、茶粥に漬物。○脂韋　媚び諂う。○首鼠　どっちつかず。ネズミは疑い深く巣穴から首を出したり引っこめたりすることからいう（『史記』魏其武安侯伝）。『書言故事』巻六、評論類にも挙げる。○機巧　巧智。『荘子』天地篇に「功利機巧、必ず夫の人の心に忘る」と。○辨佞　口先だけで調子を合わせる。○傭奴爨婦　傭の下男、飯炊きの下女。○嫺熟　習熟。○一呼再諾　『韓詩外伝』巻五に「前に当たって意を決し一呼再諾する者は人の隷なり」と。○唯利是視　この言い方『左氏伝』成公十三年に見える。○利之可射〈射〉は、追い求める。○蚕糸秋毫　非常に細かいもの。○無微不拆　僅かな利益でも拘らずにおれない。〈拆〉は、分別の意。○椎魯　融通機転が利かないこと。○嫗媧　腰をおりまげる。○託足無所　足を置くところがない（『世説新語』識鑒篇）。○恝焉　まるっきり気に留めないさま。＊〈恝焉路視聴其生死〉と〈則京城〉との間に脱文があるのではなかろうか、文意がうまくつながらない。

夫君子舉事、必慎終于始、世儒窘於窮途、動至墜志枉道、皆不慎始之過、前轍寔多、豈可不監哉。竊惟足下之家、中人十家之産、自奉固有贏餘、非窮猿投林之比。傳曰、鳥能擇木。況人之處其身、豈可不能擇邪。敢請三思可也。僕於足下承斷金之交久矣。苟有所懐、不敢不盡也。今聞人之所傳、憂心悄々、不容緘默、猥陳固陋、傾倒肝膽、臨措*易*勝悚惕之至、惟高明炳亮、幸勿以狂妄罪之、維莫之春、餘寒未艾、若時珍嗇、不悉。

（夫れ君子の挙事、必ず終を慎むに始めに于てす、世儒窮途に窘められ、動もすれば志を墜し道を枉ぐるに至る、皆始めを慎まざるの過ち、前轍寔に多し、豈に監みざる可けん哉。窃に惟ふに足下の家、中人十家の産、自ら奉じて固より贏餘有り、窮猿投林の比に非ず。伝に曰く、鳥能く樹を択ぶ。況んや人の其の身を居処する、豈に択ぶ能はざる可けんや。敢へて請ふ三思して可なり。僕の足下に於ける断金の交を承ること久し矣。苟も懐ふ所有らば、敢へて尽くさずんばあらざるなり。今、人の伝ふる所を聞くに、憂心悄々、容に緘默すべからず、猥りに固陋を陳ぶ、肝膽を傾倒して、楮に臨んで曷ぞ悚惕の至りに勝えん、惟だ高明炳亮、幸ひに狂妄を以て之を罪する勿れ、維れ莫の春、餘寒未だ艾まず、若時珍嗇せよ、不悉。）

○挙事　物事を実行する。○慎終于始　終りをよくしようとすれば、その初めを慎まねばならない、という意。『尚書』太甲に見える語。○中人十家産　格別、金持ちでも貧乏でもないこと。『漢書』文帝紀の賛に「百金は、中人十家の産なり」とあり、唐・顔師古の注に「富ならず貧ならざるを謂ふ」と。○贏餘　余裕。○窮猿投林　東晋の李弘度（充）が仕官の口を求めて「窮猿林を奔るに、豈に木を択ぶに暇有らんや」といった言葉（世説新語）言語篇）に基づく。『書言故事』巻十二、禽獣比喩類にも、この語を挙げる。○鳥能択木　『左氏伝』哀公十一年に孔子の言葉として「鳥は則ち木を択ぶ、木豈に能く鳥を択ばん」と。○憂心悄悄　『詩経』邶風「柏舟」に見える。〈悄悄〉は、憂えるさま。○三思　三度考える。『論語』公冶長篇に季文子が「三たび思ひて然る後に行ふ」のを聞いた孔子が「再びせば斯れ可なり」と。○断金之交　『易経』繫辞上伝の「二人心を同じうすれば、其の利きこと金を断つ」から出た語。○臨措*易*勝云々、〈措〉は〈楮〉の、〈易〉は〈曷〉の誤写。書き下しは、訂正したものに拠る。釈大典の『尺牘語式』上巻の第十五結事に「臨楮曷勝懇惻之至」を、同じく下巻の書東結語に「臨稟曷勝悚惕之至」を挙げる。○悚惕　おそれおののく。○高明炳亮　貴君は聡明でいらっしゃるから、の意。なお、〈高明〉の語、『尺牘語式』下巻に「称人」として、これを挙げる。○維莫之春　『詩経』周頌「臣工」に見える表現。○若時　この時、現在。○珍嗇　御身ご大切に、の意。尺牘用語。○不悉　これも尺牘用語。『尺牘語式』上巻の第十八結尾に、この語を挙げ「言ヲノベツクサヌ意」

と注する。

※柚木南畝については、『日本詩選続編』の作者姓名に「柚木孟穀　字は南畝。久米と称す。江州下廻村の人。伯華の孫、仲素の姪孫」とあり『東山寿宴集』にも収録。寛政元年（一七八九）刊の『龍川詩鈔』には校者として、その名が見える。また、東陽に寛政三年（一七九一）頃の作「柚南畝に贈る」詩（『詩鈔』巻八）があり、

昔遊如夢歳華過　昔遊夢の如く歳華過ぎ
結客場中意氣多　結客場中　意気多し
燕市酒酣慷慨甚　燕市酒酣（たけなは）にして慷慨甚し
秋風擊筑和悲歌　秋風擊筑　悲歌に和す

○歳華　歳月。○結客場中　血気盛んな若者同士が交友を結んでたむろする盛り場。楽府題に「結客少年場行」がある。○燕市・擊筑・悲歌　前出「春日、伯祺に寄す」の語釈参照。

と詠じている。

＊　＊　＊

前稿補訂

津阪東陽「寿壙誌銘」訳注稿（「文化情報学部紀要」第十四巻）

154頁下段5行目　と底本とし→を底本とし
154頁下段23行目　子、亮節諱は→子、亮節君諱は
155頁下段15行目　子の亮節、→子の亮節君、
161頁下段7行目　○梶井王府の箇所に追加。天明五年（一七八五）作の「文運説」（『文集』巻五）には、「梶井王府侍読学士津阪孝綽、謹んで稽古精舎に記す」とある。
160頁上段24行目　豈に代耕之足らんやと云ふ→豈（あ）に代耕之（これ）云ふに足らんや
161頁下段1行目　籐堂光寛→藤堂光寛
161頁下段3行目　籐堂家→藤堂家
161頁下段12行目　貫主の弟子→貫首の弟子
161頁下段16行目　その「寿碣銘」）。の後に追加。なお、〈貫首弟子〉の語、孔安国の作とされる「古文孝経の序に見える。
162頁下段20行目　諷少二貶損→諷少二貶損一
164頁下段11行目　それともに→それとともに
170頁上段4行目　〈貫主〉は、トップ。貫首。→〈貫首〉は、トップ。貫主。
170頁下段5行目　道具→道真
173頁上段4行目　終に容に已（つひ）むべからざるなり。→終（つひ）に容（まま）れざるのみなり。
173頁下段20行目　績年の漫稿→積年の漫稿
174頁上段1行目　○扼腕に追加。『訳準笑話』続増第四六則に「扼腕」の語が見え、「コブシヲニギリ」と左訓を施す。
175頁下段21行目　腕を握りしめ→拳を握りしめ
175頁下段23行目　ついに受け入れられないのだ。→自分の気性は結局免れないのだ。
180頁上段13行目　あることを→があることを

この他、「五、戊辰の新政」において述べられている刑法改革、すなわち死刑・放逐の外に徒刑を新設するという東陽の建議およびその実現については、高塩博「津藩の『揚り者』という刑罰―徒刑思想波及の一事例」（「栃木史学」十二号、平成十年。後に『近世刑罰制度論考』所収、成文堂、平成二十五年）に詳しく見える。

「寿壙誌銘」訳注稿の誤記については、澤崎久和・高橋良行・古川末喜の各氏からもそれぞれ御指摘いただいた。特に古川氏からはP172下段6行目「終不容已也」の解釈について、懇切な御教示を受けた。記して感謝する。

（二〇一五・一〇・一一初稿）
（二〇一五・一一・一六補筆）

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
E-mail：ninomiya@sugiyama-u.ac.jp